LOST　SPIRIT

井上志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＳＴ　ＳＰＩＲＩＴ

【Ｎコード】
Ｎ００８７Ｉ

【作者名】
井上志保

【あらすじ】
孤児で人にいつも倦厭されながら、冴えない人生をおくってきた女子高校生ユメ。いつものお気に入りの場所に出かけたつもりが、気が付いたら目の前には黒い獣のような魔物。問答無用にユメに襲い掛かる。ユメの目の前に現れる、不思議な美少年。飛ばされたのは精霊の世界。「自分は何者なのか？」皆がユメに問う。答えを見つけるため動き出したユメは図らずも、国の第二王子であるラクスと共に精霊界の秘密、陰謀、悲劇へと巻き込まれていく。王道異世界トリップ物語。

登場人物・用語解説

ユメ
主人公。人間界から精霊の世界へと飛ばされた。
人間の世界では子供の頃から両親がおらず、あまり友達もいなかった。
何事にも無頓着、どこか諦観するようなところがあったが、精霊の世界に来て以来、
少しずつ変わっていく。

ラクス
森の洋館の主。実は精霊の国王の息子、第二王子。
冷静沈着、クールな一方どこか冷淡なところもあるが、社交場の笑みは得意で
あまり感情を表に出さない。
ただし、イグニフェルだけには、嫌悪感を露にする。
過去のこと、家族のことはあまり話したがらない。

フローラ
花の精霊の長老の孫。ラクスの許婚。
容姿端麗、基本明るく優しい性格。
ラクスには一途に想いを寄せており、何かと世話をやく。
ラクスの過去に関わっているらしい節がある。

レニタス

ラクスの執事。風の精霊。
常に他人に対して穏やかで、よく気が利く。
仕事はいつも卒なくこなす。
ラクスだけでなく国王からの信頼も厚いらしい。

七大貴族

日(ひ)の精霊の頭首　ソラ
クールで物腰穏やか。
ユメによると、レニタスの若い頃を再現した感じ。
赤毛の長髪をいつも束ねている。
貴族の中でもかなりの力の持ち主。

月(つき)の精霊の頭首　ゲントゥム
気難しい性格。老齢。
昔ディセムという娘を謎の事件にて亡くした。
王族と相容れないという噂が絶えない。
若い頃は貴族の中での随一の術使いと言われた。
現在もかなりの力を有しているが、以前に比べると……。

火(か)の精霊の頭首　イグニフェル
天真爛漫、元気な性格。
ラクスとは幼い頃からの知り合いらしい。
小さい頃はラクスを嫌悪していたが、ある事件をきっかけにラクスを好くようになる。

が、ラクスからはいつもうざがられている。

水(みず)の精霊の頭首　マレ
子供のような容姿の持ち主。口調も、子供のような話し方をする。
陽気な性格で、貴族の中では一番若い。
頭首であることに不安を感じる者も少なくないが、実はちゃっかりしており問題なく役目を務める。

木(き)の精霊の頭首　アルボア
長身で、エメラルドグリーンの長い髪の持ち主。
才色兼備。おしとやかな性格だが、かなりの精民想い。
フローラの憧れ。癒しの術が得意。
実はアウルムが苦手。

石(いし)の精霊の頭首　アウルム
いつも派手な格好をしている女頭首。
男勝りで、アルボアとはあまり気があわない。
けれど、優しい一面ももつ。
きらきら光るものに目がない。

土(つち)の精霊の頭首　ルチア
低い身長で、太った体格。
自慢は茶色の髭。
あまり争いを好まない。地下にある巨大なお城に住むらしい。
実はかなりの愛妻家。

王族　光の精霊

精霊界では闇の精霊と共に一番強い力を有すると言われている。
アクロピアに王宮をもつ。

国王
ラクスの父。
不治の病にかかっているという噂があるが……？

第一王子　ウーヌム
ラクスの兄。異母兄弟。
ラクスとは仲が悪いらしい。
妾と国王の子供だが、ラクスよりも６年早く生まれたので第一王子となった。

（故）王妃　オルビス
ラクスがまだ幼い時に事故で亡くなる。
実はディセムとは無二の親友であった。
ラクスと同じ透き通ったエメラルドグリーンの瞳をもつ。

闇の精霊
光の精霊と共に執政を行っていたが、陰謀を企てそれに失敗したため、１０００年前にアクロピアより、古都で廃墟となったラヴァの

地に左遷される。
光の精霊と同等の強い力を有するが、追放時は光の精霊に貴族たちが加担したため適わずに、ラヴァへと追いやられ、また強い結界を張られたためにその地から出られなくなった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

用語解説

精霊
オリゴに拠って精霊界に生きる生き物。ほとんど人間と変わらない姿をしている。
オリゴからエナジーを摂取する力、サンギスという力を持っているが、歳をとることでこの能力が徐々に衰え、完全に亡くなると死んでしまう。
またオリゴが破壊されても、エナジーが摂取できなくなり、身体に影響を及ぼす。

精霊界
人間界の隣にあるといわれる世界だが、分け隔てる入り口や壁があるわけでもない。
レニタスによれば、人間界の鏡のような世界。

ダークリット
精霊の残滓。

魔物化としており、見境なく精霊に襲い掛かる。
出現し出したのは最近のこと。
謎が多い。闇の精霊と関係しているという噂があるが……？

オルゴ
人間界に存在する、精霊達の力のゆえん。拠り所。
精霊によって、オリゴの大きさ・範囲はまちまち。
オルゴが破壊されると、精霊の力が弱まる、あるいは死んでしまう場合も。

エナジー
オルゴのから得た、精霊達が有する力。
エナジーを使って、術を使うことができる。
また同時に命の源のため、術を使いすぎると身体、ひどい場合は生命に影響を及ぼす。

サンギス
オルゴからエナジーを摂取する力。
井戸のような役割を果たしている。
精霊の寿命と密接に関係している。
また術によってサンギスが破壊されてしまうことも。

理不尽な始まり

何かを選ぶということ、それは何かを得、何かを失うということ。
誰もが分かれ道に突き当たるたびに、得て失って、そして先へと進む。

何が正しいかなんて、「答え」はどこにもない。
けれど私達は選ばなければ、ならない。
正しかったのか、あるいは間違っていたのか、永遠に分からないものであったとしても。

静かな物語の最初が好きだ。
何かが起こる前。
穏やかな空間。
光がさす和やかさと、その裏に潜む緊張感。

そこに選択権があったのならば、ユメは間違いなく静かな始まりを選んだ。
選ぶ権利があったのなら、絶対にこんな理不尽な展開は間違っても選ばなかっただろう。

昔から不公平だと思う。

どうして選びたくない時に限って選択肢を与えられ、肝心の選びたい時にはいたずらに流されてしまう。
うまくいかない。
人生そういうものだと割り切れればいいだけの話かもしれないが、なぜか歯がゆい。

ゆったりと流れていた日常が、あの日を境に次元ごと崩壊していった。
それが良かったのかどうか。
今でも分からない。

でもきっと誰も知ることはできないのだろう。
皆ひとつの道しか選択できない、最初からそう決まっているのだから。

「は……？　あの……。どちら様？」
「ウガルル……」
その突然目の前に現れた黒い物体は、あからさまにユメに向かって威嚇している。
これは獣なのか、または霊体のようなものなのか、ユメは目を細めて見極めようとしたが分からなかった。

これはやばい状況。
十中八九やばい。

耳でその音が聞こえるくらいに喉の奥で、唾をごくりと飲む。
そして深く、次に備えて一息吸うと。

「ぎゃー！」
声の限り叫びながら、ユメは全速力で逃げ出した。
こんな怖い経験はもちろん初めて。
もしかしたら、こんなに大声を出したのも初めてかもしれない。
そのせいか、必死に出してるつもりだがそこまで声が響かない。
ホラー映画とか絶叫マシーンとか、スリリングなものはだいたい好きだったけど、この状況とは次元が違う話。

「あり得ない。あり得ない。あり得ない。え、これ夢？　夢でしょ？」
存在しない誰かに話しかけながら、後ろを振り返ると、期待を裏切らずにこっちに向かってくる黒い影。

「嘘でしょ！？　誰か助け……ふぎゃ」
突如、体の体勢が水の中ににダイブするような角度で傾き始め、時の流れがスローモーションに切り替わる。
物語でも現実世界でも異世界でもこれはお決まりのことなのだろうか。
急激に近づいてくる、衝突するととても痛そうな地面を睨みつけながら、ユメは思った。

物語ではここらへんで助っ人が登場するはず。
だけど、ここは物語の中じゃない。
そんなにうまくいく訳ないってのが現実か。

地面に身体が投げ出された衝撃を、そのまま受け止めた後、ユメ

は覚悟を決めて目を伏せた。
自慢ではないが、元から諦めはかなり早い方だ。得意、と言ったほうが正しいかもしれない。
自然に身を任せて、嵐が過ぎ去るのをじっと待つ。今回はその「嵐」が過ぎ去ってくれそうにないけれど、それはもう自分の運命として潔く観念するしかない。

何も期待しないほうが、諦めて超然としていたほうが、潜り抜けられる。
物心ついて間もなく、ユメが学んだ教訓だ。
超然と。何物にも頓着することなく。

生死の境界線を越えることも、身を任せればきっと抜けられるはずだ。
まぁ今まで体験談は聞いたことないし、というかこの世界は体験した人とはもう話すことのできない、という仕組みになってるし、今回ばかりは自信ないけど、信じたいところ。最期に。

あまり冴えない人生だったな。
そんなことを思いながら。

ユメの複雑な心境を当然気にもとめず、唸り声をあげながら襲い掛かってくる黒い魔物。

これまでか……。
世界よ、グッドバイ。

しかし、目を閉じた暗い世界で次の刹那、瞼に感じたのは「黒」ではなく、まばゆい光だった。
「え……？」
目をあけると、先程の黒い物体がどこからか出ているまばゆい光の中でもがいている。
見るからに苦しそうだ。

「ギギュルァーー」
断末魔の叫びをあげながら、その黒い物体は完全に光に包まれ、やがて光が消えていた時には消滅していた。
「何今の……？」

いきなりまばゆい光を受け止めため、目がうまく機能していない。
ただ光があったところの少し離れたところに、人影を捕らえることだけはできた。
「誰……？　もしかしてうまくいった――」

ありとあらゆるショッキングな出来事への耐性を自負して生きてきたはずだが。
そこで、あっけなくユメの意識は飛んだ。

助けてもらったのはラッキーだった。
それはあの時もそして今でもそう思えること。

けれどあの時ラクスに出会わなければ、きっとここまで辛い思いはしなかっただろう。
それは後にユメが何度も思うことだった。
どうして私達は出会ってしまったのだろうか。

金髪の少年

聞こえてくるのはピアノの音色。
今ユメがいるのはふかふかのベッド中。
周りにあるのは見るからに高級な家具。
ベッドのそばには小さな丸テーブルが置いてあり、その上の花瓶には白い小さな花がいけられている。

「夢だったんだ……」
そうつぶやいて数秒後、ユメはがばっと上体を起こした。
「ちょっと待って！　ここどこよ！？」

手を額において、何かを思い出そうとするも、何も思い浮かばない。
あの黒い影と金髪の少年。
そこで記憶が途切れている。

「とりあえず、どうしよう……」
そこで改めてピアノの音色に気づく。
美しい旋律。
誰が弾いてるのだろうか。
ユメが一度も聞いたことのない曲だ。
綺麗なソプラノのメロディ。
幻想的で美しいけど、その一方で哀愁をも漂わせる。

自分がどこにいるかも、どういう状況に置かれているのかも全く分からなかったのに、ユメは恐怖を全く感じなかった。

ゆっくりとベッドから出ると、そのピアノの音に誘いだされるように、それが聞こえる方へと向かった。

部屋を出て、長い廊下に出る。
どうやら結構大きい洋館らしい。
等間隔で壁にかけられている洒落たランプ。
気品を漂わせる絨毯。
ところどころにある絵画、花瓶。

やがて階段に行きつき、ユメは静かに下りた。
階段の子柱の一本一本にも重厚感を漂わせる装飾が施されている。
階段の下は、大理石が敷き詰められた玄関ホールになっていた。
高い天井には豪華なシャンデリアが取り付けられている。

階段を下りて、右手にある茶色の両開きのドア。
ユメはそこへゆっくりと近づいた。
ピアノの音色が聞こえてくるところ。

一瞬のためらいもなく、金色のノブに手をおくと押した。
ふいに止むピアノの音。

「目が覚めたんだね」
予想通り、ピアノの影から現れたのはあの時の金髪の少年。
「もう体は大丈夫？　レニタス、お茶をもってきてくれるかい？」
そこで初めてユメはその部屋にいる、もう一人の存在に気づいた。

白髪交じりの髪を短く切り込んだその人は、映画などに出てきそうな執事のような格好をしている。
「すぐに」
レニタスはそう答えると、ユメの方を見て柔らかく微笑み、きびきびとした歩調で背後のドアから部屋を出て行った。

「助けてくれてありがとう」
いろいろと質問攻めにしたいのを我慢しながら、ユメはその一言をようやく口にした。
「危ないところだったね、偶然通りかかってよかったよ。まぁ、立ってるのもなんだし、そこに座ってよ」

ユメは頷くと、言われたとおりに示されたソファに腰をかけた。
その金髪の少年もローテーブルを挟んでの向かい側に腰をかける。
無遠慮なのも忘れて、ユメはまじまじとその少年を眺めた。
優雅な金髪に透き通るエメラルドグリーンの瞳。
きっと１００人中１００人の者が美少年であることを認めるだろう。
年齢はユメと同じくらいのように見えた。

少年が口を開き、そこでユメははっと我に返った。
「僕の名前はラクス。君の名前は？　なんて呼べばいいかな」
「ユメ。杉原ユメ」
「ふうん。変わった名前なんだね」
そこでユメは小さく首をかしげた。
「そうかな？　よくある名前だと思うけど」
「僕はあまり聞かない名だな。単刀直入に聞くけど、なんで君はあんなところにいたの？　どこの者だい？」

「どこの者？　言っている意味がよく分からない」
「どこに属する精霊かって聞いているんだよ」
「精霊？　何のこと？」
そこでラクスは驚いたように少し目を見開いた。
「君、記憶が飛んでいるのかい？　今まで自分がどこで暮らしていたとか覚えてないののか？」
「私は記憶喪失なんかじゃないわ」
ユメは少しむっとして答えた。
「私は杉原ユメ。さっきも言ったけど。ここがどこかは知らないけど、あんな黒い化け物が実際に出てくるくらいだから、ここは普通の世界じゃないことは察しはつく。けれど、私は精霊とかじゃなくて、ちゃんとした人間。日本の普通の女子高生！」

「人間？」
ラクスは驚いて聞き返したが、数秒後突然笑い出した。
「ハハハ。君はおもしろいな。誰かに錯乱の術でもかけられたのか？」
ユメはまっすぐにラクスを睨みつけた。
「失礼にもほどがあるんじゃない？」
「ごめん。ごめん」
ラクスは笑いで涙を目ににじませながら、謝った。
「あまりにも突飛だったから。ハハハ、だって君がもし本当に人間なら僕達は意思疎通はできないはずだよ」
「どういうこと？」
「ここは精霊の世界。人間の世界の隣にある世界。もちろん人間がこちらの世界に来ることにはできないし、見ることも、発見することもできない。けれどこの世界は人間の世界の隣に位置しているんだ」

「……よく分からない」
「まぁ、とにかく言いたいのは、精霊は人間の言葉で意思疎通してるわけじゃない」
「でも今私達話してるじゃない！」
「君は意識してないみたいだけど、今僕達は精霊の言葉で話している。言葉っていってもテレパシーに近いものだけど」

「お待たせしました、ラクス様」
部屋のドアが開き、白いポットとカップをトレイにのせてレニタスがやってきた。
「ありがとう。レニタス」
「どうぞ」
お茶の入ったカップを出されると、ユメはすぐさま一口飲んだ。
今までに飲んだことのないお茶だったが、その香りと味が心をリラックスさせる。
「おいしいだろ？　これは珍しい紅茶なんだ。知り合いの花の精霊の子がいつもくれるんだけど」

一口優雅にすすり、しばらく間をおくと、ラクスは改めてユメを見据えた。
自然と緊張して、ユメは姿勢を正す。
「それでは、仮に君は人間としよう」
「いや、だから本当に人間なんだって……」
「要は、君はあそこで何をしていた？　ダークリットが街を離れたあのような奥地で暴れてるのは知ってっなかったのか？」
「ダークリットって？」
「君が意識を失う前に対峙していた、黒い物体さ。あれは精霊の魂の残滓だ」

「精霊の魂の残滓？」
ラクスが頷く。
「ああ。詳しいことは、分かっていない。僕達も調査中だ」
「そう。私はダークッリットなんて全く知らない。何度も言うけど、普通の人間だから。私はただ高校から帰宅途中、校舎の近くにある公園と繋がった小さな森でで、誰かが助けを求める声を聞いたからあそこにいただけで……」
そう、確かに聞いたのだ。
――助けて。苦しい。
少年のような声だった。
姿を見てないので、憶測にすぎないが。

「声？　あそこにはダークリット以外は何もいなかった。精霊も、もちろん人間も」
そこでラクスは、手にしていたお茶をすっと飲み干すと、立ち上がり背後にある窓際へとゆっくりと歩いていった。
カツカツと響く足音。
その音に馴染むような静かさをもって、ラクスは話を続けた。
「そもそも人間はこの世界に来ることはできない。隣にあり、同時に存在している2つの世界だが、その境界には、結界がはられている。この線を超えることは、人間には無理だ。魔力を持たない者には、結界を超えての移動は負担が大きすぎて消滅してしまう」

「でも私は、ちゃんと消滅せずにいる」
やや苛立ってユメが答えると、ラクスがこちらをくるりと振り返った。

「試す勇気はあるか？　真実の光を」
すると、ずっと隅に控えていたレニタスが身動きした。
「ラクス様……！それは、さすがに」
「大丈夫だ、レニタス。真実の光は、偽らざる者を痛めつけることはけしてない」
「真実の光？」

ユメが聞くと、レニタスは頷くと同時に、右手の手のひらを上にむけ、少し前に出した。

次の瞬間、どこからともなく溢れるまばゆい光。
ユメは驚くと同時に小さく悲鳴をあげた。

精霊の世界だか、なんだか分からないが、ここは普通の世界ではない。

やがて光はどんどん大きくなり、ユメをすっぽり覆ってしまうほどの大きさになった。

「この中に入るんだ」
その言葉と同時に、その大きな光はゆっくりとラクスの手を離れ、ユメの方に近づいてきた。

ユメは思わず、ソファの上で上体を後ろに反らした。

「怖がることはない。真実を述べる者をそいつが傷つけることはない。嘘をついている自覚があるのなら、身の安全は保障できないが。もちろんそれが偽であっても、本人に自覚がないのなら危害はない」

それでも、ユメは躊躇した。

当然だ。

こんなわけの分からない世界で、見知らぬ者の言葉なんか容易に信じられない。

「やはり、君は嘘をついていたのか？」

神経を逆なでされるほどまでに、余裕のある声。

ユメは気づいたら立ち上がっていた。

諦めること、そしてヤケクソは得意だ。

どうなってもいい。

ユメはラクス、そしてレニタスがやや驚く目の前で、堂々と光の中に入った。

瞬間、光の暖かさが身体の外側から沁みてくるのと同時に、鳩尾のあたりの内側からひんやりしたものが広がっていくのを感じた。

今までにない、不思議な感触。

光であるのに、全く眩しくない。

まるで自分が光の一部にとりこまれているような……。

ラクスはしばらく黙ってユメを見つめていたが、やがて口を開いた。

「そのままで、もう一度君が何者なのか、そして何をあそこでしたのが言ってくれ」

「私は」
まっすぐにラクスを見つめる。
「私は人間の女子高生で、見知らぬ人の声を聞いてあの場にいました」

心臓がさっきからうるさい。
何かが起こるのかと、光の中でユメは硬直して身構えていた。

しかし光はユメを包んだまま、ただゆらゆらと揺れているだけで、しばらく待っても何も起こらない。

「分かった、もういい」
ラクスの一言同時に、光が跡形もなく消える。

その顔は驚きの表情を隠せないでいた。

「レニタス、他言無用だ」
「しかし、ラクス様……」
ややレニタスも動揺しているようだ。
「この件は、しばらく僕が預かる」

「ユメ、確かそう言ったね」
ユメはこくりと頷いた。
「しばらくこの館に滞在してもらう」

「しばらく？　いつまで？」
「さぁ、僕にもそれは分からないな。ただ少なくとも君が何者なのか分からないうちは、君が帰るべき世界にはおそらく帰れない」

――何者なのか

その言葉はラクスからではなく、自分の内側から聞こえたような気がした。
それは何度も何度もユメが心に刻みつけて来た疑問だった。
答えが得られるわけでもないことを、また同時に知っていた。

何者なのか。
自分でも分からないのに、他人が分かると言うことはあるのだろうか。

――ユメちゃんってさ、なんとなく浮世離れしてるよね。なんか、他の子達とはちょっと違う世界にいるというか。

いつの日かに言われた同級生の言葉が蘇る。

自分が何者なのか。

物心がついてから消えることのない、違和感。

自分だけ周りから取り残されてるような奇妙な感覚。

偶然なのか、必然なのか。
きっとそれは、重要ではなかった。

陽だまりに咲く花

奇妙な一週間が過ぎた。
光に満ちた静かな洋館での暮らし。
非日常的で初めて見るものばかりでとまどうこともあるが、時間はゆっくりと何もかもを呑みこんで流れていく。
長い夢でも見てるのではないかと、何度も思った。
その度にユメは頬をつねってみるのだが、確かにそれは痛みを伴う。

それに現実か夢か。
その問自体、もはやどうでもよかった。
自分がかつていた世界に、とりわけ未練などない。

あの日ダークリットとかいう黒い物体に遭遇した時にも思ったことだが、それだけ今までのユメの生活は簡素で、味気が無くて、惜しむものは何もなかった。

ラクスはあの日からユメのためにいろいろ調べてくれている。
本を漁ったり、不思議な力でユメを光で包んでみたり。
ラクスは光の精霊だという。
だからさまざまな光の術を使えるらしい。
ラクスの出す光には、さまざまな種類がある。
まばゆい光。儚い光。オーロラのように幻想的な光。
その力の源はこの世界に溢れる全ての光だと、ラクスは言った。
よく分からない、とユメが首をかしげると、言葉で説明するのは難しいね、と小さく笑った。

「花の精霊？」
「ええ、そうです」
レニタスが食事の準備をするのを手伝っていた時のことだ。
今日はお客が来るということを、レニタスがユメに言った。
「フローラ様は花の精霊の一族の長の孫娘にあられます。更にラクス様の許嫁でもあられるのですよ」
「許嫁？　ラクスに許嫁がいたんだ。まだ若いのにね」
ラクスの年はユメより３つ上の１９歳だと聞いた。
しかし人間と比べていいのかどうかは分からない。
何でも精霊は２００年は軽く生きるらしい。
「フローラ様はラクス様と同い年であり、幼馴染でもあられます。こんな都から離れた洋館に、週に一度は訪ねてきてくださるのですよ」
「へぇ。仲がいいんだね」
「フローラ様はとても社交的で、気立ての言い方です。きっとユメ様の良いお友達になると思いますよ」
「そうなったらいいな」
ユメは小さくつぶやいた。

オトモダチ。
ちくりと胸が痛む。
ユメは今まで友達と呼べる人をもったことがない。
小学生の頃や中学生の頃はよくいじめられていた。
高校に上がって、小中学生の時のようないじめはなくなったものの、ユメはクラスで一人孤立していた。

「今日もいい天気ね！」
小さなかごを下げたその少女は、お昼過ぎごろに洋館を訪れた。
玄関でホールでユメを見ると目をまるくしたが、レニタスが説明すると、すぐに笑顔でユメに挨拶をした。
「はじめまして！　私、フローラというの。よろしくね」
ユメもなんとかぎこちない挨拶を返した。
慣れていないせいだろうか。
うまく笑うことも、話すこともできない。
恥ずかしくなって俯きかけたユメだが、驚いたことにその手をフローラに優しく掴まれた。
「おいしいお茶を持ってきたの。ラクスは書斎かしら？　みんなでお茶しましょう」
幸せが溢れ出ている、華やかな笑顔。
光の精霊であるラクスの許嫁と言われて、なるほどと頷ける少女だった。
優雅なカールのかかった茶色の髪。
長いまつげに、赤茶色の瞳。
花の精霊だからだからだろうか。
その可憐さは日向に咲く花を髣髴させる。
陽だまりのような少女だった。
「ユメって呼んでいいかしら」
慌てて無言で何度も頷くと、フローラはニコっと嬉しそうに笑った。
「私のこともフローラと呼び捨てにしてね」
見知らぬユメにも心を開いてくれる優しさを嬉しく思う一方で、ほろ苦い「羨望」という名の感情が入り混じるのをユメは感じた。

「それではフローラ様。私がお茶をおいれしますよ」
レニタスがそう言うと、フローラはかごを差し出した。

「いつも悪いわね、レニタス。私がいれるべきなんだろうけど、レニタスが入れた方が数倍おいしいからお願いするわ」
「あ、私も手伝います。レニタスさん、お菓子も用意してたし、二人いた方がいいでしょ？」
「それは助かります」
横から、ユメは急いで申し出た。
なんとなく、フローラとラクスを二人きりで会わせたほうがいいような気がしたからだ。

「ユメ、ありがとう。それじゃ、私はラクスを書斎から引っ張り出して居間に連れていく係ね」
そう言うと、フローラはスキップをしているような足取りでラクスの書斎へと向かった。
奥の部屋で弾んだ声がラクスを呼ぶのが聞こえる。
「フローラ様はラクス様をとてもお慕いしておられるのです」
レニタスがその後ろ姿を眺めながら、穏やかに言った。
「そうみたいですね」
ここまで可愛らしい人は見たことがないと半ば感動に似た感情を抱きながら、ユメもその後ろ姿を見つめた。

フローラが持ってきたお茶は薔薇茶で、淡いローズ色だった。
フローラのイメージカラーにぴったりな色。
甘い香り。
ゆっくりと仄かにティーカップから出る湯気。

ユメは少し居心地悪く、少し前後に体を揺らした。
どこの世界にいても、人見知りの癖はなくならない。
さっきが沈黙が続いているが、それがユメがいることでそうなって

いるのか、もともと静かにお茶するのが習わしなのかひどく気になる。

そのユメのとまどいを察してかあるいは否か、ふいにフローラがユメに話しかけた。
「ユメは人間界から来たのでしょう？　ここの生活は慣れた？」
「ええと……」
ユメは言葉につまる。
緊張したからではなく、純粋に分からなかったからだ。
『慣れた』、それはどういうことを意味するのだろう。
ここでの生活は静かながらも驚きの連続で、非日常的なことが起こっても意識が遠のいたり、これは夢だと現実逃避したりすることがなくなったことを考えれば、『慣れた』のだろうか。
答えに窮していると、レニタスが助け船を出した。
「人間界とここは比較しようがないくらい違うでしょうから、まだ慣れることは不可能でしょう、フローラ様」
「そうね、当然よね。ごめんね、変な質問をして」
「ううん。何もかもが初めてでとまどうこともあるけど、レニタスさんやラクスが親切にしてくれるから大丈夫」
「ラクスが親切に？」
そこでフローラは少し驚いた表情をした。
「相変わらず君は、感情を隠さないな。フローラ。なんでも手に取るように、君の考えてることが分かるよ」
そう言うラクスの瞳は、ややいたずらっぽく輝いていた。
「そんなことないわよ！」
少し頬を膨らませたフローラが、反論する。
「やっぱり意地悪なラクスのままじゃない。ユメが親切なんて言うから、少しは紳士になったのかと期待をかけてみれば……」
「長年の付き合いなのに、未だに虚しい期待を抱いてるのかい？」

「もう、ラクスったら！　レニタス様も苦労が本当絶えないでしょうね」
見ると、レニタスは二人の言い争いに目を細めていた。
どうやら日常茶飯時らしい。

幼馴染かぁ。
そういえば昔少女漫画を読みふけっていた時、そういう存在に憧れてたっけ？
揺らがない濃い絆がある二人。
憧れる半面、ユメがずっと諦めてきたもの。

孤児だったユメには、深い絆のある家族はいない。
また人に馴染みにくい性格のせいか、一人の時間を好むせいか、友達と呼べる人はほとんどいないに等しい。
「彼氏」なんてきらきらしたものは、雲の上の世界だった。

「ユメ、騙されちゃだめよ！　ラクスは本当に油断ならないんだから」
「フローラ、せっかく親切だと僕を称してくれた彼女に人聞きの悪いことを言わないでくれるかな」
暖かい日差しが差し込むその客間で、二人の言い争いは平和に続いていく。

今思えば、いつだってこの洋館は、光で溢れていた。

精霊達の国

「馬子にも衣装ってわけにはいかないか……」
ユメは等身大の鏡の前でため息をついた。
肩の下まで長さの黒いストレートの髪。こげ茶色の瞳。
そして今ユメが来ているのは白いレースでところどころ装飾が施されている薄ピンクのワンピース。
明るいオーラをまとっている容姿のフローラとは、正反対だなとユメは思った。

フローラとユメが初めて出会った日以来、フローラは頻繁に洋館を訪れては何かとユメの世話を焼いてくれる。
「男しかいない館ではいろいろと大変でしょう？」
初めて友達とよべる存在ができたことさまざまな気づかいをフローラがしてくれることは嬉しいのだが、フローラが持ってきてくれたこのフリルつき洋服シリーズだけは喜ぶことができなかった。

「やっぱ私にこんな女の子っぽい服似合うわけないよな」
ユメは一人苦笑を洩らす。
フローラが来るまでラクスが貸してくれていた男もののシャツとかのほうが、サイズは多少大きいが、ユメにはそっちの方がずっと似合っている気がした。

「ユメさん、朝食の準備ができました」
「今すぐに行くわ！」
レニタスの呼び掛けに答えた後、もう一度ユメは鏡を覗き込みため息をついた。

フローラの好意を絶対に無駄にするわけにはいかない。
「まぁ、いいっか。他に着るものもないし」
そう独り言をつぶやくと、ユメは自室を後にした。

「精霊の国の王宮？」
ユメは驚いてフォークを握った手を止めた。
「ええ、そうです。ユメさんにはまだ話していませんでしたね」
レニタスは相変わらず物腰が柔らかだ。
「王様がこの世界にはいるの」
「ええ」
ちらりとレニタスの横にいるラクスに目をやると、気のせいかもしれないが少し暗い表情をしているように見えた。
「どうしてレニタスさんとラクスが王宮に行かなければならないの？」
「それはですね……」
そこで一瞬レニタスは困ったような顔をしたが、その時隣でカチャリとフォークをおく音がした。
「いいよ、レニタス。僕が話す」
心なしか、ラクスの声はどこか不機嫌なように感じる。
「それでは、私はお茶のお代わりをいれておきますね。私はいないほうがいいでしょうからね……」
柔らかく微笑んだままレニタスはラクスに向かってそう言ったが、その意味ありげな視線をユメは見逃さなかった。

レニタスが席をたった後、しばらく沈黙が流れたが、やがてラクスが口を開いた。

エメラルドグリーンの瞳に影がさす。
「あんまり言いたくなかったんだけどね、ユメ」
「何？」
「……僕も王族の者なんだ」
「は？」
「第二王子なんだ、この国の。今の現国王は僕の祖父にあたる人だ」
「……そうだったんだ」
他に言うべき言葉が思いつかなかった。
確かにラクスが王家のものだったということには驚いたが、精霊の国の存在自体が驚きだったユメにとっては、それは今さらという感じである。
ラクスは少しユメから視線をそらし、気のせいなんかじゃなく、確実に暗い表情をしている。

王族というからにはこの世界の中では特殊な存在なんだろう。
そういう存在にはいろいろと複雑な事情があるとみて、間違いってことにはきっとならない。
「それが、嫌なんだね」
ふと口をついて出た言葉。
はっきりと指摘した言葉にラクスは少し驚いた表情をしたが、それ以上にユメは自分自身で驚いた。
一拍間をおいて、ラクスはふっと笑みを漏らした。
「意外とユメってはっきりと物事を言うんだなぁ。ははは っ、レニタスでさえもあまり指摘しないことを」
ユメは慌てて謝った。
「気を悪くしたら、ごめんね。つい言ってしまったというか……」
「いや、いいんだよ。そっちのほうが話しやすいし。レニタスもそこに突っ立ってないで入ってきなよ」

ラクスがユメの背後にあるダイニングのドアに呼び掛ける。
カチャリと背後で音がし、部屋の中に柔らかな風が通り抜ける。
「ラクス様には敵いませんね。光のあるところ全てを源にしてしまう王家。さすがです」
盗み聞きしたことがばれても少しも動じない。
おそらくレニタスも只者ではないのだろう、とユメは思った。
まぁ、王家の者に仕えているのだから当然か。

「ユメ、話してあげるよ。この世界のこと」
「この世界？」
ラクスが頷く。
「いつかはもとの世界に戻るとしても、今はユメはこの世界にいるんだから」
「……うん」
「一緒に王都に行くのもありだと思うしね。何か手掛かりが掴めるかもしれないし」
その声にはどこか自信ありげな響きがあった。
「もしかして私に関する謎が？」
「いや、まだだ。けれど、ひとつの推測を打ち出すことはできた。けれど、あまり期待しないでほしい。このことは後で詳しく話すよ。とりあえず今はこの国ついて」
ユメはゆっくりと手を膝においた。
「うん」

精霊達がすむ国。

人間の世界の隣に位置しながら、空間的には隣にはない別次元の世界。
通常精霊も人間も行き来することはできない。
精霊の世界を治めている王家は光の精霊達。
源である光が世界には溢れているのだから、その力は他の精霊達より強くなる。
その下に七大貴族が存在する。
月の精霊、火の精霊、水の精霊、木の精霊、石の精霊、土の精霊、日の精霊。
この中でも月の精霊、日の精霊、水の精霊はその勢力を世に知らしめていた。

精霊達の力はオリゴといわれる源が世にどれだけあるかに大きく関わる。
例えば水の精霊のオリゴは全ての水だが、湖の精霊は湖のみがオリゴであり、特定の湖だけをオリゴとする精霊もまた存在している。

王家の光の精霊の力は強大であるが、それと同じくらい闇の精霊の力もまた強く、かつては光の精霊と共にこの国を治めていたが、さまざまな諍い、陰謀、権力争いにより１０００年以上前に王都から追放された。

興味本位で耳を傾けた精霊の国の物語（ストーリー）。

この時はまだ自分がこの物語に深くかかわっていくなんて、ユメは全く予想だにしていなかった。

王都アクロピアへ

「ユメと王都に観光に行けるなんて、楽しみ」
フローラが弾んだ声を出しながら、馬車に乗り込む。
「わ、私も」
ユメも急いで答えながら、後に続く。
「友達とどこかにお出かけなんて初めてだから……」
「そうなの？　それじゃ、おいしいレストランとか、お気に入りの服のブランドのお店とか紹介してあげるね」
「あ、ありがとう！」

「レディ2人の会話はまぶしい限りですね」
その時、レニタスが馬車に乗り込んできた。ユメの隣に腰をおろす。
続いてラクスも乗り込んだ。
ラクスの顔には物憂げな色が表れており、今朝はいつもより無口だ。
ユメは、フローラがラクスを心配そうに見つめているのに気づいた。
かける言葉が思い浮かばないので、黙っていることにした。

しばしの沈黙をレニタスが破る。
「それでは今回も無事にアクロピアにたどり着けることを願い出発することにしますか」
「あ……あの」
「はい、何でしょう？　ユメさん」
ユメはそこで馬車を見た瞬間から聞きたいと思っていた質問を口に

する。
「この馬車、馬も御者もいないいのにどうやって動かすんですか？」
「ああ。私達の世界ではそれぞれ自分で馬を生みだすんですよ」
「馬を生みだす？」
「ユメさんにはもうお話しましたよね、私のオリゴは何なのか」
「レニタスさんは風の精霊だと」
「はい、そのとおり」
そう言うと同時に、パチンと指の音。

次の瞬間、突然急速に馬車が走りだした。
馬車の外からはビュービューという唸り声。
「すごい！　風の力で動いているんですね」
「はい」
レニタスはにっこりして言った。
「私達風の精霊は何かを伝達する術を得意とする者の集まりなのです」

「今回はラクスがいるから心配はしていないけど、ダークリットに遭遇しないといいわね」
フローラが不安げに窓の外を見やる。

ダークリット。
この世界にユメが飛ばされてきた時に、襲いかかってきた黒い物体。
あれは精霊の魂の残滓（ざんし）だと聞いた。
最近この国のあちこちで発生しているらしい。
精霊がどのようにしたらダークリットになるのか、それは実はこの

国の精霊達にも分かっていないらしい。
ただ闇の精霊が関係しているだろうという憶測が有力になってきている、とラクスは言っていた。

王都から追放された闇の精霊。
今でも光の精霊をまた七大貴族を恨んでいるのだろうか。
なぜかユメは闇の精霊に会ってみたいと思った。
光がさんさんと降り注ぐ日中よりも、闇が支配する夜のほうが昔から落ち着く。
その静けさと神秘さがやすらぎを与えてくれるのだ。

「ユメ？　ユメ？　聞いてる？」
向かい側のフローラの声に、ユメがはっと我に返る。
「ごめん、考え事してた」
「いいわよ。そんなことより、ほら見て」

フローラの指がトントンと窓をつつく。
何事だろうと思いながら、ユメは窓を覗いた。

「わぁ、大きなお城。もしかしてもう王都に！？」
「まさか」
フローラがクスクスと笑う。
「王都はずっとまだ先だし、こんな森の奥になんかないわ。あれは七大貴族月の精霊のお城なの。精霊の頭首は頭首様方の中でも一番の術使いと称される、ご老人であられるわ」
「へぇー」

森の中の少し盛り上がっているところに立っているらしく、城は少し高い位置に建てられていた。
古びたお城ではあるが、ここの離れた位置からでもその大きさがかなりのものであることが窺える。
七大貴族のお城でこんなに大きいのなら、王宮はとてつもない大きさなのだろう。

「月の精霊は、謎の多い精霊なんだ」
口を開いたのはそれまで黙っていた、ラクスだ。
「そうなの？」
ラクスは頷いた。
「幾度となくご頭首にお会いしたことあるけど、気難しい方で接するのが難しいよ。月の精霊は癒しの力とかを得意とする一方、何かを隠す術にも優れている」

「いかにも月の精霊って感じね」
ユメは妙に納得しながら言った。
「けれど王家はこの一族を扱うのに、相当苦労しているよ。強い力を有しながらも、王家にはあまり従順じゃない。要するに扱いにくいんだ。謎もまた多い一族だしね」

「そうだったわね。ディセム様……」
フローラが相槌を打ちながら言った。
「ディセム様って」
ユメがフローラに聞く。

「今の月の精霊のご頭首様の娘だった方」
「だった？」
フローラは厳しい表情で、頷いた。
「もうずいぶん前にお亡くなりになったの。あのお城で。とても美しい方だったと聞いているわ」
「私は何度かお目にかかったことがありますよ」
レニタスが話に加わった。
「黒い髪が美しい、魅力的な女性でした。求婚者が後を絶えなかったと聞いております。あのような事件があって本当に残念です」
「事件？」
ユメが問う。
「分かってないんだ。公（おおやけ）には何らかの事故に巻き込まれて、命を落とされたとなっているけど。というよりは、父親である頭首が無理矢理そうこじつけたようではあるが……」

「巷では殺されたという噂もあるの」
フローラが声を潜めて、付け加える。
ラクスはコクンと頷いた。
「僕はまだ幼かったから詳しくは知らないが、当時いろいろな噂が流れたらしい。求婚者が多かったから誰かに逆恨みされて殺されたんじゃないかとか、またはダークリットに、とかね。ダークリットが現れはじめたのも、非常に曖昧だがその時期だったはずだ。今よりはずっと出現も僅かだったが。そういえば、父親である頭首が、たまたま言い合いになって殺したんではないかという憶測もあったな」

「ラクス様、ご頭首様が殺したなんてとんでもない」
レニタスが眉をひそめた。

「お二人は仲の良い親子だったと聞いております。ご頭首様はそれはもう大事にディセム様を育てていらっしゃったと」

ラクスは肩をすくめた。

「月の精霊にかかれば世間を欺くことなんて簡単だからな。僕達王族でも暴くことは難しい。現にこのディセムさんのことに関して、ゲントゥムは一切口を開かないと聞いた。ただ事故死で亡くした、と公言したいが――」

「きぁあー！！」

突然のフローラの悲鳴。

理由は聞くまでもなかった。

前からの何かにぶつかったような急な衝撃と共に、風の音が消え、馬車が止まったのだ。

「遭遇してしまいましたか、ダークリットに」

相変わらず冷静なレニタス。

ラクスは無言で立ち上がり、一人馬車を降りた。

聞こえてくる声

「ラ……ラクス！？」
ユメは驚いて声をかけたが、既にラクスは馬車の外。
腰を浮かそうとした瞬間、フローラに手で遮られた。
「ユメはもう聞いたんでしょ？　ラクスは光の精霊。たかが一体のダークリットに負けるわけないわ」
「……そうなの？」
「うん」
フローラはにっこりと笑って頷いた。
「ラクスは光の精霊の中でも優秀な術の使い手なのよ」

「そうですよ、ユメさん。ご心配なくここにいてください。私は念のため馬車をおりますね」
レニタスの向かった先から、こっちの世界に来て何度も見たまばゆい光が指し込んでいる。
強い光なのに不思議と太陽の光のようにまぶしくはない、不思議な光だ。
ユメはこっちの世界に来ていきなり出くわしたダークリットを思い浮かべながら、光を眺めていた。
あれが精霊の残滓。かつてはフローラやラクス、レニタスのような存在だったのだ。

『苦しい……。ニコラ、助けて』

耳を通り抜ける、微かな声。
心がざわりと揺れた。

「え……？」
「どうしたの？」
「え……あ、今フローラ何か言った？」
「いえ、何も……。大丈夫？　ダークリットのことは全然心配いらないわよ」
フローラはユメが動揺している思っているらしい。
「いや、そうじゃなくて！　今声が聞こえたの助けてって」

『助けて、ニコラ。会いたいよ、ニコラ』

今度はさっきよりもはっきりと聞こえた。
女の子の声だ。とても苦しがってる。
「ほら！　今聞こえた！」
ユメは小さく叫んで言った。
一方フローラはというと、怪訝な顔をしている。
「何も聞こえないけど……」

『ニコラ、ニコラ。苦しいよ。……ごめんね、ありがとうが言いたかったのに』

「ほら！　聞こえる」
ユメは立ち上がった。女の子の苦しそうな声。

聞き流すなんて無理だ。

『ニコラ……』

声が次第に、はっきりと形を帯びていく。
ユメははっとした。
「馬車の外！」
「ちょっと、ユメ！　駄目よ！」
フローラから止めるのも聞かず、ユメは馬車を飛び出した。

馬車を飛び出ると、すぐそばに立っていたレニタスとラクスが振り返った。
「ユメ！」
ラクスは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに顔をしかめた。
「駄目じゃないか。馬車に戻ってくれ。いつものダークリットよりもちょっと強力だから時間が消すのに時間がかかってるだけ。心配から戻ってくれ」
ユメはラクスの言葉を聞き流しながら、ラクスの前に立ちはだかってる大きな黒い塊を見つめた。
生き物なのか、物体なのか。
これがもとは精霊だったとは思えない。
見るからに実体がない闇。
大きさは背の高いレニタスの身長を優にこえていた。
ユメは闇に向かって、ゆっくりと歩を進めた。
ラクスの声もレニタスの声もどこか遠くから聞こえる。
怖いなんて感情は不思議と生まれない。
「声が聞こえるの……」

「声？」
「ユメさん、今は馬車に」
「苦しいって、女の子が。助けてって」

その時だ。
闇が一瞬揺れたかと思うと、闇の一部が本体を離れユメのほうに飛んできた。
「ユメ！　危ない！」
突如ユメの前に光の壁が現れ、闇を遮る。

『ニコラ……。ニコラ……』

その声が聞こえる度に、ユメは心がざわつく気がした。
声から感じ取れる恐怖や苦しみが、ユメの心にも浸透してきているような感覚だ。
ラクスもレニタスもフローラと同じく何も聞こえないらしい。
「ユメ、戻るんだ。今のうちに」
「ほら、聞こえる！」
ややきつく命令するラクスに、ユメは全く動じなかった。
闇を光の壁伝いに感じた時に、伝わった波動のような不思議な感じ。

「ラクス、苦しがってるの！　女の子が」
「何を言ってるんだ！？　ユメ、僕には何も聞こえない」
「ユメさん、今はとにかく危ないので馬車に戻ってください」

「レニタス、ユメ。危ないから少し下がっくれ。強い光を放つ」
レニタスの動きは俊敏だ。
ラクスの言葉が発せられた1秒後には、レニタスにユメは腕を掴ま

れ馬車の入り口にまで引き戻されていた。
どこからともなく光の球がラクスの前に出した手の上に現れ、次第にその大きさを増していく。
この類の光の術は初めてみると、ユメは思った。

どこか太陽に似た荒さがある。
何かを焼き尽くしてしまうような、消滅させてしまうような強さ。
この後に何があるか、容易に想像つく。

闇は何度も影を飛ばしラクス襲いかかったが、その光の球にぶつかって消えた。
ラクスは無表情に闇を見つめている。全く動じない。
手の上の光もラクスと同じ。飛んできた闇をなんなく消してしまう。
それでいてどんどんと大きくなっていく。

闇が恐がっている。
ユメは直感でそう感じた。
怯えている。
光を恐がっている。

突如闇が大きく揺れたかと思うと、少し後退した。
「逃げる気か」
身構えたラクスの前の光はダークリットとほぼ同じ大きさになっていた。

『ニコラ！　助けて！　恐い！　ニコラ！』

怯える女の子声。
そしてユメは気づく。
「やめて！　ラクス、やめて！　女の子が恐がっている！　やめて！」
急いで飛び出して止めようと思ったが、レニタスに強く腕を捕まえられていて前に進めない。

鬱蒼とした森の中でまぶしく輝く光の球。
「離して！　レニタス！」
自分が何を口走っているのかも分からず、ユメはただ必死にもがいた。
「駄目よ！　ラクス！　辞めて！」
「ユメさん、落ち着いてください！　恐がらなくても大丈夫ですから」
「女の子なの！　苦しがってる！」

ユメの声にラクスは一度も振り返らなかった。
その背中にユメは憎しみのような感情を覚える。

『ニコラ！　ニコラ！』

ついに光は闇よりも大きくなった。
ラクスは顔の位置まで右手を上げ、迷うことなくそのまま前につきだした。
光が手を離れ、前に飛び出す。

周りの木々や茂みを大きく揺らし、光の球が闇にぶつかっていった。
突如すさまじい叫び声が上がる。
以前聞いたのと同じ断末魔。

その中でも伝わってくる声。

『ニコラ……。ニコラ……』

光は闇を完全に飲み込んだ。
闇が光に包まれたかのように一瞬見えたが、光は炎のように形を変えた。

予想に違わない光景。
闇は焼き尽くされていった。
甲高い叫びとめに消滅していく。

『ニコラ……』

闇が消えるのと、叫びが消えるのと、女の子の声が消えるのは同時だった。

「ユメ、大丈夫？」
いつの間にかフローラがユメの馬車の入り口に立っていた。
ユメが振り返ると、フローラはその目を大きく見開いた。
「どうしたの、ユメ。……泣いてる？」
「え……」
ユメの腕を掴んでいたレニタス手が説かれた。
自由になった腕をそっと上げ、手で自分の頬に触れた時始めてユメ

は気づいた。

私、泣いている……。

涙を拭うと、ユメは振り返った。
驚いた表情で立っている、ラクスに言葉を放つ。
「闇の中に女の子がいたのよ！　とても苦しがってた。なのに、ラクスが消してしまった！」
真っすぐにその瞳に、ユメは訴えた。
だがなぜか返ってきたのは曖昧な笑み。
言われなくても、信じてもらえてないことが分かる。
悔しさに唇を噛み締める。

数年前に封印したはずの涙を、ユメは止めることができなかった。

栄えある王都

再び馬車に乗り込み、3時間。
馬車は森から出ると王都アクロピアに到着した。
ユメ先程からふさぎこんでいる。
苦しそうな女の子の声が頭から消えないのだ。
フローラが心配そうに何度も覗きこんだが、足元を見つめて気づかないふりをした。
一方ラクスもご機嫌麗しうというわけではない。
怪訝な顔でユメを見たり、ため息をついたり。
それらも全てユメは無視した。

何も話したくない。
「ほら、窓を見て！　綺麗な都でしょ？　もうすぐ王宮につくわ」
フローラが明るく話しかけるも、ユメは曖昧な返事をするだけで窓を覗こうとしなかった。

――苦しい、ニコラ

体が冷たくなる。
湧きあがるのは悲しみと、信じてくれないラクス達への静かな怒り。

確かに声が聞こえた。

あの闇の生き物、ダークリットから。

風の音が次第に小さくなり、ついには消え、馬車がとまる。
「城に着きました。降りましょう」
レニタスの柔らかい声に、ようやくユメは顔を上げる。
ラクスは馬車が停車すると、無言で一番最初に飛び降りた。
憂鬱な気持ちでフローラに促されるまま、馬車を降りたユメだが、
目の前に光景に一瞬全てを忘れて見入った。

馬車が停止したのは、白いファサード。
厳かな雰囲気をまとっている。
そしてその向こうに見えるのは、綺麗に整備された広い庭。
さらに奥には、この世界の中心である王宮。
城は全て白で統一されている。
彫刻による装飾がいたるところに施されており、荘厳さを醸し出している。

「すごく立派ね」
「王宮だもの」
フローラは肩をすくめながら、何でもないというふうに答える。
「先程の月の精霊のお城とは全然違う」
「月の精霊のお城は神秘さをまとっているものね」
「神秘」という言い回しをユメはとてもうまいと思った。
ユメの頭を過った言葉は、「不気味」。
それに比べ目の前の王宮は、さすが光の精霊の城と言ったところか。

威厳を保ちながらも、輝いているようにみえる。

「さて、ここでラクス達とは一旦お別れね」
その背後でラクスはすたすたと城の方へ歩いていっている。
「そうですね。私はラクス様とお城にいきますが、お二人は大丈夫ですか？」
「もちろん」
レニタスにフローラが明るく答える。
「王都なんて私ほど知り尽くしている人はいないんじゃないかしら」
「それは頼もしいです。ユメさんを頼みますよ」
「任せて」
フローラがユメを振り向き、ユメの手をとった。
「さあ、行きましょう。私、空腹だからレストランからでいいかしら？　このすぐ近くにとてもおいしいお店があるの」
「いいけど、私お金とかもってないよ？」
ユメのまごつく返事に、フローラを声をあげて笑う。
「当然じゃない。あなたは異世界からきたのだもの。お金はちゃんとあるわ。さあ、行きましょう」
手を引っ張られるがまま、ユメはフローラと走り出す。
ふと後ろを振り返ると、レニタスが微笑を浮かべ見送っていた。
ラクスの姿はもうそこにはなかった。

フローラがユメを連れ込んだレストランはこじんまりとはしていたが、絵画や小さな花瓶が至る所に置いてあるなど、洒落たところだった。
ユメとフローラは王宮前の広場を見渡すことができる、窓際の席に落ち着いた。

「不思議ね」
注文した料理を待っているあいだ、ユメはぽつりとつぶやいた。
二人の間には、紅茶が入ったティーカップがあり、白い湯気がそこから出ている。
「何が？」
「この世界が人間の世界に似ているということが」
「ああ……。一応隣どうしの世界だし。精霊はむこうの世界を覗く手段をいくつか有しているのよ」
「どうして似たような世界を……」
「精霊が作り上げたか？」
フローラがユメの言葉を引き取る。
フローラは考え込むように首少しかしげた。
「そうね……。憧れがあるからじゃないかしら？」
「憧れ？」
「そう。人間の世界に対しての」
この答えは、ユメをすごく驚かせた。
「どうして人間の世界が？　人は凄く弱いし、術とかもないのに」
「そうだけど、精霊はきっと昔から羨ましかったのよ。昔から」
「何が？」
「人は自由だもの。私たちみたいに何かに縛られることはない」
「縛られる……」
「そう。例えば光の精霊だったら、その存在はこの世界にある光に依存している。自分の存在が他のものによって決められているの」
「良く分からないわ」
「うん、ちょっと難しいわね。もちろんこの世界も、素敵な世界よ。満足している者も多い。だけど、きっと気づかないうちに、無意識に人間に憧れてるのよ。多分ね……。これはあくまで私の考えだけど」
フローラは静かに紅茶をすすった。

七大貴族

「さて、そろそろ王宮の前に戻りましょうか。もうそろそろ、会議が終わる時間だと思うわ」
酸っぱくて、それでも仄かに甘さが残るフローラの一押しのレモンアイスを堪能した後、フローラは小さなピンク色のバッグに入っている金色の時計のペンダントを開いて確認しながら言った。

甘いものは偉大だと、いつもユメは思う。
気分転換にはもってこい。
ダークリット遭遇時に聞いた声が頭からしばらく離れず晴れなかった気分も、いくらかマシになった。

「賭けてもいいわ。ラクスはきっと機嫌が悪いわよ」
店の外にでて日差しの中を歩き出しながら、フローラが言った。
「そうなの？」
さほど驚くでもなく、ユメは聞き返す。
「ええ。いつも、会議の後はね。王宮が本当に嫌いなの」
「でも第二王子ということは、王宮が本当のラクスのお家なんじゃないの？　国王様がお父様ってことでしょ？」
「そうね……。ラクスは、正直なところ、あまり、家族と今はいろいろあって関係がうまくいってないの……。とはいっても、本当の家族だし、私は一時的なものだとみているわ」
「お兄様とお母様も王宮に住まわれているの？」
ラクスは第二王子、とういのも第一王子は実のお兄様とレニタスから聞いた。

目の前を白と金で艶やかに飾られた馬車が通る。

ある人は忙しそうに、またある人は穏やかな降り注ぐ太陽の光を堪能しながら、王宮前の大通りを行きかう。

「第一王子であられラクスのお兄様、ウーヌム様はもちろん王宮に住まわれているわ。でも王妃であられたオルビス様は……」

フローラの表情がふいに陰る。

「ラクスが幼い頃に、亡くなられたの……」

フローラはそれ以上何も言わなかったし、ユメも何も追求しなかった。

ただ王宮の立派な門の左右に立つ、微動だにしない番人を見つめながらぼんやりと考える。

もともと親がいないユメにとっては、親を失う悲しさを想像することができない。

いや、親だけじゃなく、大切な人を亡くす悲しさ。

それも分からない。

「大切な人は？」と聞かれても、今は答えに窮するだけだ。

だから、なおさら不思議なのだ。

数時間前よりも、はっきりと暑くなった気温。

額にじんわりと汗がにじみでるのを感じる。

ユメはゆっくりと息をはいた。

ダークリットに会った時、感じた底知れない悲しみ。涙。

ユメは映画や本で泣いたことなど、一度もない。

感情移入しにくい性質らしい。

なのに、なぜあの時はあんなに涙がこぼれおちたのだろう？
自分にそれほど悲しむ感情があったということに驚きを感じるくらいだ。

あの時は、まるであの精霊の残滓だという謎の物体から、感情をうつされたようだった。

「あ！」
小さく叫ぶフローラの声は、門の上にとりつけられている３つの鐘の音によってかき消された。
「脇に寄りましょう」
フローラが誘導するように、ユメの腕を掴む。
「何？」
「頭首様方のお通りの合図よ。頭を下げて、失礼のないようにね」

七大貴族である、月、火、水、木、石、土、日の頭首達。
それぞれの族に属する精霊達を統率していくと同時に守護する役目を担う。
その力は、オリゴと関連して絶大である。

「いい機会だわ。ユメ、失礼にならない程度にこっそりどなたかを教えるわね。みんな素敵で、すごい人達なの」
フローラは間近で頭首達を垣間見れることに、やや興奮しているようだった。

一方、ユメはお偉い様方と聞いて、図らずも身を硬くする。
偉い人と聞けば、どうしても気難しくて怖い人というイメージが離れない。
特に自分は人間界から迷い込んだ身。

ラクスはともかく、もしこのことが彼等に伝わったら、やはりよくないことが起こるのではないだろうか。

「あ、ほら、いらっしゃったわ！」

門が番人によってゆっくりと開けられ、先頭には緑の髪の長い女性が先頭で歩いていた。

「一番前にいらっしゃるのは、木の精霊の頭首、アルボア様。私達、花の精霊も率いてくださってるお方よ」

「どういうこと？」

「花の精霊は木の精霊に下に属する下部精霊ってこと。つまり、アルボア様は木の精霊だけでなく、森の精霊、花の精霊、桜の精霊といったように多くの精霊を率いていらっしゃるの。この場合、桜の精霊は森の精霊、さらに私達、花の精霊にも属する精霊。つまり階層になっていて、オリゴが大きければ大きいほど階層が上になる。頭首様方は、そのオリゴが広範囲に存在するため、そのお力も絶大。貴族たる所以がここにあるのよ。ほら、お顔がよく見える？　アルボア様はすごく美人で、さらに物静かでクールなお方なの」

フローラはうっとりとした声で言った。心から尊敬しているらしいことが見て取れる。

ユメは目をぐっと凝らした。

確かに美人だ。

エメラルドグリーンの長いストレートの髪と赤茶色の瞳。

長身ですらっとした身長が、スタイルのよさを引き立てている。

どこかつんとした冷たさを感じさせるのは、物静かな性格であるためだろうか。

ふとアルボアの背後に目が吸い寄せられる。
見事なまでの金髪。肩ほどまでしかないその髪は、大きくウェーブがかかっている。
なんといってもひときわ目立つのは、髪飾りに、ネックレスに、指輪に、どれも金細工が施され大きな宝石が埋め込まれたものだ。

「あの人は……？」
「えっと」
そこでフローラは声を一段と潜めた。
「アウルム様。石の精霊の頭首。本当かどうか分からないけど、アルボア様とは仲が悪いっていう噂。あ、そしてアウルム様の後ろの方も見える？　体格のよくて茶色の髭が生えてらっしゃる、背広のお方。土の精霊の、ルチア様。その隣にいらっしゃる赤毛を束ねてる若い男の方が、日の精霊ソラ様。えっと、それでね…」

フローラがさらに後ろにいる頭首をみようと、体を左右に動かす。
「えっと、言うまでもなく分かると思うけど、ルチア様の後ろにいらっしゃる水色の髪、水色のドレスの女性が水の精霊マレ様。そして、さらに後ろが、えっと…げっ」
フローラが突然身を硬くする。

「どうしたの？」
「ラクスだわ。そして、その隣が火（か）の精霊、イグニフェル様。あの二人も折り合いが悪いのだけど、どうして一緒に歩いてるのかしら。何かを話してるようだけど。ラクス、絶対機嫌悪いわ」

そう話していると、一番先頭にいたアルボアが正門に足をくぐらせ、ユメ達に目をとめた。

「あら花の精霊の長老のお孫さん、フローラさんですね？　ご機嫌いかが？」

七大貴族　2

周囲の精霊達と同様に頭を低くしていたフローラだが、声をかけられ少し顔をあげた。
「アルボア様！　ご無沙汰しております。アルボア様のお陰で、私達花の精霊は何不自由なく穏やかに暮らしております」
アルボアが静かに微笑を浮かべる。
「それはよきことですね。それで、こちらのお方は……？」
ユメに注がれる視線。顔を上げなくても感じられた。
緊張で、ユメの心臓の鼓動が早くなる。
フローラが少し困惑して、ユメを見た。
「えっと、こちらは……私の友達、カ、カスミ草の精霊、ユメです」
ユメは驚いて顔を上げそうになったが、なんとか視線を低く保った。
ちらりと見ると、フローラはまっすぐにアルボアを見上げている。
前から思っていたが、見かけによらずフローラは度胸が備わった子だとユメは思う。

「あら、うちの精霊さんなのですね。そんなに緊張しなくてもいいのですよ。ユメさん、顔をあげてもらえますか？」
アルボアの声は一定して穏やかだった。
嘘がバレやしないだろうかとハラハラしながらも、ユメはゆっくりとアルボアを見上げた。
近くで見ると、ますますアルボアは美しかった。
白い肌、焦げ茶色の長い睫毛に、透き通った茶色の瞳。

「顔色が悪いようだけど、あまり具合がよろしくないのかしら？

エナジーも感じられないようですけど」
「え、ええ。実は少し病気でエナジーをうまく得られていないので、今から薬草の精霊達の村に一緒に向かうところなのです」
「相変わらず、フローラさんはお優しいのですね。それでは、私(わたくし)も少しだけお力添えしましょう」
そう言うとアルボアは胸の前で祈るように両手を組み合わせ、目を閉じた。
その刹那、アルボアの長い髪がまるで下から風が吹いてるようにゆれ、緑の光がその髪から溢れ出す。

ユメは驚いて思わず一歩退いたが、今やアルボアの全身を取り巻いている緑の光が、蛍のような小さな光に無数に分かれ、ユメの方に向かってやってきた。
「怖がらなくて大丈夫よ」
後ろからフローラが、ユメの肩をそっと抑えた。
緑の小さな光がやがて周りで螺旋を描きながら、ユメの全身を包んでいく。
ユメの視界は緑の光の中に奪われた。
「あっ」
光の中で懐かしい匂いがした。心地よい微かな風。
まるで森林の中にいるような新鮮な空気。小川の音。木々のみずみずしい匂い。

しばらくして緑の光が消えても、あまりの心地よさにユメは恍惚状態でそのまま突っ立っていた。

「癒しの力、少しは効果があったと思うのですけど、どうかしら？」
未だにぼんやりとしているユメのわき腹の辺りを、フローラが小突く。
ユメは我に返り、急いでお礼をいった。

「おかげで、とても気分がよくなりました」
「そう」
アルボアは嬉しそうに微笑んだ。
「それはよかった」

「相変わらずお人好しなんだな、お前は。そんなの、頭首自らするべきことか？」
アルボアの背後から声がした。
みると、アルボアとは仲が悪いと噂のアウルムだった。
手を頭の後ろで組んでいる姿勢や口調からすると、男勝りな女頭首らしい。

「アウルムさん、私達頭首の役目は自分に属する精霊達を守ることではありませんこと？　それがどのようなオリゴの持ち主であっても」
振り返ることなく返事をしたアルボアの顔が、少し引きつるのをユメは見逃さなかった。
「あーそうかもな。お前からしたらな、アルボア。全く、お前の言うこと言うこと毎回真面目すぎて、こっちの耳が痛くなっちまうよ」
そこへ後ろから、また別の頭首二人がやってきた。
土の精霊ルチアと日の精霊ソラだ。
続々と現れる頭首達にユメだけでなく、フローラまでも体を緊張させて視線をやや下に落とす。
「アルボア様は全く頭首の鏡ですな。わしも見習わなければ。アウルム様、あなたも見習うべきなのですぞ」
ルチアの低い声がアルボアとアウルムの間に割って入る。

ややふんぞり返った体勢だが、それはアルボアとアウルム、さらにソラが自分よりもずっと身長が高いためらしかった。
「そう、思いませぬか、ソラ様？」
「ええ、私も同感です」
ソラが静かに答えた。
物腰が穏やかなところが、どこかレニタスに似ている。
レニタスも若い時はソラのようだったのかもしれない。

「おい見ろよ、ラクス！　珍しく会議がない場所で頭首達が集まってるぞ。なんかおもしろうそうだな！」
「お前、イグニフェル。さっきから、その世話しない態度やめろと言ってるだろ。不愉快だ」
「なんだよ、ラクス。相変わらずつれねぇーなぁ」

今度はイグニフェルとラクスのお出ましだ。
フローラは正しかった。ラクスはかなりご機嫌が悪いらしい。
顔にありありと不愉快そうな表情が浮かび出ている。
フローラは先ほど二人は折り合いが悪いと言ったが、ラクスはともかくイグニフェルはラクスのことを「不愉快」には思っていないらしい。

「ラクス……！」
フローラがラクスに声をかける。
途端にこちらを向いたラクスとユメは目があった。
無感情な瞳。ダークリットを消し去る時にラクスから感じた凍るような冷たさは、ここから来ているのかもしれない。

「フローラ、ユメ。どうしたんだ？　何か問題でもあったのか？」
ラクスがイグニフェルの傍を離れ、頭首達の目の前を通りユメ達に

近づく。

七大貴族　3

「ううん、なんでもないわ。ただ私のカスミ草の精霊、ユメをアルボア様にご紹介してただけ」
フローラが「カスミ草」の語気を強めて、ラクスに目配せをする。
さすがラクスといったところか、一瞬たりとも表情に変化がない。

「ラクス様、ラクス様もユメさんとお知り合いなのですか？」
小さく、でも優雅にお辞儀をしながらアルボアが問う。

「あぁ。ちょっとしたことで、たまたま」

「ほほう！　カスミ草ですか！」
興味深々といった様子でルチアが、鼻の下の髭を右手で撫でながら一歩前に出た。
「わしはカスミ草が好きですなぁ。よかったら、わしに少しくださいませんか。きっと家内も喜びますぞ」

どうぞ、と差し出したい気持ちは山々だが、偽精霊なので当然出してあげることもできず、ユメは困惑する。
「え……えっと」

「いけませんことよ、ルチア様」
答えたのがフローラでもラクスでもなく、アルボアだった。
「こちらのユメさんは今ご体調が悪いようで、エナジーもほとんどありませんの。オリゴからうまくエナジーを吸収できる状態にないようですわ。なので今は無理して術を使わせないほうがよろしいかと」

「なるほど、そうでしたか。何も知らず、頼み事をして申し訳なかったですなぁ。それはそれはお大事に」
「あ、ありがとうございます」
ぎくしゃくと、ユメはお辞儀をする。

「カスミ草なら、どうぞ」
ふわっと突然どこからともなく、フローラの差し出した右手に現れるカスミ草の花達。

「どうぞ」
「いやいやこれはこれはありがたい。さすが花の精霊のお孫さん。術が洗練されておりますな」
ルチアは花束を受け取り、相当喜んでいるようだった。

「あれ、おかしいな」
あたりをキョロキョロしながら声を出したのは、火の精霊イグニフェル。

「おい、ラクス。さっきまで俺達の前を歩いていたはずのマレがいないぞ？　どこに行ったんだ、あいつ？　俺、話さないといけないことがあったんだが」
「知らない、僕に聞くな。というか、常に話しかけるな」
相変わらずのラクスの冷たい返答。

「マレちゃんなら、ここにいるよ！」
幼い女の子のような声。頭首の中で際立ってるルチアよりも、さら

に身長が低い。無駄な肉が全くない、華奢な体つき。水色の髪は貝のゴムでふんわりとしたツインテールにされている。

その水の精霊マレはちょうど正門にたどり着いたところだった。スキップをするように歩いている。隣には、背の高い銀髪の老人がいた。気難しそうな顔をしてる。

「お前、さっき前を歩いてただろ。今頃、後ろから来るって、どんだけ、トロ子なんだよ」

「違うもん！　マレちゃんはは月の精霊のご頭首、ゲントゥム様に用事があったのを思い出して戻っただけだもん！」

マレが、頬を膨らませながらイグニフェルに猛反論する。

一方のイグニフェル全く意に介してないようで、「そうだった」という顔で右手の拳を左手にポンと打ち付けると、ラクス、そして他の頭首の前に、皆の注目を集めるように両手を広げながら躍り出た。

「おい、俺今思い出したんだけどよ！　来週なんの祝祭日があるか覚えてるか、頭首様方？」

「あ、いっけねー、忘れてた。確か国王の誕生日だよな」

「そうだよ！　アウルム。俺達、急ピッチで国王誕生際の出し物を考えないといけない」

「マレちゃん、覚えてたよー！　だからゲントゥムさんとそのことで話してたんだもん」

「まぁ、私には」

低い声で、ゲントゥムが切り出す。これがあの大きな城の主人。亡

くなったデュセム様の父親。
「なぜ我々がわざわざ国王の誕生日のために、出し物を準備しなければならないのか専ら疑問ですがな」
「これ、お言葉に気をつけなされ、ゲントゥム様」
ルチアが困ったように警告した。
「こちらには、国王のご子息ラクス様がいらっしゃるのですぞ」
「僕のことはおかまいなく」
全く意に介していない様子の、ラクスが言う。
ユメは目を丸くした。なんとよりによってこんなにも個性的な粒ぞろいなのだろう、頭首達は。

「まぁ、それは数日後に会議でも開きませぬか。ここで立ち話で決めるというのは、あまり私は気が進みません」
日の精霊ソラが眼鏡をはずして、レンズをハンカチで拭きながら言う。

「ソラ様の言うとおりですわね」
同意を示したのはアルボア。
「こういうのはどうです？　数日以内にどこかで集まりましょう。二日後とかはどうです？　皆様方、きっとお忙しいとは思いますが、国王の誕生際は全精霊の民にとっても大事な行事。私達の出し物もきっと期待して待っていることでしょう。彼らを率いる頭首たるもの、手抜きにはできませんわ」
「相変わらず模範的な回答だな、アルボア。あーあーめんどくせぇーなー」
アウルムがだるそうに首をまわす。

「こら、アウルム様。ここにはラクス様――」
「かまいませんよ、ルチアさん」
ラクスがルチアを遮る。
「父のためにお手数をおかけして申し訳ない」
そこでゲントゥムが「全くだ」とでも言うように、鼻をフンと鳴らした。

「もし会場が必要なら、僕の住む洋館を話し合いの場に使ってください」
ラクスの言葉を聞くや否や、マレが飛び跳ねるようにはしゃぐ。
「えー、本当！？　マレちゃん、ずっとラクス様の洋館に行ってみたかったんだ」

「おい、ラクス、うまい菓子でも用意しとけよ！」
「お、いいな。おいしい茶と一緒にでも食べたいぜ」
イグニフェルにアウルムが同調する。

「ありがとうございます、ラクス様」
優雅にお辞儀をするアルボアの背後で、ソラも無言で頭を下げる。
「実にありがたいですな、さすが国王のご子息様。ゲントゥム様も、同意してもらえますかな」
一人だけ無言であるゲントゥムにルチアが追い討ちをかける。
「まぁ、いいでしょう」

彼はうなるように答えた。

「それでは、二日後の午後1時に、僕の洋館で皆様方をお待ちしております」

その背後で、ユメはフローラと共に未だに緊張して立っていた。
力をもう長いこと入れすぎて、頬と肩がもうつってしまいそうだ。

それはそうとあの洋館に頭首様方を呼ぶって、ユメは大丈夫なのだろうか。
正体がバレたら大変なことになるのではないだろうか？

ユメの心の中で一抹の不安が過ぎったが、用は済んだ、とばかりに早くも散り散りに帰路に着く貴族達をフローラにならって無理矢理に微笑を浮かべながら見送った。

紫の洞窟

今日もよく晴れた日だった。
今はまだ、静かな朝。
事が起こる前。
ベッドの上で上体を起こしたユメは、大きく背伸びをした。
外では小鳥が楽しそうに囀(さえず)っている。
伸びをした腕をストンとおろすと、ユメはベッドのすぐ傍にある窓を、レースのカーテンを開けて覗いた。近くには大きなブナの木が数本生えている。
小鳥2羽がそのブナの木の枝に止まっているのを見つけた。
何の種類だろう。緑色の羽に黄色も混じっていて、とても綺麗だ。

これもレニタスが作り出したという小鳥だろうか？
レニタスとラクスがここに住むようになってから、静か過ぎるこの洋館にほんのちょっと色を添えるために。

ここの世界にもユメがもといた世界のように動物はいる。
けれど、それらは精霊によって作り出された幻影らしい。
血が通った肉体は何ら人間界のものと変わりないが、それでいて全く別のものだと言った。
難しくてよく分からないわ、と答えたユメに対し、レニタスは微笑みながら言った。
「鏡に映った小鳥だと考えてください。私は鏡の中に映る小鳥を作り出したのです。なぜ作り出すことができるのか。それは、この世界そのものが鏡のような世界だからなのでしょう」

その時に二人がいたキッチンは静かで、小鳥の囀りも聞こえていなかった。
ただレニタスが持つポットからでる紅茶が、湯気をたてながらティーカップに中に静かに落ちていく音だけが響いていた。
「ユメさんのいらした世界、その鏡なのです。この世界は」
気のせいだろうか。
いつもと変わらないその穏やかなレニタスの声は、どこか物悲しく聞こえ、ユメは自分の胸の奥がキュッと小さく閉まるのを感じた。

「レニタス！　味見してくれないかしら。もう、自分でおいしいかどうか判断できないの」
階下から聞こえる、フローラの焦った声にはっとユメは我に返る。
「いけない、私も手伝わなきゃ」
ユメはつぶやくと、勢いよくベッドを飛び出した。
フローラに貰ったワンピースの袖を綺麗に伸ばしながら、階下におりると、玄関で面したホールではレニタスが花瓶にお花を飾っていた。
「綺麗なお花……」
「ユメさん、起きてらしたんですか、おがようございます。この花はもちろん、フローラさんが早朝にもってきてくれたものでして」

「あら、ユメ！　おはよう！」
フローラがキッチンから顔を出す。
「よかった、ユメも味見してくれないかしら、このクッキー。頭首様方にお出しするものだから、念には念をいれないといけないわ」
フローラがラクスの代わって、貴族達を歓迎するのに必死になってるのがみてとれた。
「ええ、もちろん！　嬉しい」
「よかった。じゃぁ、こっちにすぐ来てくれる？」

そう言うなり、フローラは足早にキッチンに戻る。
「フローラさんは、あのように朝からすっかりはりきってらっしゃるのですよ。将来よい主婦になりそうですね」
ユメとレニタスは目を合わせて、クスリと小さく笑った。
途端、フローラのユメを呼ぶ声がする。
「はいはい、今いきまーす」
ユメは返事すると、キッチンの方に駆けていった。

「ちょっと気になるのは……」

フローラが戸棚の前に立ち、クッキーにあわせて出すお茶を選別している時。
「ラクスがこの洋館に頭首様方を呼んだという事」
「おかしいの？」
「ラクスは昔から、本当に親しい者以外をここに招くのを極端に嫌っていたの」
「今回は、国王様、ラクスのお父様のお誕生日の件だからとかじゃなくて？」

うーん、とフローラが首を捻る。

「悲しいことに、ラクスはそこまで父親想いでは……。あ、このお茶にしましょう！　ライチティー。ラクスもお気に入りだし」
フローラがユメにオレンジ色のお茶缶を渡す。
蓋を空けると、ライチの甘やかな香りがした。
「きっとラクス、何か思惑があって招待したんだと思うわ」
「思惑？　何の？」
フローラが肩をすくめる。
「そこまでは分からないけど」

「ところで、そのラクスは今どこにいるの？」
レニタスとフローラは精を出して頭首達の歓迎の準備に励んでいるというのに、肝心のラクスの姿は朝から見当たらない。
「書斎に篭ってるわ。なにやら、難しい本を真剣な顔で読んでた」
何でもなさそうにフローラは答えると、がしっとユメの腕を掴んだ。
「お茶とクッキーは大丈夫！　次は応接間の最終チェックにいきましょう」
ユメは半ば引きずられるようにして、キッチンをフローラと共にあとにした。

頭首達が訪れたのはそれぞれバラバラの時間だった。
一応決められた時間は午後一時。
その時間前に来たのは、アルボア、ソラ、ルチアのみ。
きっかり一時に来たのはゲントゥム。あと3人来てないのをみて、舌打ちをする。
「頭首たるもの時間を守れないやつがいるとは、けしからん」

やや5分遅れてマレ、そしてルチア。
「わーここがラクス様の洋館！　綺麗！　飾ってあるお花も素敵！　マレちゃんもこんなところに住んでみたいなぁ」
「遅れてすみませぬな。珍しくダークリットに数回も会ってしまった。今日はついてない」

15分遅れて最後についてのはイグニフェル。全く悪びれる様子もなく、ホールでラクスを見つけると嬉しそうに飛びつく。
「おい、ラクス！　元気にしてたか？　ほれ、ドーナツ持ってきたぞ」
「肩に触るな。馴れ馴れしくするな。早く応接間にいけ」
「あ、あぁ、イグニフェル様、ドーナツは私が預かりますわ。後で頭首様方にお出ししますわね。ありがとうございます」
フローラが慌てて、イグニフェルに駆け寄る。
「お、ありがとうフローラちゃん。ラクスはこんな可愛い許婚がいて幸せ者だな。たく、うらやましいぜ」
イグニフェルが最後まで言い終えないうちに、ラクスは彼をホールに残し応接間へと先に入って行った。

紫の洞窟　2

頭首達の会議は3時間ほど続いた。
その間フローラ、レニタス、ユメはキッチンに待機。
始めにクッキー、ドーナツ、そしてライチティーを出した後は、ときおりお茶のお代わりなどにまわるくらいで、残りの時間は三人で雑談をしていた。
フローラの作った、彼女曰く失敗作だが、とてもおいしいクッキーとライチティーと一緒に。

「前から気になってたんだけど、エナジーって何？　アルボア様がこの前おっしゃってたけど」
「エナジーというのは、術を使うための源。私達はエナジーをオリゴから吸収することができるの」
「魔力みたいなもの？」
ユメの問いに、フローラはコクリと頷く。
「そうね、そんな感じかな。でも、魔力と同時にエナジーは私達の生命でもある。エナジーがなくなったら、私達生きられないの」
「それなら、貴族様方は他の精霊達よりも長生きということ」
「それは違いますよ」
答えたのは、レニタスだ。
「寿命に直接関係するのは、サンギスです」
「サンギス？」
「はい。この力は、どの精霊も生まれながらに持っている力で、オリゴからエナジーを摂取するための役目を果たします。精霊は歳を重ねると、このパイプが徐々に壊れやすくなってきます。これが精霊にとって『老いる』ということでしょう。ゆえに、サンギスが壊

れることは、エナジーが摂取できない、つまり精霊の死を意味するのです」
「つまりサンギスは平均２００年ももつということ？　精霊の寿命は２００年を軽く超えるんでしょ？」
「その通りですね。まぁ、人間と同じように精霊にも個人差はありますが」

「でも術によってサンギスが破壊されてしまうこともあるのよ」
フローラが付け足す。
「術って精霊の？」
「そう。つまり術によってサンギスが負傷するとエナジーの摂取量が減り、強力な術が使えなくなったり、ひどい場合は体調に影響し、完全に破壊されてしまった場合は死に至ってしまう」
心なしか説明するフローラの顔が、ユメには暗く見えた。
まぁ、気持ちのいい話ではないし当然か……。
重くなりそうな空気に、慌てて話題を変える。

「でも、不思議なのは、どうして精霊達は人間界のことをよく知っているの？」
「特定の精霊が使える強力な術で見ることができるからですよ」
「なるほど……」
レニタスは説明を続けた。
「オリゴは以前に述べたように人間界に存在するもの。そして、そこにパイプを繋ぐのがサンギス。そのサンギスの繋がりを応用して人間の世界を覗くことができるのです。しかし、これはとても強力な術で莫大なエナジーを消費する。サンギスに術を直接かけるので、言うまでもなくとても危険です。身体に大きな負担、あるいは死を招いてしまうことも十分にありうる。王立研究所で人間界を研究す

る研究室がありますが、それ以外の一般の精霊がこの術を使うことは法律で禁じられています」

「そんなに大変なことなんだ、人間界をのぞ――」

「ユメ！」

最後は自分の名を呼ぶ声で遮られる。

振り向くと、ラクスがたっていた。

「ラクス様、どうかされましたか？」

レニタスが素早く反応する。

「いや、大丈夫だ。レニタスはここにいていい」

ユメは直感で「レニタスは」という響きにいやな予感を覚えた。

「ユメ、僕と一緒に頭首達のところへ来てくれ」

「どうして？」

「わけはすぐに分かる」

有無を言わせない響き。

ラクスは素早くユメの手首を掴むと、間を置かずに応接間へと引っ張っていった。

「ちょっと待って、ラクス！　その前に訳を教えてよ！」

抑えた声でもホールに響き渡るユメの声。

急激に早くなる鼓動。

この国の仕組みがよく分かってなくとも、あの頭首達の目の前に立つのはかなりの勇気がいる。

アルボアは即座にユメがエナジーを有していないことに気づいた。

正体がバレる可能性もあるのではないだろうか。

もう一度、今度は語気を強めて呼びかける。

「ラクス、お願い、止まって！」

ラクスはユメの言うことに無言で、また振り向きもしない。
足早に進み、応接間のドアの前に行き着く。
「ちょ、少しだけ待って！　ラ、――」
名前を呼ぶより先に、ラクスが応接間のドアを勢いよくあける。

ぐいっと引っ張られ、ユメはラクス共に応接間に足を入れた。
一瞬引っ張られた勢いで前のめりに倒れかけたが、なんとかバランスを保ち顔をあげると。

「どうしたんだ、ラクス。その女は、確かこの前いた……」
一番近くで不思議そうな顔をしているイグニフェルを始めとして、他の頭首達も皆ユメ達の方を注目していた。
ユメは顔がカッと熱くなるのを感じた。

「ラクス様、どうなさったのです？　その子は確か、病気で体調が不順な……」
イグニフェルの左隣に座っていたアルボアが、とまどったように言う。
驚いても不思議はない。
きっと頭首達にはホールでのやり取りも、響いて聞いていたに違いない。
許婚のフローラならまだしも、仮にカスミソウの精霊が第二王子であるラクスを呼び捨てにして、しかも抵抗するなんて不自然なはずだ。

「頭首方、お願いがあります。ぜひとも知恵をお借りしたいのです」
呆気にとられている頭首達、顔を赤くしているユメの前で、ラクスは落ち着いた口調で続けた。

「彼女は実は病気でなく、何かの複雑な、それも強力な術によりサンギスが封じられています。もちろん、いろいろ僕個人で既に調べてみましたが、暗号式の術、更にそれを守備する強力な術が幾重にもかけられていて解くことができませんでした。この術を解くための、知恵をお借りできないでしょうか」

しばらく沈黙が流れた。
それぞれの頭首達の顔には、驚きの色がみてとれる。
一人依然として、気難しい顔をしているゲントゥムを除いて。

「それは大問題ですな」
沈黙を破ったのも、またゲントゥムだった。

紫の洞窟　3

ゲントゥムは一番奥の席に座っているが、話し始めると同時にテーブルに両肘をついて、ユメをじっと観察するように短い銀色の髭が生えた顎の下で、両手を組み合わせた。

「王族の者が解けないほどの術、それはここにいる頭首と同等あるいはそれ以上の者がかけた可能性が高い。しかもかなりのエナジー使ったか複数の精霊が結託してか。その者の経歴は調べたのですかな？　私はかけられた術よりも、なぜその女子（おなご）にそんな強力な術がかけられたのかが気になる」

ラクスの真横より一歩後ろにいたユメは、ラクスの口元が少しだけ緩むのを見た。

まるで、その返答を待っていたというような余裕の表情。

「ええ、さすがゲントゥム様。その通りです。それこそが、僕がこの子をこの洋館で監視していた理由。危険な存在なら術を解くのではなく無理矢理、破壊すればいい話、まぁその結果、この子の命も破壊されることになる可能性が高いですが。しかし、一応調べておいたほうがいい、国を司る王族として」

淡々と話すラクスにユメは混乱した。

どこまでが本当で、どこまでが嘘のことなのだろう。

危険な存在だったら、ラクスはユメのことをとっくに殺していたのだろうか。

「もちろん。経歴を調べようとしました。しかし錯乱の術もかけら

れているようで、聞きだすことはできませんでした」
「錯乱？」
日の精霊ソラが鋭く聞き返す。
「えぇ、この子は自分が人間界から来たと信じきっています。先日フローラがこの子をカスミソウの精霊だと嘘をついたのは、この子が錯乱していることで恥をかかせないため、また僕が事が大きくなるのを案じて口止めしていたせいで。アルボア様、そこは大目に見て頂けるでしょうか？」
アルボアがゆっくりと、意味深な様子で頷く。

ユメはグラリと地面が揺れたように感じた。
思わず両手が震える。
どこまでが本当で、どこまでが嘘なのだろうか。
もしかしてラクスはずっとユメのいうことを信じてくれていなかったのだろうか。
レニタスも、そしてフローラも。
突然、突き放されたような、泣きたい気持ちに駆られる。

「人間界からやってきたって、傑作な錯乱だなぁ。ハハハハ」
豪快に笑うアウルムの横で、ルチアが身を乗り出す。
「確かに、驚きですな。一体誰が何の目的でこんなことを」
ユメは、いよいよ全身が震えだすのを感じた。
目を瞬いて、悔しさや不安で泣き出したいのをじっと堪える。
「すげーな、おめー人間界からやって来たのか！　おい、人間界がどんなだか話せるのか？　知ってるなら王立研究所の気難しい奴らも顔負けだな！」
明らかに面白がっている様子で、イグニフェルが言う。
「マレちゃん、こんな術初めて見た。大びっくりかも！」

ソラとゲントゥムはじっと無言でユメを凝視していた。
「確か名はユメさんとおっしゃいましたよね？　本当ならですが……。とにかくこの方は今とても怯えてらっしゃいますから、皆さん言葉には気をつけましょう。無理もないです。こんな子に、ひどい術を幾重にもかけるとは、誰がこんなひどいことを……」
周りを窘め、問うアルボアに、ラクスは相槌をうった。

「僕も大変興味があるところです。『誰』が、『なんの目的』でこんなことをしたのか。皆さんも、容易にご推察されることと思いますが、闇の精霊がもし関わっているのなら、しかも近年謎の出現、そして増産されているダークリットに何か関係があるのなら間違いなく大事（おおごと）です」

「そういえば、ここに来る前わしはダークリットに三度も会いましたぞ。それに関係があるとおっしゃっいているのですかな？」
ルチアが興奮した様子で言った。
「そういえばマレちゃんもここに来る前、２回ダークリットに会ったよ！　まぁすぐに退治しちゃったけどね！」
「僕が初めてこの子にあった時、実はこの洋館にそう遠くない森の中で会ったのですが、この子はダークリットと一緒にいました。まぁ、一緒にいたというよりは、襲われていた、という方が正しいですが。なので、関係がある、とは今断言できません。それを調べるために調査が必要です」

ラクスはそこで一拍おいた。
頭首の誰もが、真剣にラクスの言うことに耳を傾けている。
ゲントゥムは両手を組んだまま、目を閉じて聞いていた。
一方ユメはというと、依然として震えながらたっていた。それでも唇はかみ締めていた。

絶対泣かないぞ、と心に決めながら。
注目されるのも、笑われるのもうんざりだ。
極度の緊張状態が続いてるからだろうか、目の前が一瞬暗くなるのを感じた。
真っ暗ではなく、まるで夜の雲がユメの視界を遮るような感覚。
ラクスが話を続ける

「先ほども言ったようにこの術を破壊することは可能だと思います。僕は大技を使ってか、あるいは頭首方の力をお借りして、いや誰か一人僕にお力添えするだけで十分でしょう。しかし、それではこの子が死んでしまうだけでなく、かけられた術から得られる情報も同時に失ってしまう。それは何としてもさけたいところです」

「甘いですな、ラクス様」
ラクスに水をさしたのは、ゲントゥムだった。
皆が一斉にゲントゥムの方をみる。
ユメの視界が途端に明るくなった。

紫の洞窟　4

「勝手に今調べさせてもらったが――」
「おい、じーさん、今調べてたのか！？　全く力を感じなかったぞ」
イグニフェルが驚嘆して言う。
「雲隠れの術、暗号なども月の精霊の得意とするところですからな」
ゲントゥムが冷ややかに答えた。
「さすが、月の精霊ゲントゥム様。貴族随一の術使いと称されるのは、当然ですな」
ルチアが感心したように言う。

「そんなことは、どうでもいい。話を進めるが、この子の術には守備の術が重なるようにしてかけられている、それはラクス様の言ったとおり。だが、この子自身への守護の術も幾重にも大量の術の中の最下層でかけられていますぞ。下手な攻撃の術をしかけると、跳ね返ってくる。ある程度の大技にも耐え得るシールドがはられている」

「ということは……」
ソラが続けた。
「複数の精霊がこの子に術をかけたということになる。しかも、強力な精霊の集まり。私達に匹敵するような、いやもしくはそれ以上の。一人で全部かけたとは考えにくいでしょう。二人でも難しい、これほどの術を少数でかけたら術を使う者の命を危ぶめる」
ラクスはじっと聞いていたが、ソラが言い終わるとフっと微笑を浮

かべた。
「さすがソラ様、そしてゲントゥム様。予想していた通りです。僕よりもはるかにこの手の術には優れてらっしゃる。とりあえず、どれほど難しいであろうが、この術を僕はこの国のためにも解かないとならない。それで、思いついたのは……」
「読めましたぞ」
唸るようにゲントゥムが言った。
ラクスをまっすぐに睨みつけている。
「紫の洞窟ですな」
「ご明察」
ラクスが軽く頭を下げる。満足そうな笑みで。

「紫の洞窟……」
マレが、少し大人びた表情でつぶやく。
「世界を創りし9人の始祖達が残した9つの聖地」
ソラが慎重な面持ちで頷く。
「紫の洞窟、セレーネの聖地のことをおしゃってるのですね」

「ええ、聖地はそれぞれ特殊な力を有していますが、紫の洞窟、9人のうちの月の精霊の始祖セレーネが残した聖地は『真実を現す聖地』と呼ばれている。その名の通り洞窟には入ったものを本来の姿に戻す、泉がある。どんな強力な術も、備えもその泉には敵わない。もちろん9つの聖地は、精霊達にとって試練の場でもある。半端な覚悟では命を落とすことは重々承知です」
ラクスはそこまで言うと、まっすぐにゲントゥムを見据えた。

「聖地は頭首に受け継がれるもの。頭首のみがその聖地へと続く道を開くことができる。セレーネの聖地へと続く道を開けるのは、ゲントゥムさん、月の頭首であるあなただけだ。どうか、泉へと向かう許可を頂けませんか。国にとってもこれは重要なことなのです。僕は王族の端くれとして、その役目を果たさなければならない」

沈黙が流れる。
皆がラクスそして、ゲントゥムの顔を見守った。
ゲントゥムは無言でラクスを見つめていたが、しばらくすると小さく息を吐き出した。

「策はちゃんと練ってあるのですかな？　ラクス様は王族、光の精霊として技も優れてらっしゃる。結界の張り巡らされた洞窟できっと耐えることはできるでしょう。しかし、隣にいる子はエナジーを摂取できない。まず今平然と立っていられるのが既に不思議ではあるが、エナジーのない状況であの洞窟に行くのは体がもつかどうか疑問ですな」

「仰るとおりです。まだ完璧ではありませんが、多少の策は練っております。僕だけじゃなく、レニタスや他の精霊にも同行をお願いする予定です。道中で死んでもらっては、情報も掴めないまま。それだけは避けたい」

謎を解くのは最優先事項。
ユメの命にはどうなろうと関心がない。

先ほどから、ラクスがこの２つのことを暗喩するたびに、ユメは胸がキリっと痛むのを感じた。
どうして、どの世界にいてもユメは常に一人ぼっちなのだろう……？

この世界に来てからの日々、短い期間でもラクスとレニタスとフローラがいて、ユメは少しだけ仲間ができたような気がしていた。ここでは誰もユメのことを「変わってる」などと陰口を叩く者などいない。

そう思っていたのに、今では急にラクスもそしてフローラやレニタスでさえも全く見知らぬ他人のように感じる。

もちろん、ラクスがどこまで本心をここで語ってるのかは分からない。

けれど、先程から直感がユメに辛い現実を突きつけていた。

「よーし！」

突然大声を張り上げて、イグニフェルが立ち上がる。

「おれも行くぜ！　手を貸してやるぞ、ラクス！」

「お前はいい。足でまといだ」

「またまたー、そんなつれないことを言うな――」

「ゲントゥムさん」

イグニフェルを無視し、ラクスが先を続ける。

「ことは早いほうがいい。二日後、道を開いて頂けるでしょうか」

「……いいだろう」

渋々ながらといった様子でゲントゥムが承諾する。

「二日後この洋館に訪れ、紫の洞窟への道をあける。その後の身の安全は、保障しませんがな」

「ええ、望むところです」

頷くとラクスは、長らく掴んでいたユメの右手首を離した。

不意に自由になる手首に、冷たい空気が触れる。
ユメは震える左手でその手首にそっと触れた。

紫の洞窟　5

頭首達が洋館を去るのをホールで見送った後。
フローラとレニタスは応接間で片づけを始め、ラクスは書斎にまた戻って行ったが、ユメは唇を噛んで覚悟を決めると真っ直ぐにラクスの書斎に向かい、断りもなしにズカズカと入って行った。

オーク製の大きなデスクの前で、座り心地のよさそうな椅子に腰掛けていたラクスは早速本を手にとって読んでいたが、ユメが突然入室したことに全く驚きもせず、それどころか本から顔もあげようとしなかった。

「どこまでが本心で、どこまでが嘘なの?!」

不愉快さを隠しもせず、ユメはラクスに問い詰める。

「その前に他人の部屋に入る時はノックをするというマナーは、君がもといた人間界にはなかったのかい?」
ラクスの冷ややかな声は、腹立たしいくらいに落ち着きを払った様子でユメの耳に届いた。
「君のやって来たという、まやかしの人間界で」
「まやかし?」
ユメの声が怒りで震える。やはり嫌な予感はあたっていた。
「ここは人間界と見かけはほとんど変わらぬ世界でも、所詮人間の世界を真似て作った虚構の世界。つまり根本的なところは全てが違う。仮に人間がこの世界に何かが起きてこの世界に来られたとしても、とっくに死んでいる。君がエナジーを摂取せずにここで生きていられるのは、幾重にもかけられている守備の術のお陰。最下層に

張られているというシールドがあるとまでは僕は見ることはできなかったが、ゲントゥムが言うのならそれは本当なのだろう」

そこでラクスは、読んでいる本のページをめくった。
至ってユメには興味がないらしい。
「まぁ、術がかけてあるのにはすぐに気づいた。術は誰がかけたか。もちろん精霊だ。人間はこんなことできるはずがない。君が、人間界から来たはずはない」
「どうして信じたふりをしたの？」
「何者か分からないやつをわざわざ怒らせたりするのは、馬鹿がやることだ。懐柔しながら見張る、それが一番言い方法だと思わないか？」

今のラクスには、最初出会った時の紳士的な優しさはかけらもなかった。
エメラルドグリーンの瞳も凍ってるかのように、冷たい。
これが、ラクスの本性……。

「行きたくないといったら……？」
「どこに？」
「紫の洞窟に。私はあなたに従う義務なんてない」
「否が応でも連れて行くさ」
ラクスが余裕の笑みを浮かべる。
「逃げてもかまわないが、無駄だとは言っておこう。君が最初に来た日から、レニタスの優れた風の術でずっと君の行動発言を監視している。よって逃げても、君を捕まえるのは容易い。まぁ、めんどくさいから、できれば大人しくしていて欲しいがね」

怒りでまた全身が震え始め、何も答えられずにいると、ラクスが付け足した。

「心配しなくていい。こちらとしても、道中で君に死んでもらったら困る。命は保障されてると考えてもらっても構わない」

「最低……」

「まぁ、気づかない方が能天気すぎるんじゃないか？　正体不明の赤の他人をそうやすやすと自分の家に招くやつがいる？　警戒するのがとうぜ――」

ラクスの声は、突然のパンッという音にかき消された。
ラクスの持っていた本は数秒宙を舞い、そして床に落ちる。

気づいたらユメは肩で息をしながら、たった今ラクスの頬を打った右手を震わせていた。
ラクスはしばらく、本の落ちていった方をぼんやりと見つめていたが、やがて、そこで初めてユメを見上げた。
その顔は怖いほどに無表情だった。まるで始めから感情のない生き物のように。

ユメはぞっとするような感覚を覚え、くるりと背を向けるとそのまま駆けて書斎を飛び出した。
すると書斎のドアの脇には、レニタスが立っておりユメと目が合った。風の術を使っているのなら、今書斎で起こったことも全部見ていたのだろう。
レニタスは何かを言おうとして口を開きかけたが、その前にユメは

ホールへと駆け出した。

ホールで書斎からちょうど出てきたフローラに鉢合うも、ユメの表情を見て驚きそのわけを問うのを無視して、階段を駆け上り、自室へと飛び込んだ。

ドアを大きくバタンと閉めると、そのまま床に崩れる落ちるようにして座り込む。

どうして、いつも自分は……。

特別目立ったことをするわけでもなく、人に嫌われることをするでもなく、それなのにいつも浮いてしまう。もちろん、それを望んでいたわけでもない。

ユメは事が始まったその日を思い出した。

この世界に飛ばされた日。

――杉原さんって、なんか変だよね。大人しい子だけど、どこか薄気味悪いところがある。

――ああ、分かるかも。行動とか発言は至って平凡なんだけど、なんかね。生まれ持ったオーラなのかな？

――というよりは、杉原さん、両親いなくて養護施設で育ったらしいから、やっぱそこらへん私らと違ってくるんじゃない？

――なるほどね。有り得るかもね。

高校のトイレで偶然聞いてしまった、同じクラスの女子の会話。
唇をかみ締め、拳をぎゅっと握りしめ、ユメはじっとしていた。

こういうのには慣れっこでしょ、と自分に問いかけながら
そのまま施設に帰宅する気がしなくて、普段からいつもよく一人で
いく森に遊びに行った。

その森は廃墟となった病院の裏にあるが、幽霊が出るという真偽が
分からぬ噂のせいであまり人は近寄らない。一方、ユメは心霊現象
など全く気にならず、町の喧騒から離れ一人になれることを好んで
よく足を踏み入れた。

実は、ユメは3歳か4歳の時、この病院の裏の森で保護されたらし
い。
当時はまだ営業していた病院の看護師さんが、偶然近くを通りかか
ってユメを見つけた。
一人で突っ立っていたという。
泣きもせず、無表情で、宙を見つめて。

ユメにはこの時の、そしてそれ以前の記憶が白紙と言っていいほど
に全くない。

紫の洞窟　6

ユメが発見された時、地元の新聞はそれを取り上げ賑わった。
総合病院、そしてその裏の森は、もともと不思議な噂が飛び交っていたから、人々の関心もそれだけ多く集まった。

夜中、病院の廊下で女の人の笑い声が聞こえただとか、病院遺体保管庫から消えた遺体だとか、人魂を見ただとか、嘘か本当か分からない心霊スポットにはありがちな噂ばかりではあったが、

言葉を一言も話すことのできない少女が一人森に立っていたのは、疑いようもない事実であり、少女がどこから来たのか推測する記事が多く書かれた。

ユメが歳を重ね、少しずつ養護施設に馴染んでいっても、巷でささやかれていた噂は不気味なイメージとなってユメの背中につきまとい、施設の中でも浮く存在であった。施設の職員でさえもユメをどこかで不気味がってる節があるのを、幼い時分から敏感にも感じとっていた。

不気味な噂のためか、人々はその病院に足を運ぶのを避けるようになり、病院はやがて廃業となる。既に老齢であった院長は、他県で同じように病院を開業していた息子のところに身を寄せたという。

しかしその後も、廃墟と化した病院と鬱蒼と木々や植物が生い茂る森はそこにあり続けた。
肝試しとして、面白がって若者がたまに足を踏み入れる以外は、誰

も近寄らない。
ただ一人、ユメを除いて。

最初は自分が発見された場所として、興味本位で訪れた。小学校三年生の頃。もちろん、その時はユメも他の人と同様、森に入っていくのには勇気が必要だった。
病院の前で躊躇し、何度も回れ右をしかけた。
同級生にいたずらで泥だらけにされたボロボロの運動靴を長いこと睨みつけていた。
それでもユメが一歩前に踏み出したのは、どこからか来る不思議な義務感のためだ。
見なければならない、そこへ行かなければならない、まるで誰かに指示されているかのように、頭から離れない。

今思えば、探していたのかもしれない。
他の子供達にいじめられても、大人達に不気味がられても、平気だ、殺されるわけでもないし、平気だと自分に何度も言い聞かせていたけれど、きっと自分が落ち着ける場所をずっと無意識に求めていた。
ありのままの自分を無条件で受け入れてくれる場所。

慣れていたつもりだった「孤独」は、甘受することができなかったからこそ感じるものだった。

時折、冷んやりとした風が、吹き抜ける。
黒のマジックで落書きがされたランドセルの皮ベルトを、折り目がついてしまうほどにぎゅっと握り締める。

自分の生い茂った草を踏む音、風に木々が葉を揺らす音、たまに森のどこかで不気味な声で鳥が鳴く以外は、森は静寂だった。

見上げると大きく伸びた木々によって、途切れ途切れに青空を覗くことができる。

感じたのは、恐怖ではなかった。

安心感、そして懐かしさだった。

そして、その日以来ユメはたびたび森に通うようになる。

いいことがあった日も、悲しい時も。

道路に面している敷地内にためらいもなく入っていく様子を、たまに通りかかった人が不審げに眺めることもあったが一向に気にしなかった。

安らぎを見出した。

そこにいれば、自分がもっとも自分らしく、地にしゃんと足をつけて存在できるような気がしたのだ。

木々も、森に住む動物達もユメを拒まない。

だからあの日、ユメが精霊界へと飛ばされた日、あの時森にいたのはいつもの習慣で、何も特別なことでうはなかった。

実際ダークリット、そしてラクスに会う以外何も特別なことはなかった。

いつ人間界と精霊界の境界線を越えたのかも分からなかったのだ。

人間界で暮らしていた日々。

そう遠くない昔。
なのに、既に記憶が薄れてきていて、綻びが生じた薄い眠りの時にみる夢のような程度にしか思い出すことができない。
鮮烈に思い出そうとすればするほど、色あせて遠ざかっていく。

――錯乱。

誰もがユメを変だ思っている。
人間界では不気味がられ、疎まれた。
そして次元を超えて精霊界に来た今でも、錯乱していると思われている。

かつて地元の新聞は、また町内の人々はユメがどこから来たのか、親は誰なのか興味津々で互いの推測を競わせた。
そして、今、この洋館へとユメを導いたラクスは、ユメの正体を暴くことに手段を選ばない。

自分が誰なのか。
ユメが一番知りたかった。
どこから来たのか。

錯乱していると言われ、涙が出るほどに悔しかったのは、自分でも自信がなかったからだ。

心のどこかで、ラクスの言ったとおり自分は今まで錯乱していたの

かもしれないと動揺する自分がいた。

どうしようもなく悔しかった。

頬を涙がとめどなく伝う。
目尻に熱と苦い痛みを感じる。

ドアに寄りかかるようにして座り込んでいたユメだが、ふらふらと力なく立ち上がるとベッドの端まで移動し、そのままパタンとベッドの上に倒れた。

そのまま次の日もユメは起きなかった。
いや、起きれなかった。
全身が痺れるように熱く、重く、悪寒がとまらない。
やがて容態は悪化し意識が朦朧としはじめ、誰かがユメの部屋に入りベッドに走りよっても、誰であるか認識することができなかった。

紫の洞窟　7

目を開けても、視界は霞んで何も見えない。
体が燃えてるかのように熱い。
それなのに全身、ベッドの中で絶えず震え続けている。
息が苦しく、頭は割れんばかりに痛かった。

このまま自分は死んでしまうのだろうか。
あまりの苦しさに、熱を帯びた涙が目尻に溜まる。

それもいいかもしれない。
ユメはふと思った。
このまま消えてしまっても、この先生き延びれたとして一生「独り」で生きていかない定めならここでピリオドを打ってもらったほうが楽だ。

ユメは目をゆっくり閉じた。
何もかも受け入れてしまおう。
抗うことなく。
諦めて、成り行きに身を任せる。
人間界での恵まれない境涯で身に着けた術。

意識がまた混濁への中へとかけおちる。
その直前に、周波数がうまく合っていないラジオで聞くような低い声がして、瞼に優しい光を感じた気がした。

＊　＊　＊

ユメが再び目を覚ますと、窓の外は明るかった。
容態がよくなったのだろうか。
未だ体はずしりと重く、全く動かすことができないが、視界ははっきりとしてきた。
ふと自分の額に、濡れた柔らかい布が置かれていることに気づく。
あまり力が入らない手をなんとか動かして、それに触れようとした時、ベッドの脇から声が降ってきた。

「そのまま、額においていたほうがいい」

今、一番聞きたくないと思っていた、変わらず落ち着きを払った声。
まだ寝起きで朦朧としていたせいか、部屋に自分以外の誰かがいることに今更気がつく。

「今日は洞窟に行く予定だった日。ゲントゥムが約束通り来たが、延期してもらったよ」

ラクスは本人のいないところでは、頭首達を呼び捨てにする。
そこには王族であることの地位への誇りが感じられるような気がした。
ユメは無言だったが、また話す気力もまだなかったが、ラクスは一向に気にしない様子で話し続ける。

「ゲントゥムも、君を見かねたのか、癒しの術を君にかけて帰っていったよ。光の精霊にも癒しの術はあるが、僕はその手のものはど

うも苦手だから助かった。その布にもその術がかかってある。だからそのまま、動かさないほうがいい」

穏やかでない蠢く自分の心に鞭をうって、ユメはゆっくりとラクスの方をみた。

椅子に腰をかけたラクスの傍には、ダークブラウンのサイドーテブルがあり、その丸い天板の上には湯気をたててているお粥らしきものがおいてあった。

「フローラが作ったものだ」

ユメの視線に気づいて、ラクスが説明する。

「ひどく心配していたよ」

再び暗い感情が奥底で騒ぐ。

その「心配して」くれていたというフローラもきっと、ユメのことを信じていてくれてなかったのだろうから。

「すまなかったと思ってる」

唐突な謝罪にユメは目を大きく見開いた。

ラクスは、真っ直ぐにユメを見つめたまま続けた。

「言い訳ではないが、僕は王族のものだ。端くれでも、国のためにあらゆる危険を見出して防ぐ義務がある。今ダークリットの謎の大

量出現で不安を抱えてる精霊達は多い。一見落ち着きを払っているように見えるが、貴族達も敏感になってる。皆が僕や貴族のように強い術を使えるわけじゃない。既にダークリットの犠牲になった者は少なくない」

そこでラクスは一拍おいた。
ユメは無言だったが、静かに話を続けるラクスを見守っていた。

今の謝罪も何か思惑があってのことではないかという猜疑心は拭えなかったが、それでも精霊界で現在起こっている出来事に関しては少なからず興味があったのだ。
自分がこの世界に来た時、初めて遭遇したのがその謎に満ちたダークリットだったのだから。
そしてユメにだけ聞こえるダークリットから聞こえるあの声……。

「正直に言うと、君の言ってたことは変わらず今でも信じることは難しい。けれど、君が嘘をついてるわけではないことは知っている。最初に『真実の光』の術で試したし、それに君を見てて君自身は悪意のある者でないことも分かっていた。いろいろと酷い事を言ったと反省している。本当にすまなかった」

そこでラクスが口を閉じ、沈黙が流れた。
ラクスはユメの反応を伺ってるのは、見て取れた。
エメラルドグリーンの綺麗な瞳に真っ直ぐに見つめられ、ユメはどうしようもなく気まずく感じる。
信じるな、騙されるな、と心の一部が警告する。
けれど素直に謝罪を受け取りたい、今話してくれたことはラクスの本心であると信じたいという強い気持ちもあった。

逡巡した末、結局ユメはゆっくりと頷いた。
すると、ラクスは小さい息をふっと漏らした。
ユメの反応に安堵したかのように、表情が少し和らぐ。

「謝罪の後に、またこの話をするのは気詰まりでもあるんだが、もう少し体調が回復したら、やはり紫の洞窟に僕と一緒に行ってほしい。君のためでもあるんだ。どういう所以かは分からないけど、君に幾重もの術がかけられているのは事実。今まではどうだったか分からないが、現在はそれが君の体の負担になっている可能性がある。早く解除しないと君の体に、今回のように悪影響を及ぼしてしまうかもしれない」

ラクスがためらいがちに先を続ける。

「承諾してくれないか？　君の身の安全は僕が保障する」

否が応でも連れて行く。
頭首の前でラクスが放った言葉が、ふと思い出された。

そしてラクスは今、ユメに同意を求めている。

「……行く」
そこで初めて声に出して言った。

本当は自分の体がどうなろうと、例え命を絶つ結果になったとしてもかまわなかった。
ただ承諾したのは、抗いようがなく「同意」したかったからだ。

ユメの問いにラクスは微笑み、そして椅子から腰を浮かした。
「僕は書斎に戻るけど、君は可能なら、フローラの作ったお粥を食べたほうがいい」
そして既に冷めてしまっているだろうお粥の上に片手をかざすと、小さな光を出した。
途端にまたお粥から湯気が出る。
ベッドからでも光の熱気を感じることができた。
「僕は癒しの術は苦手だけど」
ラクスはそう言うと、今度はユメの頬にそっと手の甲をあてた。
思わず緊張して、ユメは体を強張らせた。
男の子にこんな風に顔を触られるのは、初めてだ。
ラクスの温かい手に、体の全神経が集中する。
「クラッティオ」
つぶやきと共に、柔らかな光が発生する。
先ほどの光とは違ってどこか儚げな光だが、ユメの体内に浸透し全身に心地よい温かさが伝わるのを感じた。
やがて光が霞のようになって消え去り、ラクスが手を離す。
「またゆっくり休むといい」
柔らかな声で言うと、静かにその部屋を後にした。

ユメはラクスが温めてくれたお粥には手をつけようとせず、そのままぼんやりと虚空を見つめていた。
食欲がなかったからではない。
自分の今の状態が不思議だった。
ラクスが去っても、頬に触れた手の温かさと感触、胸の鼓動の高鳴りがなかなか消えない。

ラクスはどれくらいの間、この部屋でユメを見てたんだろう？
今頃になってその疑問が湧き出て、ユメの頭の中を執拗にとらえ、なかなか離そうとしなかった。

紫の洞窟　8

その日は珍しく雨だった。
ユメは緊張して、ラクス、レニタスと共にダイニングで待機している。
三人とも終始無言で、その時を待っていた。

レニタスが入れた紅茶も、皆ほとんど口をつけていない。
体調不良による混濁状態から意識を取り戻したあの日から数日が経ち、病み上がりのためまだ完璧ではないものの、普通に生活できるまでには回復していた。
今三人とも無言なのは気まずさのためではなく、それぞれユメと同じように今から起ころうとしていることに緊張しているから。
少なくともユメはそう感じた。

けれどラクスとレニタスに限ってはこの状況に気まずさを感じて黙り込んでいるという可能性もなきにしもあらずだ。
回復してから、ユメはレニタスやフローラ、そしてラクスは何事もなかったのように今までどおり接したが、どこかぎこちないところがあったのは否めない。
レニタス、フローラ、そしてラクスまでも、どこかしらユメにこの数日間とても気を使っていたし、また少しよそよそしさも感じられた。

仕方がないか。
ユメはため息をついた。
激怒した上に、自分はこの国の第二王子たる人を思いっきり平手で

打ったのだ。
ラクスもそれなりにひどいことはしたとはいえ、あるまじき事態。
後で誰も何もそのことに関して追求してこないことが不思議だった。

外から聞こえる雨の音がふいに弱まる。
出かけるのだから止んでくれればいいのにな、ユメがそう思った時、
玄関のチャイムが鳴った。
その瞬間にレニタスがさっと立ち上がり、お迎えしてきます、と一言残し、足早にホールへと向かう。
玄関が開く音、直に聞こえる雨の音の後、聞こえてきた声は。

「よう！　ラクス、今日も元気か？」

片手をあげ、いつもの変わらない能天気さでダイニングに表れたイグニフェルにラクスは表情を強張らせ、レニタスに問うた。

「レニタス、僕はこのアホを、ここでこうやって待っていたわけじゃないんだが……」
「何言ってんだよ、ラクス」
困ったような表情をしているレニタスより早く、イグニフェルが答える。

「一緒に約束しただろうが。忘れたのか？」
「そんな約束はした覚えはない。足手まといだ」

「だから、そんな冷てーこと言うなって。これでもおれは、火の精霊の頭首なんだぞ！　戦闘術は得意だし、頼りになるぜ！」

そこでイグニフェルは、自分が立っているところの一番近くに座っていたユメにようやく気づく。

「お、ユメちゃんだっけ？　体調よくなったか？　この前来た時は倒れて動けねぇって聞いて、がっかりしたんだぜ、俺は」

話したことはほとんどないのにもかかわらず、この馴れ馴れしさにユメは面食らった。

「ユメ、無視しておけばいい。おいイグニフェル、ちょっとでも足を引っ張るようなことしたら、」

イグニフェルが足を引っ張ったらどうなるか、それは聞かずじまいだった。

また玄関のチャイムが鳴り、レニタスが再びダイニングを素早く去ると同時に、ラクスは口をつぐんだ。

今度は間違いなく、ラクス達が待っていた者だ。

「準備はいいですかな？」

ダイニングに入るなり、間髪を入れずにゲントゥムは言った。

「用意ができているのなら、ここの庭ですぐに道を開きましょう」

ラクスは立ち上がって、コクっと頷いた。

「ありがとうございます、ゲントゥムさん。それでは早速、庭へ移動しましょう」

この洋館の庭は、ホールの玄関とは反対側のドアから入ることができるが、フローラそしてレニタスがこまめに手入れをしているため、素晴らしいガーデニングが施されており、今も多種の花が咲き乱れている。

皆と連れ立って無言で庭へ向かっている途中、ゲントｘムがユメの傍に寄り声をかけた。

「緊張しているのかな？」

話しかけられたことに驚いて、思わず肩を強張らせたユメだったが、意外にその声は優しかった。

「はい、何がなんだか、よく分からないので」

「まぁ、無理もない。混乱するも当然のことだろう。一つ聞きたいんだが……」

「は、はい、何ですか？」

「あなたの一番古い記憶はいつの記憶ですかな？」

ユメは小首をかしげた。

どうしてゲントゥムはそんなことに興味があるんだろう。

「一番古い記憶は、児童養護施設での記憶だと思います。ぼんやりとしか覚えていないんですが……」

「児童擁護施設というと？」

「私は親の分からぬ孤児だったのですが、えっと児童擁護施設というのは、にんげ……」

そこでユメははっとして口をつぐみ、恐々とゲントゥムを見上げた。

「人間界」なんて口にしたら、きっとまだ錯乱していると思われる。

しかし次のゲントゥムの発した言葉は、予想外のものだった。
「人間界の孤児院といったところですかな？」
「え、ええ、そうですけど……」
驚きのせいで、言葉が尻すぼみになる。
もしかして、ゲントゥムさんは私の言っていることを信じていてくれてるのだろうか？
この一番信じそうにない気難しい頭首が？
それともユメを哀れんで、話を合わせてくれているのだろうか。
きっとそうだ。
ストンと納得が落ちてくる。
数日前にも、ユメを哀れんで癒しの術をかけてくれたと聞いていたし。
ユメはぼんやりと前方を眺めた。
アクロピアで見たのと全く同じように、ラクスとイグニフェルが何かで言い争っている。
レニタスは一番先頭を歩いていたが、庭へのドアを開いた――
「浮かない顔だな」
ユメをちらりと見て、ゲントゥムが言う。
ユメはためらいがちに口を開いた。
「先日は私に癒しの術をかけてくださったとお聞きしました。本当

にありがとうございます。そのおかげで助かりましたし、本当感謝しています。でも……」
「でも？」
ゲントゥムが続きを促す。

ユメは言おうかどうか迷ったが、結局言うことにした。
「同情はあまりしてほしくないんです。ラクスも含め、皆が私が錯乱していると思っていることは知っています。それはもう分かっているので、今更無理に哀れみで話を合わせて頂いても余計につらいだけなんです」
すごく失礼なことだと分かっていたし、怒らせるかもしれないという危惧もあった。
しかし、依然として残る「悔しさ」がユメに言わせた。
ラクスを引っぱたいてみたりと、最近自分はヤケクソな行動が多いなという反省と共に。

次の瞬間、さらに驚くべきことが起こった。

ゲントゥムが声を立てて、笑ったのだ。
前で言い争いしていたラクスとイグニフェルが、驚愕の顔で振り返る。

「なかなか肝が据わった女子（おなご）だ」

ゲントゥムが髭を震わせて、まだ笑い続けているので、ユメは自分がそんなに変なことを言ったのだろうかと恥ずかしくなり、意図せず顔を赤らめた。

「あなたは私が、あなたが人間界からやってきたということを信じていないと思っているのですな」

「いえ、ゲントゥムさんが、というよりはここの世界の全ての方たちが」

ユメは慌てて言い訳をした。

ゲントゥムがぴたりと足をとめたので、ユメもつられて足をとめる。前方では庭への入り口で、ラクス、イグニフェル、そしてレニタスがこちらを振り返って様子を伺ってるのが見えた。

「正直に言いましょう」

ユメにだけ聞こえるよう、少し声を潜めて、ゲントゥムが言った。

「私は、あなたの言うことが本当である可能性はあると思っている。真実は分かりかねますがな、今のところは。だが、それももうすぐ分かるだろう。月の精霊の始祖、セレーネが直にあなたに教えてくれるはずだ。そして、それはあなたにとってそれは終わりではなく、始まりだ」

ユメは再び小首をかしげる。

ゲントゥムの意図、そして発言の意味が全くつかめなかった。

「よく分からないのですが、先日のここでの会議では、ゲントゥム様は私を信じている素振りは……」

「貴族は本心を容易く語らない。あの場にいた全ての頭首は、一見個性的でマイペースな者の集まりに見えるが、実際は政治において

も術使いにおいてもかなりの強者ぞろい。今後それを忘れてはなりますまい」

そこまで言うと、ゲントゥムは再び歩き出した。
数歩遅れてユメも続く。

今ゲントゥムが自分に言ったことを、もう一度頭の中で繰り返しながら。
人間界では、人の言葉の裏を読むのは得意だったはずだ。
それなのに、この世界ではうまくいかない。

なにはともあれ、ゲントゥムが言ったようにこれから向かう月の精霊の聖地、紫の洞窟で、自分のことで何かが本当に明らかになるというのならば、それはラクスだけじゃなく、ユメにとっても願ってもない話だった。

紫の洞窟　9

「それでは、準備はいいですかな」

いろんな種類の花々が咲き乱れる庭で、ゲントゥムが他の４人を見回す。

「お願いします」

ためらうことなく、ラクスが言う。

ユメは押し黙ったまま、足元を見つめた。

ラクスは聖地は試練の場でもあると言っていた。

ゲントゥムやラクスの言い方からするに、容易く行けるところではないことは明らかだ。

次第に心拍数が上がっていくのを感じ、ユメは落ち着くようにと自分に言い聞かせる。

ラクスは身の安全を保証すると言った。

この言葉は、嘘偽りのない誠実なものであると信じよう。

「それでは」

ゲントゥムが４人は見守る中、目を閉じ、静かに右手を顔の前に上げた。

まだ低い位置にある太陽の光に手をかざすかのように、手のひらを斜め上に傾かせている。

傍でも感じる、集中力と気迫。

「月の精霊の始祖、セレーネよ。闇夜を照らし真をみちび――」
ふいにゲントゥムの声が止んだ。
見ると、庭に面した森のある一点を強張った表情で睨んでいる。
ラクスもふと何かに気づいたように同じ方向に視線をあわせた。

「どうしっ――」
ユメが聞きかけた時、イグニフェルがユメの前に飛び出した。
「下がってろ。来るぞ！」

次の瞬間、皆が睨んでいた一点次々と黒い物体が飛び出してきた。
ダークリットだ。

ユメがダークリットに会うのはこれで3回目だが、今回は5体もの
のダークリットが目の前に立ちはだかっている。
人の形をした影のようにも獣のようでもある。

そして――。

『はぁ……た、助けてくれ』
『お母さん、怖いよう。どこにいるの？』
『あああああああ！　あああああああっ！』
絶叫しているもの、泣き叫ぶもの、助けを求めるもの。

前回よりもはっきりと聞こえてくる声々。
ユメは震えだした。
たまらず、一歩後退した時に、イグニフェルの周りに突然5個の大きな火の玉が発生した。

「ラクス、レニタス、じーさん、下がってていいぞ。俺がやる！」
堂々とした宣言と同時に、火の勢いがボンという音を立てると共により盛んになる。
「やるなら、さっさとやれ。ためるな」
ラクスがめんどくさいといった表情で返す。

「よし、行っ――」
「待って！！！」

イグニフェルが攻撃をしかける前に、ユメは思わず声を張り上げてそれを阻止した。
なんだよ、と怪訝な様子でイグニフェルが振り返る。

ユメがゴクリと唾を飲むと、口を開いた。
また錯乱していると思われてもいい。
「やっぱり聞こえるの！」
「ユメ？」
ラクスが不思議そうな顔でユメを見つめる。
「やっぱり聞こえる！　信じてもらえないかもしれないけど、やっぱり声がこのダーク――」
「伏せろ！」
「ラクス様！」

イグニフェルが覆い被さるようにユメを倒し、レニタスはラクスの前に飛び出た。
お互い向き合うように柔らかい芝生の上に倒れた刹那、イグニフェルの頭上をかすめて弾丸のように通る黒い影。
同時に風がかまいたちのように動き、ラクス達のいる方向から「ギャアアア」という断末魔が聞こえた。

次の瞬間にはイグニフェルがユメの上から素早く退いたので、慌てて身を起こして後ろを振り返ると、　ダークリットがまたユメ達に襲い掛かる体勢を整えていた。

が、声が聞こえる別の方向を見ると、さらに二体のダークリットがユメの方へ襲い掛かろうとしている。
『力が欲しい。力が欲しいいいいい！』

ラクス達側の方から聞こえる2回目の断末魔。
そして、ラクスの声。

「おい、ユメ、避けろ！」

ラクスが叫び終わらないうちに、三体のダークリットがほぼ同時にユメの方へと襲い掛かる。
と同時に、迎え撃つ術を繰り出すラクスとイグニフェル。
その二人を、突如地面から漏れ出(い)でたまばゆい光が包んだ。

「ちょっと待て、なんだこの光！？」
「これは……？」
「ラクス様？」
レニタスが心配してラクスに駆け寄るのを目の端でとらえたが、

ユメにはその二人を気にしている余裕はなかった。

光に妨げられ術を阻まれたラクスとイグニフェルを通り過ぎ、ダークリット達ががユメに襲い掛かる。

肌で感じられる猛獣のような残忍さ、異様で強烈な気配。

ユメは恐怖で動けなかった。

「ユメ！！！」

「ユメさん！」

ラクスとレニタスが叫ぶ。

観念して、手で顔を覆い目を閉じる。

一番先に飛び出したダークリットがユメに触れようとした時だ。

何かが両耳すれすれでで大きな音をたてて爆発した。

その後聞こえる、３つの断末魔。

顔から手を下ろすと、３つの影が霞んで消え去るとろだった。

「え……？」

レニタス、ラクス、そしてイグニフェルまでも皆が驚愕の表情でユメを見下ろしている。

ただ一人、この茶番劇に頭から不参加だった者をのぞいて。

「いやぁ、見事な威力ですな。私の読みははずれてなかったということだ」

ゲントゥムが満足そうに笑みを浮かべながら、ユメに歩み寄る。

「あなたに張られた、シールドは見事なものだ。かなりの強力な術。だがこのままでは、術が強力すぎてあなたの体に負担を与える。他人からかけられた術は、所詮他人のもの。自分の体に馴染むことはない。強力な術をしかも長期でかけられているとなると、あなたの生命力と相克してしまう」

ユメを始めとして、その場にいた者はぽかんとしてゲントゥムを眺めた。

ゲントゥムは当然固まっている空気にかまわず、話し続ける。

「文句はいろいろあるだろうが、あなたが紫の洞窟の最奥にある銀の泉に辿り着いた後で聞きましょう。幸運を祈ってますぞ」

ユメのすぐ傍でぴたりと足を静止させたゲントゥムは、再び目を閉じ右手をあげた。

そしてまるで、誰かが口を挟むのを牽制するかのように早口唱えた。

「月の精霊の始祖、セレーネよ。闇夜を照らし真(まこと)を導く力、我に与えよ」

ゲントゥムから溢れ出る眩い光。

「真実を求める者、この者達に祝福を与えん。いざ、我らが聖地、クレセレネを開け」

ゲントゥムが言い終わると同時に、ユメは視界が暗くなるのを感じた。

頭首会議で感じた、黒い雲に包まれる感じと酷似している。

ぼんやりとしてる間にそれは次第に濃くなっていき、何かを思案している様子でユメを見下ろしているゲントゥムもそして辺りの様子も、何もかも見えなくなる。

やがてすっぽりと闇に包まれ何も見えなくなった時、ユメは自分が地面を突き抜け、下に落ちていくような感覚をを覚えた。

紫の洞窟　9（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。

雑記ですが、「紫の洞窟」と名付けた話数が予想以上に長くなって、絵的にみっともない気がしてうーんうーんと悩んでおります。笑

近々、編集するかもしれません。

あともう少し進んだら、急展開が待っているのですが、少しでもうまく表現できるよう頑張って生きたいと思います。

これからもよろしければ、どうぞお付き合いお願い致します。

紫の洞窟　１０

ぽつりと額に冷たい水滴がおち、ユメは目を覚ます。
最初は暗くて何も見えなかったが、だんだん目が慣れてくると、自分が洞窟らしき中にいることが分かる。

水滴が落ちてきた天井を見、それから壁に沿って視線を滑らせると、すぐさま自分が「紫の洞窟」にいるらしいことを悟る。疑問の余地はない。洞窟の天井、そして壁は紫紺の光沢で輝いていたからだ。宝石か何かが一面に埋まっているらしい。
ゆっくりと身を起こし、あたりを見回すと、ラクス、イグニフェル、レニタスはそこにはいなかった。ユメの後にも先にも洞窟は続いているが、どちらに進めばいいのか、当然ユメには分からない。

ひんやりとした空気が洞窟の中を占めている。もう少し厚着してくればよかったと、今更ながら後悔する。

さて。

二の腕を手で摩りながら、思考を走らせる。

今は最奥にあるおるという泉を探すよりも、やはりラクス達を探すほうが得策だろう。

ぽつり、とまた天井がら雫が落ちてくると同時に、ユメは大声で呼びかけようと深く息を吸った。
が、その直前に冷たい空気が微かに動いたのを頬で感じ、無言で口を閉じた。

予想は的中したみたいだ。

「ユメさん、こんなところにいたのですか」

背後から聞こえる柔らかな声。振り替えると、レニタス。そしてその後ろには、ラクスとイグニフェル。

「早く見つかってよかったよ」

ほっとしたように、ラクスが言う。

「また、ゲントゥムが何かを仕掛けたんではないかと、不安だったんだ。彼は僕を簡単に欺くことができる。今日、身をもってそれが分かったよ」

口調からして、飛ばされる前にゲントゥムがしたことにラクスが極めて不愉快に思っていることが見て取れる。ユメは、先ほどゲントゥムが何を仕掛けたというのは分かったが、正確には何が起こったのか分からないでいた。ただ、ダークリットから聞こえてくる声、断末魔、そして自分の周りの空気があたかも爆発したかのような爆音に未だ混乱している。

「さっきは、何が起こって……？」

ラクスがその問いにはぁと小さく息を吐く、その横でイグニフェルが足を踏み出してユメに近寄った。

「寒いか？　さっきから、腕を摩っている」

はっとして、ユメは摩る手を止めた。無意識にずっと摩り続けていたらしい。

「ここでは結界が張られているようで術が使いづらいが、これくらいなら」

ラクスの言うように、いつも「せわしない」イグニフェルだったが、今いつになく真面目で落ち着きを払っていた。

「ペティ・イグニス」

低く小さい呪文と共に、ユメを囲むようにして、円状に配置した４つの小さな火の玉が現れる。少し驚いて思わず一歩後退すると、同じだけ火の玉も後退した。どうやらユメの動きに合わせて、火の玉も動く仕組みになっているらしい。急にユメを包むまわりの空気が暖かくなるのを感じた。

「あ、ありがとう」

ぎこちなくユメがお礼を言うと、イグニフェルはいつものように歯見せて、ニっと笑った。

「少しは気が利くところのもあるんだな、火（ひ）。お前にそういう気質

はかけらもないのかっと思っていたよ」

ラクスが憎まれ口叩く。不思議だ。いつも至って冷静なラクスだが、イグニフェルを前にするとむきになることが多い。イグニフェルはそっけない態度をとられても、全く意に介せずラクスを慕い続けてるが、それにまるで子供のように応じるラクスも本当はまんざらでもないんだろう。

「なんだよ、俺が気配りができる男だってのは、お前が一番知っているはずだろ？　ラクス」

「それより」

ラクスが豪快にイグニフェルを無視して、話を切り出す。

「さっきのユメの問いだが、ユメは目を閉じてたから分からなかっただろうけど、ダークリット達がユメに襲いかかろうとした瞬間、ユメにかけられていたシールドの術が発動して、寸前でユメの周りで爆発するようにダークリットを返り討ちにした。その威力であっけなくダークリットは消失したよ。やられたよ」

ラクスが声に苛立ちを滲ませる。苦々しげな表情が、顔に浮かぶ。

「さっきは完全にゲントゥムに出し抜かれた。ダークリット5体なんて、あんなにドタバタしなくても冷静に対処すれば5秒もかからずに消すことができたはずだ。あんなみっともない場面を目撃して、さぞかしゲントゥムはおかしかっただろう」

「ラクス様……」

ラクスの自嘲的な言葉に、レニタスが心配そうな表情をする。

「だがよ、ラクス」
イグニフェルが問いかける。
「最後に俺達を包んだあの光は、じーさんが――」
「その通りだ。あれは間違いなく、月の精霊の術
ラクスが重々しく頷く。
「僕達に術を使わせないようにして、ユメのシールドを発動させるための」
「でも、何のために？」
ユメが思わず口を挟む。ゲントゥムの行動は、ユメにとってでさえ疑問が多い。まるでユメが人間界からきた話を信じているかのような素振り、気難しい性格であるのにユメに対しては割りと好意的で、むしろ大きな関心を寄せているようにも感じられた。
分からない、とラクスが首を横に振る。
「今回だけでなく、彼の意図はいつも分からない。ダークリットや闇の精霊と実は繋がりがあるんじゃないかと、実は王族も細心の注意を払って目をつけているのだが、なかなか尻尾を出さない。ユメに対してもかなり興味がある様子だが、理由は分からない。目的も分からない。一方的にこちらがしてやられただけだ。僕も迂闊だった。あれだけ油断してはいけないと肝に命じていたのに、大馬鹿だったよ」
ラクスが視線をユメの足元あたりに落とす。ゲントゥムに出し抜かれたことが、よほど悔しいらしい。ユメが返す言葉が見つからず黙っていると、ふとラクスが再び顔を上げた。
「そういえば、ユメ」

「何？」
「庭に出る前、ホールで何を彼と話していたんだ。あそこまで上機嫌に大笑いをするゲントゥムは見たことがない。彼の前ではレニタスの術も迂闊には使えない。十中八九見破られるだろう。話の内容が気になるんだが、よかったら話してくれないか？」

悪びれもせずに盗み聞きする意思が存分にあったことを話すラクス。大きく頭（かぶり）を振って、イグニフェルが同意を示す。

「いつも、月のじーさん、おっかねぇ顔してるからな。俺もあん時は、びっくりしたぜ」

「あの時は……」

ユメは言葉を詰まらせた。

あの時は、ゲントゥムはユメの話を信じているとまでは断言しないものの、大いに可能性があると思っていると言ってくれた。ラクスは全く信じてくれていなかったことを、ゲントゥムは、頭首達の面々の中でも随一の術使いだと称される彼が、真実である可能性があることを認めてくれた。もちろん、それも何かの思惑があって嘘をついているのかもしれないから、手放しでは喜べないが、誰も信じてくれないという失望の中ではその言葉がどれほど嬉しかったことか。

気まずい沈黙が続く。

何か声に出して言おうと思っても、何も出てこなかった。どういう顔をしてこのことを、よりによってラクスに伝えればいいのだろ

う。ユメが困惑してとまどっていると、じっとユメを見つめて返答を待っていたラクスだが、ふいにそっぽを向いた。

「言いたくないなら、言わなくてもいい」

途端に冷たくなるラクスの声。レニタスの方にに体こと向く。

「こうしているうちにも、だいぶ時間がすぎた。このまま立っていても時間の無駄だ。レニタス、洞窟はこっちの方向に長く続いているのだろう？」

指をさして一方を示すラクスに、レニタスは頷きながら肯定した。その方向に無言で歩き出すラクス、何か物言いたげな視線をちらりとユメに寄越してあとに続くレニタス。その後にイグニフェル、そしてユメも続いた。

ラクスはどうやら機嫌を悪くしたらしい。ユメがゲントゥムを庇ったように感じられたのだろうか。それでも、いくら王族がゲントゥムを警戒し、ラクスも彼を腹立たしく思おうが、ユメはゲントゥムをどうしても悪い人のようには思えなかった。

紫の洞窟　１１

「それにしてもさー」
イグニフェルが両手を頭の後ろ組んで歩きながら、気の抜けた声で言う。
他の３人はもちろん、ここまで能天気に歩いてはいないが。
「ここ、ほんっと紫色の洞窟なんだな。紫色の宝石かなんかが一面に埋まってるんだろうけどよ。アウルムはここに来ちゃいけねーな。あいつは無類の宝石好きだから、ここに来たら目を光らせて、壁ごと破壊して奪略行為に及びかねない」

もちろん、イグニフェルに反応するものはない。
けれど、本音を言えば、ずっとイグニフェルに気を紛らわすことを言い続けてほしかった。

響く４人の足音。
ラクスが術であたりを照らしてくれているが、少しでも歩調を緩め距離が離れると、そこはもう闇。
たまにポツポツと天井から落ちる雫の音が、恐ろしく不気味だ。

「変ですね」
歩き出してから初めて、イグニフェル以外の者、レニタスが口を開く。

「何も起こる気配がありません。確かに最初から結界が全体に張られていて、術を使いづらくしているのは確かですが……」
「確かに妙だ」
ラクスが先頭を歩きながら、振り返らずに返事をする。

「聖地に足を運ぶのは初めてだが、書籍や噂では試練の場としてさまざまな罠が仕掛けられていると聞いた」
「そりゃ、聖地だからな。一族の頭首になるには、その族の聖地を制覇するのは必要最低限の資格と言われているぐらいだ」
なんでもないことのように言うイグニフェルに、レニタスとラクスが歩きながら振り返る。
「お前、以前聖地に入ったことがあるのか？」
「おい、ラクス、いつも忘れているようだが、俺は火の頭首だぜ。行ったことあるのは当然だ。修行のためにも、もう何度も一人で入ってる」
「イグニフェル様、火の聖地というのは、どんなところなのでしょうか？」
「興味があるならいつでもつれて行ってやるぞ。そうだな、ここことはだいぶ雰囲気が違うな。砂漠だ。その中で仕掛けられる猛烈な攻撃に耐えながら、神殿を見つけなければならない。火の玉や砂地獄やら結構過酷なところだぞ、それにしても驚いたな、ラクス、お前が初めて――」

ふつりと、イグニフェルの声が止む。と、同時にユメの周りに浮かんでいた４つの火の玉が消えた。

「え……」
ユメが足を止める。ラクスとレニタスも驚いて、立ち止まった。
「あの馬鹿どこに行ったんだ？」
「消えた……？　ですが、何の前兆もなく？　たった今まで話し続けておられましたよね」

３人はある一点を、困惑して眺めていた。

そう、ほんの一瞬までイグニフェルがいた場所を。
忽然と何の前兆もまた痕跡もなく消えてしまった。

「試練が始まったということか」

ラクスがあたりを睨みつけるように見回しながら、依然として落ち着いた態度で言う。

「あいつ、あれほど自信満々だったくせに一番最初に消されるとはどうしようもないやつだな」
「しかし、大丈夫でしょうか？　ここは下手をすると命を落とす可能性もある場所……」
「これは、きっと月の精霊の得意とする雲隠れ、欺きの術だ。まぁ、あいつも一応頭首だ、しぶとい性格だから、簡単には死なないだろう。まぁ死んだら、葬儀花はフローラに頼めばいいことだ」
「ラクス様、葬儀花の心配をしてるわけでは……」

レニタスの咎めるような突込みを聞き流しながら、ラクスは視線をずらし、ユメに合わせた。
先程のの気まずさが以前と二人の間の空間に陣取って座り込んでいるので、ユメは少し身を縮こまらせる。

「レニタス、ユメの後ろについてくれ。あの馬鹿はともかく、肝心のユメが消されるとこの先厄介だ。細心の注意を払って、風の感知の術を使ってもらえるか？」
レニタスは重々しく頷いた。
「ええ、やってみます。ただ結界が強すぎて、思うようには術がうまく使えませんが……」
レニタスがユメを振り返りる。

「ユメさん、私の前へお願いできますか？　ささ、こちらへ」
無言でコクンと頷くと、ユメはゆっくり足を踏み出した。

再び歩き出す、一行。
心なしか冷たく見える、ラクスの背中。
さっきからまともに目を合わせてない。
ユメはため息をついた。
自分達の足音とたまに聞こえる水滴の音しか聞こえない静寂さが、ユメの神経を逆撫でする。

何が起こるか分からない洞窟。
気まずい雰囲気。

早く終わってほしい。あと泉にはどのくらいでつくのだろうか。

紫色の地面を踏み歩く自分の足を見つめながら歩いていたため、ふいに前を歩くラクスが止まったことに気づかず、額のあたりをラクスにぶつけてしまい、ユメは青ざめながら急いで後ろに飛びのいた。顔を俯かせたまま、謝る。

「ごめん、見てなかった」
「……」

ラクスは何も答えなかった。おずおずと顔をあげると、ラクスはユメがぶつかったことなど気にしていないようで、何かを調べていた。

自分の前にまるで壁があるかのように、手を這わしている。

「ラクス様？　そこに何か？」

レニタスがユメの背後から声をかける。

「ああ、何かを感じる」

そう言うと、ラクスは一歩下がり、光を出した。それはユメにも見覚えのある光、「真実の光」。その光の中に入った経験があるせいか、感覚で判別できる。

すると、その光に照らされ、ラクスの前に半透明の光の壁が現れる。そして、それだけではなく、ラクスの少し離れた右側に現れる銀色に光る魔法陣。

「それは……」

「嫌な予感がする」

レニタスの問いに、ラクスが顔をしかめる。魔法陣に近寄ると、座り込み慎重に調べ始めた。ユメは目の前にある光の壁に吸い寄せられるように近づいた。不思議だ。先程まではなにも存在しない空間のように見えたのに。そっと壁の方に手を伸ばす。ほとんど無意識の行為だった。

ふとラクスがユメの方を見、叫ぶ。

「触るな！」

その叫び声よりも一瞬先に壁に触れる、ユメの手。光の壁は冷たかった、と感じた瞬間、ユメは体全体に不思議な痺れが走るの感じ、次の刹那、後ろに勢いよく飛ばされた。慌ててレニタスが受け止める。

「大丈夫ですか、ユメさん」

ユメは頷き、自分の力でレニタスから離れ立ち上がる。驚きはしたものの、自分でも意外なほど冷静だった。

「頭がどうかしているのか？」

怒ったラクスの声が響く。

「正体の分からない物に、容易に触れるなどどうかしているとしか思えない」

ユメは怒られているのにもかかわらず、どこか超然として聞き流していた。まるで他人が怒られているのを眺めている感じ。「正体が分からないもの」と言ったが、なぜかユメは目の前にある光の壁が危険なものではないと分かっていた気がした。

「まぁ、ラクス様、ユメさんはいろいろと分からないことが多いんですし、それに今のは……」

レニタスがラクスを宥める。

ラクスが二人から顔を背け、ため息をつく。

「ああ、シールドの術だ。強力な。そして、この魔法陣はきっとこのシールドを解除するための魔法陣だろう。だが、どうやれば解除

できるのかまでは……」

ふとユメがラクスと魔法陣から視線をはずし、その横の壁に目をやる。そこで初めて気がつく。

「それ……」

ユメがその一点を指でさした。レニタスとラクスが同時にその先を見る。ユメがさした一点は、そこだけ紫の光沢がなく、誰かが削ったかのように少し窪んでいた。ちょうど四角い形になっており、その窪んだところの平らな面には、色のついた絵が書かれてあった。

カーテンのように開いた光の壁とその近くには銀色の魔法陣。その魔法陣の上には精霊らしきものが描かれている。

「さっきまで、この壁画あったか？」

ラクスが鋭い声で聞く。

「いえ、気づきませんでした。でも、これは……」

この壁画が意味すること、それはユメにとっても明瞭だった。

「私しかいないでしょう」

レニタスがきっぱり言う。ユメはラクスの顔が歪むのがみえた。だが、何も言葉を発しなかった。確かに否定のしようがない。

レニタスが魔法陣に歩み寄る。

「月の精霊なら」
苦々しげにラクスが魔法陣を睨む。
「いや、僕がもう少し熟していれば、魔法陣を欺く術が使え、誰かを犠牲にしなくとも――」
「大丈夫です、ラクス様。心配なさらないでください。それより、先に進む準備を」
レニタスがラクスを見てコクっと頷く。ラクスはしばらくその顔を不安げに見ていたが
やがて同様に頷き返した。
「ユメ」
名前を呼ぶと同時に、ラクスがユメの手首を掴む。ラクスの綺麗な横顔に現れる決心の強さ、少しも恐れを見せず微笑むレニタスに、ユメは心配すると同時に、自分のためにこういう状況に出くわしているという罪悪感似たものを感じた。
「それでは後で」
最後にレニタスは微笑み、一瞬のためらいもなく魔法陣に足を踏み入れる。途端に魔法陣から光があふれ出し、レニタスを包む。そして全身を包んでレニタスの姿が見えなくなった後、光が消えた。当然、そこにはもう、レニタスはいない。
今度は前の光の壁が光り始め、壁画に描かれているとおりゆっく

りと開く。

「いくぞ」

ラクスがユメの手首を掴んだまま、開いた道を進みだす。

「レニタスは？！」

予想はしていたものの、いざレニタスが消えたところみるとショックを受ける。引っ張られながらがらも、どうしても問わずにはいられずラクスに聞く。ラクスは前を向いたまま、答えた。

「大丈夫だ。それより、自分の心配をしろ。油断するな」

ラクスのいつもの余裕な表情が消え、今は真剣な色が浮かんでいる。ユメは唇をかみ締め、引きずられるのではなく、しっかりと自分の足で歩き始めた。

答えの先は始まり

「ディアナ」

低い声が室内の空気を震わす。自分の心の奥にまで響く言葉。
真っ先に頭に浮かんだのは、彼と彼らの顔だった――。

＊　＊　＊

「泉もそう遠くないはずだ、だが油断するな」

神経を尖らせたラクスの声があたりに響く。
先程よりも速く進む歩調に、後ろからついていくユメはほとんど小走り状態だった。

「だが、きっと泉の前では最難関の罠がしかけてられているはず。僕に何かあっても、ユメは前に進め。いいな？」

有無を言わせない口調。だが、ユメは当然困惑する。

「一人で？　そんなの無理だよ……。その後何かあっても、私、なにもできない」

「全速力で走って進め。泉を見つけたら、迷わず飛び込むんだ。それで、この試練が終わる」

「私が一人になった場合でしょ？　そうならないかもしれない」

「ああ、それが最善ではあるが、嫌な予感がする」

ラクスが静止する。今度はぶつからないように、慌ててユメも足をぴたりととめた。自分の足元を苦笑いして眺めているラクス。見ると、いつのまにかラクス、そしてユメも直径２ｍほどの青く光る魔法陣の上、ちょうど中心のあたりに立っていた。

「月の術にはやられてばかりだ。これほど、大きな魔法陣が隠されているのに気づかなかったとは、どうやら全体に張り巡らされている結界に感覚を鈍らせる作用があるみたいだ」

これがお約束とばかりに、青く光りだす魔法陣。ユメは慌てて飛びのこうとし、そこで気づいた。足が動かない。といよりも青い魔法陣に貼りついてしまっているらしく、足をあげようと動かすも魔法陣の張られた地面から離す事ができない。

苦々しげに自分の足を見ているラクスも、察するところ同様らしい。

「ラクス、これ、どうすれ――」

「キャウゥゥゥ」

明らかに不穏な鳴き声に、ユメは口を閉じる。この静かな洞窟では、遠くからやってきているらしい獣の声は容易に聞き取ることが

できる。

「ギャゥゥゥ」

親切なことに、やってくる獣は一匹だけじゃないらしい。背後から聞こえてくる鳴き声と足音、微かに見え出した砂埃からするに、数匹ではなく、大量。ユメは顔から血の気がひいていくのを感じた。と、同時に、ラクスが舌打ちするのが聞こえる。

「どうする？」

それはユメに聞いたのではなく、ラクスの自問だった。

「魔法陣の破壊を試みるか？　だが結界の中での弱い術では、容易に跳ね返されて自分らが真っ先にダメージを受ける可能性がある。くそ、厄介だ」

そう呟いている間にも迫り来る獣達の影が露になる。

「ウサギ……？」

猛烈な勢いでこちらに向かってくる大群は、全長２ｍをゆうに超えてそうなウサギ達だった。とてもウサギが発するものとは思えない、戦隊ものの番組に出てくる怪獣のような低い鳴き声。大きく口から飛び出した牙のような前歯。半分ほどで垂れ下がった耳、血のようなどす黒い赤の目。

「可愛くなっ！」

ここまで可愛げのないウサギは当然見たことなかったので、思わず恐怖を忘れて突っ込んでしまう。

「ああ、確かに可愛くない」

驚いたことに、ラクスがこの迫りくる大危機の中で、ユメに同調した。

「あの、醜い前歯。あれに噛まれたら、僕達は一溜まりもないな」

なるほど。見た目だけでなく、敵としての能力も全く「可愛くない」仕様らしい。自分が頭からウサギに噛まれるグロテスクな想像をして、ユメは震え上がった。

「ラクス、どうにかなるんでしょ？　死ぬにしても、あんな不細工ウサギに噛まれて死ぬのは私もいや！」

「一匹ずつ倒していくのは可能だ」

先頭のウサギが、魔法陣から１ｍしか離れていないところにさしかかる。そして一瞬ぐっと足を曲げたかと思うと、次の刹那、空中に飛び上がり、上から二人に襲い掛かってきた。

思わず目を瞑るユメ。すぐ傍で、ラクスの声が聞こえる。

「貫く光よ。ブリュナーク」

ラクスの頭上に現れる数本の巨大な光の槍が現れ、即座にまばゆ

い光を放ちながら、頭上を襲い掛かってくるウサギを迎え撃つ。容赦なくウサギの体の至る所を貫いた。甲高い悲鳴と共に消えるウザギ。だがその後から、同時に飛び掛ってｋる２匹のウサギ。その後ろにも無数のウサギ達が続くのが見える。

ラクスは舌打ちをし、再び槍を今度は先程よりも多く生じさせ、次々にウサギ達を消滅させていく。

「参ったな。キリがない。きっと無数に出てくる仕組み。このままだとエナジー消耗に繋がり、やられてしまう」

現れては間髪おかずに貫いていく、光の槍たち。当面は大丈夫でも、術は無限に使えるわけではない。

「こうなったら、一かバチかだ。ユメ、できる限り体を横にそらせ！」

「え、足が捕らえられてるから」

「いいから、できる限り横に逸らすんだ。さもないと、下敷きになるぞ」

「それどういう意――」

「行くぞ！」

問いかけるユメに上からかぶせるようにして、ラクスが叫ぶ。

「出でよ、光の鏡、スペクルム！」

呪文と同時に現れる、光の鏡。ユメが見上げると、垂直ではなくやや前に傾いて浮かんでおり、ユメ達を頭上から映し出している。

ユメは悟った。冗談じゃない。

次に飛び掛ってきたウサギが見事、綺麗に鏡にヒットする。そこまではよい。問題はその後だ。

ユメは悲鳴をあげながら、腰が引きつってしまうのでないかというくらい、思いっきり横に体をそらした。鏡にはじかれ、スピードを増しながらウサギが魔法陣の上に落ちてくる。思わず目を閉じる。

ドサっと鈍い衝撃の後、恐る恐る目を開けると、ユメのすぐ傍に、歯が魔法陣の描かれた地面に刺さった状態で気絶したウサギが倒れている。ごわごわとした、白い体毛。仕留められたのではなく、気絶しているだけのため、微かに息をしている。生々しい獣の匂い。それだけでユメは腰が抜けそうになった。

恐怖のあまりよろめく、ユメ。そう確かに、ユメは数歩よろめき、傍の壁で背中をもたれさせ、ようやく自分の体を支えた。

「うまくいった！」

なぜか満足げに叫ぶラクス。その間にも槍は次々に現れ、途切れなく向かって来るウサギを1匹も逃すことなく順調に消滅させていっている――。

「今ので破壊できたのは、魔法陣の一部。僕は動けない」

そこでようやく、ユメは気づいた。自分が魔法陣を離れていることに。魔法陣がいつのまにか、ユメの足を解放していた。

「さっき言ったように、走れ！　そう遠くないはずだ。僕ももう一度破壊を試みた後、すぐに追いつく」

「でも……」

再び言いようのない恐怖がユメを襲う。

一人でこの先の闇を進めと？

無茶に決まっている。

「この先から、力を感じる。結界の中でも感じるほどの、強い力だ。泉はすぐそこのはずだ！」

それでも、ユメは渋った。絶え間なく聞こえてくる唸り声、そして甲高い断末魔。足がどうしようもなく震えだし、再び魔法陣にとらえられたかのように地面に張り付いてしまっている。

「君が泉に飛び込めば、この試練が終わる。この試練を終わらせられるのは、ユメ、君だけだ」

ユメはぎゅっと握りこぶしを爪が食い込むくらいに握り締めた。

「ユメ、行くんだ！」

まるでその言葉がユメに術をかけたかのように、ユメは息を吸うと、くるりとラクスに背を向けて、振り返ることなく走り出した。ラクスの光から離れて、闇の中に一人飛び込む。

走りながらも、全身がガチガチに震えている。大丈夫。ユメは自分を励ました。

闇なんか怖くない。この世界に来る前も人々が恐れ怖がったところに、平気で入れたじゃない。

それと同じよ。

一度も振り返ることなく、早くこの試練を終わらせたい一心で、ユメは一人走り続けた。

答えの先は始まり　2

――この試練を終わらせられるのは、ユメ、君だけなんだ。

頭の中でラクスの声が反芻する。ラクスと別れて、もうどのくらい走り続けてるのだろう？　時間の感覚が鈍くなっているらしく、どれほどの時間、また距離を自分が走っていたのがサッパリ分からない。

いつ消されるか、また魔物が出てくるか分からないこんな物騒なところを一人で走ってるなんて、いつ腰が抜けて動けなくなってもおかしくないくらい恐ろしいが、今は無理矢理その恐怖という感情に蓋をして目をそらす。

無理して走り続けているせいか、横の脇腹が痛い。ラクスは最奥の泉はそう遠くないといった。今はとにかく、早くこの試練を終わらせてしまいたい。そうしたら、きっとレニタスやイグニフェルとも会える――。

足に急ブレーキをかける。ラクスの光を離れ、暗い闇の中を走っていたため、1，2mの範囲内しかあたりの様子を判別することはできない。そして今ふっつり足をとめたのは、そこから2mくらい離れたところで見えたからだ。

泉ではなく、壁が。

言うまでもなく、行き止まりである。見回すと、あたりが広場のように拓けた場所になっていることは、なんとか察することができたが、ユメの左右にも泉は見当たらない。

「え、なんで！？　最奥に泉があるはずじゃ……？」

呟きながらも探るように一歩を踏み出すと。ユメは本気で心の底からもうこりごりだと思った。

地面から湧き出る緑色の光。言わずもがな魔法陣。

しかし今回は足の自由を奪われるようなことはなかった。警戒してあたりを見回す。とりあえず、魔法が発動したのだから何かが起こるはずだ。何も起こらないというのなら、それはそれは大歓迎だが。

だがもちろん、ここは試練の場。そんなに甘くなかった。

ゲコゲコ。ゲコッ。

「もしかして、か、カエル？！　嘘でしょ」

背後に確かにその声を聞いた。しかも複数、そしてこっちに向かってきている。ウサギの集団の後はカエルの集団らしい。まだ暗がりでよく見えないが、怪物と化している可能性がある。ただでさえ、

人間界のミニサイズでもその気持ち悪さは脅威的であるのに。

とりあえず、ユメはパニックに陥りそうになるのを唇を噛み締めて抑えた。目前に迫る危機。気持ち悪さはともかく、襲い掛かってこられたら術の使えないユメが応戦できるわけがない。どこかに何か仕掛けがあるはずだ。何かがあることを祈りながら、突き当たりの壁やその周りを急いで見てまわる。あるはずの泉がない。ということは、どこかに泉を出す仕掛けがあるはず。拓けた所の壁を伝って、ぐるりと一周する。

背中で感じる迫ってくるカエル達の気配。振り返ってその姿を見たら、気絶してしまうかもしれない。

そして、見つけた。突き当たりの壁の右端。かけられた丸い板の上にはレニタスの消えた時にあった壁画に似た画調で描かれた何かの図。よく見ると白い半球と橙色の半球、そして青い半球がそれぞれ別の位置に浮き出ている。左から橙、青の順で円板の中央あたりに間隔をあけて半球が固定されている一方で、白の半球は弧を描くように回せる仕組みになっているのが、円板に入った切り込みから分かる。

手を触れると指の先が、まるでフワっと温かくなる。次の瞬間、声を聞いたわけでもないのに、テレパシーのように頭の中で聞いたこともない言葉が反芻した。

――月が闇に食われる時、泉は現れる

泉を出すためのヒントなのだろう。だがどういう意味なのかさっぱり思いつかない。

「月が闇に、食われる？　どういうこと！？」

「ゲコっ」

すぐ傍に鳴き声を聞いて、振り返らないと心に決めていたもののつい振り返ってしまう。予想を裏切らない怪物サイズのカエル達。大きく上下する滑った白い喉元が暗闇で光っているため、４ｍほどの目前まで迫っていることが分かる。

ユメは眩暈を覚えた。自分はあんなに気持ち悪いカエルに襲われて死ぬんだ、と絶望が広がる。

でも、諦めたらだめだ！

諦めが得意だったユメが、初めて自分を叱咤する。

ラクス達はどうなるの？　自分だけの問題じゃない。考えなきゃ。

もう一度円板を凝視する。そして、はっと気づいた。見覚えがある。あれは確か理科の授業で――。

――月が闇に食われる時

何て自分は馬鹿なんだろう。ユメはさっきまでの自分を呪った。言葉からして、そして円板からして、答えは明瞭。

月食。

地球が影になって月食は起こる。

急いで白い半球に手を置くとぐるりと回して、橙と青が描く線上にもってくる。

そして、振り向いた。瞬間、巨大なカエルが上から飛び掛ってくるのが見える。悲鳴をあげながら横に飛びのくユメ。カエルが勢い余って先程までユメが立っていた壁に衝突するも、すぐに体勢を整える。

慌てて距離を持とうと向きをかえて数歩走りかけ、そこで視界に入ったものに、全てにユメは感謝した。

目の前で銀色に輝く泉。

どれくらい深いのだろう、溺れないだろうか、なんてことはもはや全く気にしなかった。

ユメは迷わず一歩踏み出すと、再びカエルが襲ってくるより先に、泉に目を瞑って飛び込んだ。

答えの先は始まり　3

銀色の泉の中で、ユメは口を手で塞ぎ目を閉じてしばらくじっとしていだが、やがてうっすらと目を開いた。不思議だ、水の中にいるのに水に触れていることを感じない。体が水中で浮いているのは感じるが、まるで宇宙にでもいるようなふわふわとした感じだ。

また視界に映った世界は、水の中ではなく柔らかい光につつまれた神秘的な空間だった。中でじっとしているうちに、自然と恐怖心が削がれ安らぎが心を満たす。ゆっくりと口から手を離すと、息もできるのか苦しくないことが分かった。上も下も、もちろん自分の回りも優しい光が溢れているだけで、中からはとてもここが自分の飛び込んだ銀の泉だとは思えない。

もっともレニタスによると精霊の呼吸というのは酸素を吸い込むのではなく、サンギスを活動させることを言うらしいが、ユメの場合、自分がどういう風にこの世界で生きているのか分からない。

泉の中を漂いながら心地よさが少しずつ病み上がりで疲労困憊したユメの体を、癒してくれているような気がした。このまま寝てしまいたいくらいだ。肩が、体全身が今までに感じたことがないくらい、とても軽い。ラクスやゲントゥムの言っていた正体不明の術が、解除されたということだろうか。

オーロラのように揺らぎながら、優しくユメを包み込む光。いっそ、本当に寝てしまおうか。いや、でもラクス達がきっと待っている。

やはり上には水面らしきものが全く見えないが、そこを目指せば出られるだろうか？

「ふふふ、とても気持ちよさそうですね」

突然背後から声がして、ユメは身構えると同時に勢いよく振り返った。もちろん先程まではそこに誰もいなかったが、今ユメの目の前には一人の美女がユメと同じように空間に漂っていた。

黒くて腰まであるストレートの髪がゆらゆらと美しく揺れている。長くて黒い睫毛。銀色の瞳。優しげな表情。言うまでもなく美女だった。恐怖は微塵も感じられず、再びユメはふっと全身の力を抜いた。

「そうです、警戒するには及びません。私（わたくし）が何者であるか分かりますか？」

ユメはじっと彼女の端正な顔を見つめながら考える。銀色の泉、月の聖地。精霊の始祖が残した……。

「勘だけれど……、月の精霊の始祖、セレネーさんですか？」

おずおずと答えたユメに対し、美女は微笑んで頷いた。どうやら勘はあたったらしい。だが精霊の始祖というぐらいだから、昔々に生きていた精霊が何故にこの泉に？　ユメが疑問を口にするより早く、セレネーが先に口を開く。

「よく分かりましたね。あの方に似て、聡明なようですね」
「あの方とは……？」
「あなたは」
セレネーはユメの質問には答えず、逆に質問を投げかけた。
「ここに何を求めていらっしゃったのですか？」
何を求めて？　そんなの決まってる。ユメがこの世界に来る前から、ずっとずっと求めていたことなのだから。
「私は、私は自分が何者であるかを知るためにここへ」
「そうですね」
分かっていたといった風に、セレネーが再び頷く。
「あなたを守る幾重もの術はここで解除されました。さぞかし、負担が消え体が楽になったことでしょう。しかし」
そこでセレネーはやや顔を曇らせた。
「それがよかったことなのかどうか、また適した時であったのかどうか私は、正直分かりません。おそらく、それはあなたが今後決めることでしょうが」
曖昧な言葉にユメはやや混乱する。が、せっかくここまで頑張っ

てきたのだから、何も得ずに帰るわけにはいかない。

「セレネーさんは、私が何者であるか知っているのですか？」

「ええ、知っています」

事も無げに答える、セレネー。

「私は遠い昔に命を絶った精霊。今ここにいる私は、その分身のようなものです。聖地の守護者として契約のもと、この世界に使えております。生ける精霊ではもはやありませんが、この聖地の力を借りて真実を見通すことができます。あなたをも例外ではありません」

「それなら、もし分かるというのなら、教えて頂けますか？　私が何者であるか？」

「何者であるか……」

セレネーは静かに瞼を閉じた。

「あなたの言う、『何者であるか』ということはどういう意味でございましょうか？」

「意味？　えっと、私はラクス達が言うように錯乱した精霊なのか、それとも人間なのか、人間ならどうしてあの場所で一切の記憶がなく見つけられたのか、知りたいのですけれど……」

ゆっくりと開いた銀色の瞳に見つめられ、ふいにユメは自分の問いに自信がなくなり尻すぼみになる。どうしてだろう？　ずっと知りたくて知りたくて溜まらなかったことなのに、あの銀色の瞳に見

つめられるとまるで自分が間違ったことを聞いているような気がしてくる。

「あなたが精霊なのか人間なのか。真実は私ではなく、他の者の口により時をおかずして明らかになるでしょう。しかし、それに惑わされないことです」

「惑わされない？」

「人間、あるいは精霊、それはただ肩書きにすぎない。世界を超えたらあっという間に、崩れてしまう脆いもの。真の自分、それは肩書きで決まるものではありません。それは他人によって与えられるものではない。心しておくです」

「私、よく……」

セレネーの言う意味がよく飲み込めず、ユメは困惑するも、セレネーは全く気にすることなく話を進めた。セレネーはどうやら、親切に手取り足取り教えてくれる気はさらさらないらしい。教えるというよりも、どこかにユメを導こうとする意思が感じられるような気がする。

「私は守護者であると共に、知恵や助言を与える者としての役も受け賜っております。ゆえに、私達が再び会う日もそう遠くないでしょう。最後に、よく覚えておいてください。これは、あなたのほんの始まりにすぎないということを」

そこでセレネーは両手を大きく広げた。と同時に、銀色の光がユメの足元に現れ、ユメの全身を包んでいく。

「あなたを求めるもの、帰るべき場所にお送りしましょう。旅の始まりに、私の最大の祝福をあなたに……」

自分の正体はともかく、まだちゃんと聞かないといけないことが残ってる。首のあたりまですっぽり光に包まれながら、ユメは慌てて叫ぶ。

「ちょっと待って！　ラクス達は？　レニタスさん達は無事なの？」

「心配には及びません。それでは、しばしの間……」

そこでセレネーの言葉が聞こえなくなると同時に、銀色の光に遮られユメは何も見えなくなり、体の全ての感覚が不能になったあと、ユメの意識はそのまま途切れた。

答えの先は始まり　4

ユメは洞窟の中を一人で走っていた。息を切らしながらも、必死に走り続ける。海鳴りのような唸り声をあげて迫ってくる怪物と化したカエル、そしてウサギ。立ち止まったら、それは自分の最期を意味する。

「ラクス！　レニタスさん！　イグニフェルさん！　どこー！？」

洞窟内に響き渡る自分の声。返事は返ってこない。

突然何かに足が捕らえられる。魔法陣だ。溢れ出るのは光ではなく、灰色の煙。吸い込んだ後に喉に焼けるような痛みを感じ、ユメは咳き込んだ。

ふと前を見ると、セレーネがたっている。黒髪は下から風が吹いてるかのように、上に向かって靡（なび）いている。

「セレーネ！　助けて！　怪物たちが襲ってくる」

セレーネは必死に懇願するユメに向かって、静かに微笑んだ。

「あなたは、自力で彼等に立ち向かわなければなりません」

「無理に決まってるでしょ！？　私は人間。術なんか使えないの！？」

首筋に触れる砂埃。振り向くと同時に、その影にとらわれる。上から襲い掛かってくる、カエルとウサギ。

ユメは悲鳴をあげた。

そして、一気に視界が変わる。

「だいぶうなされてましたね。ご気分はもう大丈夫ですか？」

夢から覚め、上体を起こして荒く呼吸をしているところに、傍から女性の声が聞こえてきた。

見ると、召使いらしい服を身につけた中年くらいの女性が、心配そうな顔をしてユメの寝ているベッドの横に立っている。

この場合、「あなたは誰？」や「ここはどこ？」、「どうして私はここにいるの？」という言葉がふさわしいだろう。

事実、ユメも同様のことを聞こうとし、軽く唾をゴクリと飲んだ後、口を開きかけたが、瞬間女性の背後に見えた大きな肖像画を目にして、思わず全く別のことを口にした。

「綺麗な人……」

女性は、一瞬だけユメの視線の先を振り向くと、微笑みながら答えた。

「デュセム様です。それはもう、お美しく心優しい方として評判だった方です」

どこかで聞いたことがある名だ。「だった」という過去形が使われていることから察するに、もう亡くなっている方なのだろうか。

そこで、ようやく聞くべき質問を口にする。

「あなたは誰？」

？すると、女性は軽く頭を下げた。

「申し遅れてすみません。私はこの城に仕えている女中の、ダルフィムと申します」

「城？　ここはどこかのお城なの？」

「はい、その通りでございます、お嬢様。長い年月を経たとはいえ、またさまざまな不幸に見舞われた後だとしても、私達はこうしてお嬢様のお迎えできることができて、本当に幸せです」

？驚いたことにダルフィムは目に涙を浮かべていた。セレーネはユメが帰るべき場所にユメを送ると言った。

?:それが本当ならここは一体どこなのだろう?

?:急に胸が高鳴りだす。今、自分の長年抱いてきた疑問が解き明かされようとしているのだろうか。

?:今いるお城とは誰のものなのか、そして自分がここにいる理由、肝心の質問を聞こうとしてユメが口を開くと同時に、部屋のドアが開き別の人物が入ってきた。　?

?:?:入ってきた人物を目にし、ユメは唖然とする。

「ゲントゥムさん、なぜここに?!」?

ゲントゥムはユメの言葉に口の端を吊り上げる。予想通りの反応だ、とでも言うように。

?:?:ベッドの傍に立っていたダルフィムは、ゲントゥムが部屋に足を踏み入れるや否や、頭を下げながら数歩後ろへ退いた。

「さて、何から話すべきか。いや、何を話すべきか」

そこで一拍置くと、ゲントゥムは一言付け加えた。

「我が孫娘、ディアナよ」

?:ディアナ。初めて聞く響きなのになぜか懐しく感じる。

?:言葉の意味をまだ飲み込めていないうちに、ぼんやりと頭に浮かんできたのは、ラクス、そしてレニタス、フローラの顔だ。

？ユメの直感が、もう人間界へも、そしてあの光溢れる穏やかな洋館へも帰れないと言うことを告げていた。

史上最悪の国王誕生祭

?:複雑な心境で鏡に映る自分を眺める。

?:そういえば、前にも同様のことがあった、とユメは思い出す。洋館で暮らしている時身につけたフローラの服。

?:あの時はこんな可憐な服は自分には似合わないと、溜息をついた。もう遠い昔のことのように思える。

?:今ユメはフローラの服のような可憐なものではないが、クリーム色でラメの入った、シンプルだがかなり高価そうなドレスに袖を通している。

?:ドレスを着るのをダルフィムが手伝っているが彼女は、またもや目に涙を浮かべている。

「このような日が再び訪れるなんて夢のようです。ディアナ様、よくお似合いですよ」

?:ユメは溜息をついた。昨日にゲントゥムから聞かされた話。正直、未だに全く信じることができないでいる。

?:だがその一方で、頭の隅で直感が全部真実であると頻りに主張していた。と同時に、もう一つの直感が、信じることを阻む。

?:一度この事実を受け入れたら元には戻れないと。杉原ユメとは別れを告げ、ゲントゥムの孫娘のディアナ、ディアナ・クレセントとして生きていく覚悟があるのかと。

?ドレスを着た後、ダルフィムが朝食の時間ですと告げたので、ユメはダルフィムの後について部屋を出た。

?あのラクスの洋館とは雰囲気ががらりと変わるが調度品の豪華さは全く見劣りしない。長い廊下に面している無数の部屋。そもそもこの月の精霊頭首の城は、洋館の数倍以上の規模。

?この城より大きな城、それは王宮ぐらいだとレニタスが言っていた。

?ここが本当にセレーネの言う通り自分の帰るべき場所なのだろか?

?そして自分は本当に……?

?「目覚めはいかがかな?」

?広いダイニングに入るなり、先に朝食の席についていたゲントゥムが、ユメに声をかけた。

「ぐっすり眠れたので、体調も万全だと思います」

?本当は色々と考えていて、昨夜は殆ど眠れなかったのだが、それを告げる必要もないと思ったので嘘をつく。

?チラリと斜め横のダルフィムを見ると、その薄紫色の瞳にぶつかった。何かを訴えている目。

?そこで、ここに来る前にダルフィムに念押しされていたことを思い出し、慌ててゲントゥムの方に向き直る。

「お、お祖父様はご機嫌いかがですか？」

するとゲントゥムは、何かを答える訳でもなく、代わりに満足そうに頷いた。

?そしてユメは　ダルフィムに促されるまま、２０人がけの長いテーブルの席についた。ゲントゥムの真向かい。

?緊張して背筋を正す。　テーブルに腰掛けているのは、ゲントゥムとユメのみ。給仕達はずらりと背後に控えているものの、やはりがらんとしたテーブルは寂しい。

?ゲントゥムは毎日ここで一人で食事をとっていたのだろうか。ふとユメはそんなことを考えた。

「今日の国王誕生祭のことだが、　私が昨日言った通り」

「昨日話したことは、他言無用ですね」

?目の前に出されたサラダ、多種類のハムにスクランブルエッグののったプレートを眺めながら、ユメは答えた。

「その通りだ。立場上、王家に下手に詮索されると困る」

?:その「王家」には当然ラクスも含まれる。?

「ラクス……、ラクス様についてはどうすれば……?」

「余計なことを話さなければ、普通に接して構わないだろう。だが必要以上に関わるな。お前の首を絞める結果に繋がるかもしれん」

「どういう意味ですか?」

「今はそれを教えるべき時ではないだろう。それを知るまでに、お前はもう少し成長する必要がある」

?:?成長。それは術のことを言っているのだろうか?

?:指の先が、昨夜のことを思い出したかのように痺れる。まるで解放を待ち望んでいるかのようだ。それを察してか否か、ゲントゥムがユメに指示を与える。

?:「少し腕輪を外してみなさい」

?:左の手首にはめられている金の腕輪。同様の金細工が施されたクリーム色の大きな石がはめられたネックレス。

?:昨日ユメが目を覚ましたときには、既にはめられていたものだが、幾重の術から開放されて溢れ出したエナジーを制御するためのものらしい。

?心臓の鼓動が、他人に聞こえてしまいそうなくらい煩い。未だ軽く痺れる指をそっと動かし、ユメは言われた通りゆっくりと腕輪を外した。外すのはこれで二度目だ。

?瞬間、前回と同様にユメの全身から溢れる銀色の光。

?給仕達から歓声が上がるも、ユメは困惑してただ光の中でじっと座っていた。

?これが自分の中から出される光だとは奇妙な感じだ。こっちの世界にきてから、術の光には何度も包まれたが、それはあくまで外部の力。

?自分のエナジーだとは到底信じ難いことだったが、エナジーが発生している時に感じる、体の隅々までにじんわりと小さい痺れのように広がる暖かい感覚と、何かがユメの体から空気中に発されている感覚は、この世界でも新しい感覚だった。

?ゲントゥムが目を伏せてやめるように指示したので、慌てて腕輪をつけ直す。途端に銀色の光がふつりと消える。

「慣れないうちは迂闊にその腕輪を外さないように。そのネックレスについては、私の術で外せないようになっているので心配ないが……」

?ゲントゥムはコーヒーを一口啜るとさらに付けたした。

「エナジーは天賦のもの。生より与えられた恩恵だが、それには同時に避けられない責任と義務が伴うことを忘れてはいけない」

?:ユメはよく飲み込めないまま、だが丸く埋めるために頷いた。

?:セレーネとゲントゥムはどこか似ているところがある。肝心なところを直接言及するのを避け、ぼやかすところだ。

?:そんなことを考えながら食後の紅茶を啜っていると、ダイニングルームにユメ達と同様正装をした中年くらいの男性が入ってきて、出発の時間であることを告げた。

史上最悪の国王誕生祭　2

揺れる馬車内の窓から、カーテンを開けて遠ざかっていく月城を眺める。前にも見た風景。小高い丘に森に囲まれて聳え立っている。

?あの時は、あの城が自分の帰る場所だとは思いも寄らなかった。

?どんな顔をするだろう。ユメは思った。ラクス、そしてレニタス、フローラ、イグニフェルもだ。

?国王誕生祭なのだからラクス、イグニフェルは当然、レニタスやフローラも出席するに違いない。国中をあげての一大イベントであり、様々な種族の精霊を率いるリーダー達が集まる他、

?王宮前の広場には埋め尽くすほどの他の精霊達も集まると聞いた。

?彼らの驚く顔は、あまり見たい気がしない。ユメが月の精霊、しかも頭首であるゲントゥムの孫娘であるとは、にわかには信じられないに違いない。

「緊張するのか?」

?ユメの真向かいに座っているゲントゥムが、ふいに問うた。

「え、えぇ」

?少し狼狽えながら曖昧に頷いたユメは、カーテンを閉め前に向き直った。

「ゲントゥム様、無理もないです。何もかもが突然すぎて、一度に全部受け入れるのは難しいでしょう」

?:ゲントゥムの隣に座っている正装をした中年の男、紹介されたとこによると、星の精霊の長老の息子、名はマルスでゲントゥムの執事を務めていると聞いた。

?:今日の誕生祭に公に出席するのは、身内ではこの馬車に乗っている3人のみ。

?:給仕や召使たちは、別の馬車に乗ってユメ達を追いかけてきている。

?:どの馬車も星の精霊が術でで繰り出した黄金のたてがみを持った光る馬に率いられている。

?:星の精霊は、生き物や物などを術で作り出すのを得意とする一族。月の精霊の直属の精霊達であり、その関係は言わずもがな密である。

?:月の精霊は現在、ゲントゥムとユメ以外に、王都から遠く離れた地で隠居しているらしい弟、そしてその息子以外は存在しない一方、星の精霊は把握しきれないくらい無数にいるらしい。

?:もちろん、所有するオリゴはそれぞれ異なっており、僅かなオリゴにしか拠らない星の精霊も少なくないが、なんと言っても一族の数、そして使用する術の特殊性は脅威的であり、王家も侮れない存在だとか。

?:バックにいる星の精霊の存在が月の精霊の存在をより影響あるも

のにしていると言っても過言ではない。

ー月の精霊である我々の存在そして権威は星の精霊達によって守られている。

?ゲントゥムは、そのことを肝に銘じておかなければならないと言った。

“月城”に仕えている者は、星の精霊達で占められており、ダルフィムも例外ではない。星の精霊の中の、イルカ座の精霊の一人だ。

?また、マルスはと言うと、火星の精霊の一人だと聞いた。

?ユメが昨夜の回想に耽っている間も、マルスはユメを落ち着かせようと気遣ってか始終話続けている。

「まぁ、それでも注目されるのは間違いないでしょうが、堂々としておられればいいですよ。ディアナ様、あなた様は正真正銘のゲントゥム様の孫娘、ましてあのデュセム様のお嬢様であられるのですから」

孫娘、娘、祖父、母親。昨日目が覚めてからやたらと耳にする言葉。だが、今までそういうものとは無縁に過ごしてきたユメには今ひとつその感覚が掴めない。

?

?また、そういう経験の有無にかかわらず、誰にとってもこの状況は受け入れ難いに違いない。なんと言っても、母親が判明したはいいが、その女性は随分前に既に亡くなっているのだから。

?ゴトン。
?何かの衝撃で前方に馬車全体が傾き、後輪が少し跳ね上がって地についた後、馬車が止まる。

「やれやれ、またダークリットですか」

?マルスが重々しい口調で言う。ゲントゥムは微動だにせず、ただ静かに目を閉じた。ユメは恐る恐るカーテンを開けた。

?予想通り、窓の外に見える数体の影。耳を塞ぎたくなるような、叫喚。

『道連れにしてやる。誰も彼もだ！　なぜ俺が呪わなければならない！？　俺が何をしたというのだ！？』

?ゲントゥムの手前、震え出しそうな身体にぐっと力を入れて堪える。何故だか臆病者だとは思われたくなかった。

?マルスは落ち着きを払った様子で、私が処理してきましょう、と言い一人で馬車を降りる。ゲントゥムは変わらず動こうとせず、マルスに事態を全て任せたかのように見えた。

馬車に残された二人は沈黙だったが、ユメには苦悶した叫び声が間断なく聞こえ続ける。

?得体の知れない悲しみがユメの心をじわじわと覆いそうになるのを紛らわしたい一心で、ユメは思い切った質問を勢いでゲントゥム

に投げかけた。

「声が聞こえるのです。ダークリットに会うといつも。ラクス、いえラクス様達は誰も信じてくれなかったのですけど、やはり私の幻聴なのでしょうか？」

??ゲントゥムがユメの言葉に目をゆっくりと開く。何の感情も読み取れない顔。しばらく無言でユメの顔を眺めていたが、やがて口を開いた。

「私は聞こえないし、他の者も同様だろう。だが、それは幻聴でなく恐らくお前が生まれながらに授かった能力。ダークリットは知っての通り精霊の残滓だ。奴らが一般の精霊が理解できない方法で何かを訴えていても不思議ではない。むしろその方が自然とも言える。周囲に無差別に襲いかかりながらも、一番に奴らが苦しんでいるというのは私らにも様子で分かる。生者と死者の中間の存在に、何かの要因で禁忌を犯して入り込んでしまった者達の末路だ」

?ゲントゥムが窓の外に初めて目を向ける。マルスがちょうど術を放ったところだ。夜空に浮かぶ星々のような小さな光でできた球体が一瞬空中に浮かんだと思うと、次の瞬間それは爆発し、金色に輝く小さな竜が現れた。

?ユメよりもやや小さいくらいの小型の竜だったが、勇猛果敢に相手を威嚇し、マルスの指で鳴らしたポンという合図で、一直線に影へと、渦を描く炎を吐きながら突っ込んで行った。

?次々と強力な炎に消されていくダークリット。ユメはいつもと様

子が違うことに気づいた。炎に巻かれたダークリットは、例えばラクスの光で焼かれていたダークリットのようにもがくことなく、叫びもせずに静止している。

?:次の刹那、決定的なことが起き、ユメはあっ、と驚きの声をあげた。ゲントゥムがその理由を理解したらしく、口を開く。

「マルスは優秀な術使いだ。私と同様に『浄化の光』が使える」

?:窓の外に見えたもの、ほんの一瞬の出来事だったが、それは精霊達の姿だった。半透明ではあるが、一般の精霊とほとんど姿が変わらない。瞬きをした後には既に消え去ってしまっていたが、彼らは恐らく……。

「マルスはダークリットを浄化したのだ。殺して消滅させるのではなく、元のあるべき姿、死者へと返す術だ。セレーネに属する術の奥義の一つとも言える」

「殺すのと浄化するのでは、どの様な違いがあるのですか？」

「結果は何も違いはないだろう。強いて言うなら、浄化は効率が悪い。かなりのエナジーを消費する高度な技だ。これもまたセレーネの奥義、『真実の光』と同様に」

?:真実の光。ユメはこれまでに数度その光を目にしたことがある。ラクスが繰り出したものだ。

?:ゲントゥムが話を続ける。

「また浄化したからといって、一度ダークリットに成り下がってし

まった精霊を救えるわけでもない。あくまで残滓であり、その魂の大部分はとうにどこかへと消滅あるいは奪われてしまっている。だが推測ではあるが、浄化の方がダークリットにとっては苦しみが少ないだろう」

?再びユメは窓の外に目を向けた。もうそこにはマルス、そして小型の竜しか残っていなかった。

?先ほど一瞬だけ見えた精霊達、それはダークリットになる前の元の姿なのだろう。

「声が聞こえるのは心苦しかろうが、ダークリットの件は私も動いている。お前はこの件は関わる必要はない。その前にやるべきことが沢山ある」

?ゲントゥムの言葉に、特段不満もないユメは素直に頷く。それより、ゲントゥムがダークリットの件で調査にあたっているというのをユメは意外に思った。この国ために、一頭首として務めにあたっているのだろうか。

?言動からは、身内はともかくこの国に対する忠誠心は見受けられなかったが……。

ユメがそんなことを考えていると、マルスが小脇に先ほどの竜をかかえ馬車内に戻ってきた。

?

ポチ。マルスはそう小竜に名付けたらしい。何かを術で創り出すのはかなりのエナジーと時間を消費する。ゆえに、先程の術は創生ではなく、この世界の森かどこかで遊んでいたポチをワープさせただけらしい。実際ポチとマルスは長い付き合いとのこと。

?この赤い鱗で覆われた皮膚に今は小さくたたんである翼。火を吐いて威嚇するところからすると、可愛い犬につけそうなポチという名前は、一見似つかわしくないが、マルスの膝の上で撫でられながら気持ちよさそうに寝ているのをみると、まんざらでもない気がしてくる。

??施設に住んでいたため以前は飼うことができなかったユメだが、長らくペットというものに憧れてきたので、自分もポチのような生き物を飼うことができないかと聞くと、マルスは近いうちにご用意しましょう、快く引き受けてくれた。

そうしているうちに、馬車の進むスピードが緩くなると同時に馬車の外から多くの話し声が聞こえるようになった。どうやらアクロピアに到着したらしい。外の様子を見ようと、少しだけ赤い布のカーテンを開いて外を覗いたユメは絶句した。

?以前に来た時ももちろん王都ということで人通りが多かったが、今回はそれとは比べ物にならない。興奮が入り混じった声々が馬車内まで届く。

?様々な格好をした精霊達で王宮前の広場は、隙間が見当たらない

ほどに埋めつくされている。老若男女、皆王宮の方を向いて、よく中を見ようと背伸びしたり、飛び跳ねたりしている。近くでは小さな子供を父親らしき男性が肩車をしている。

?ふと馬車が停止する。人混みに邪魔されて立ち止まったらしい。一段と馬車を囲んでいる者達の声が大きくなる。ユメ達の馬車を月の頭首のものであると勘付いたのか、多くの精霊達がこちらを注目したり、駆け寄ろうとしたりしているのに気づき、ユメは急いでシャっとカーテンを閉めた。急激に心臓の鼓動が走り出す。今から自分はこの国民達の前に出なければいけないのだ。

?

「時間には十分間に合いますが、予定よりは遅くなってしまいました。もうたくさんの者が集まっていることでしょう。スムーズに城内に入ることができるといいのですが」

?マルスの数分前のこの言葉は杞憂に終わった。馬車がファサードの前に来るなり、門の上にとってつけてあった鐘たちがけたたましく鳴った。

「ゲントゥム様の馬車のお通りだ！　即道を開けろ！」

?衛兵達の声が外から聞こえる。どうやら馬車を囲んでいた者達は、素早く指示に従ったらしい。一時止まっていた馬車が、ゆっくりとまた動き出す。

?鐘の音から、馬車が城内に入っていくのが分かる。心臓が鐘に負けないくらいに煩く鳴る。汗が滲み出る手で、ユメはダルフィムが用意してくれた、可愛い花の刺繍が施されたハンカチを握りしめた。

?門をくぐり少しだけ進んだところで、また馬車が停止する。もちろん今回は人混みのせいではない。

?ユメがゲントゥムを見ると、ゲントゥムはコクリと頷いた。言われた通りにすればいい、と伝えるかのように。

?最初にマルスが馬車から降りる。そして、後に続くゲントゥム。

?ユメは立ち上がろうとして、だが足にうまく力が入らず少しよろめいた。ゲントゥムが振り返る。急いで態勢を立て直すと、無意識にネックレスの宝石を手で掴み、ユメは深呼吸した。

?もう、逃げられない。

?数秒後、頭をシャンとあげ、前を見据えて、マルスの差し出された手に助けられながらユメは馬車を降りた。

?

＊　?　?　?＊　?　?　?＊

?ユメが馬車から降りると同時に好奇の視線といくつもの囁き声が聞こえた。ゲントゥムが連れ立った少女。召使いでなうことを表す豪華な服にアクセサリー。優雅にお団子にまとめられた髪。

?さぞかし興味を掻き立てられるに違いない。

?気にしない、と自分に言い聞かせ顎をぐっと上げると同時に視線をあげると、真正面には台座があり中央には、金飾りの大きな椅子にでっぷりとした体格で、灰色の髭を生やした国王らしき人が座っている。頭の上には金色に光る、大きな冠。

?国王は辺りのざわめきには無関心に目を閉じており、寝ているのか考えに耽っているのかは判断できない。

?

その隣には場内で一番艶やかな衣装を身につけた女性。

?金髪のゆったりした髪に、豊満な胸。中年くらいの年に見えるが、気品があると同時に群青色の瞳はどこかツンとした冷たさを感じさせる。召使いに日傘を持たせて立たせているが、それでも暑いのかせっかくの美しい顔をしかめ、鳥の羽根でできているらしい紫と赤で彩られた扇を仰いでいた。

?初めて足を踏み入れる、王宮。台座の後ろに見える巨大な白乳色の城は、中央、レフトウィング、ライトウィングの3つの城から成っている。広場から見るよりも近くで見ると、王宮はずっと大きくまた荘厳だった。建物の装飾は非常に凝っており、多くの人型の彫刻（恐らく精霊）が、まるで彼らに見下ろされているように錯覚させるほど精妙に彫られている。

?あまりの立派さに、カメラを取り出して撮影したいような観光客の感覚を、ついユメは覚える。

?台座の前には、広場を形作るように城内に入る許可を得た精霊達が円状に囲んでいる。真ん中の開けた場所で、どうやら王への贈り物である「見世物」が行われるらしい。

?ふと台座の右隣を見ると、玉座ほど立派な椅子ではないが、同様に威厳を感じさせる椅子が並べてあり、一部は既に顔見知った者が座っていた。七大貴族。ゲントゥムの馬車は彼らの席近くに停車し、ユメも彼らからそう遠くない位置にいたがやはり曲者ばかり。

?

?立ち見の者がユメやゲントゥムに注目しているのに比べ、ユメが先日会議の間に引っ張り出された者だと気づいているのかどうかは定かではないが、それぞれ物思いに耽っていたり別のことをしていたりと他のものと関心を共有していない。

?台座一番近くに日の精霊、ソラ。その隣には大きなリボンを頭につけた少女がすまして座っている。兄妹なのだろうか。髪の色や肌の色白さがほとんど同じだ。

?その隣には、アルボア。隣には民族衣装の様な格好をした背の低い男が二人。背中には弓を下げている。

?その隣には、黒肌のルチア。こちらは奥さんらしき人を連れ立っている。

?その隣にはアウルム。相変わらず派手な格好をしている。宝石をはじめとするアクセサリー達が太陽の光に反射して輝いている。

?続いてイグニフェル。足をどかっと大きく開いて、待ちくたびれたような顔をしているが、視線は虚空に向けられているためユメには気づいていないようだ。派手な衣装を身につけているわけではないが、黒い袴を隣に座っている少年と共に身につけているため、浮く様に目立っている。

?袴の少年の隣には椅子にちょこんと座ったマレ。退屈しているのか、顔の前で虹色のシャボン玉を作って遊んでいる。頭上には一際大きなシャボン玉が浮かんでいるが、その上には巨大なおたまじゃくしらしき生物がだるそうに寝そべっている。

?その隣には3席空の椅子。言うまでもなくゲントゥムやユメに用意された椅子だ。参加人数だけは、伝えてあると聞いた。

?マレと空いた席を挟むようにして座っている金髪の男は、初めて見る顔だ。群青色の瞳は、王座の隣にいる女性と同じものだ。

?そしてその隣にユメは目を向け、瞬間内臓が飛び跳ねるような感覚を覚えた。

?ラクス。並んだ席の中で唯一真っ直ぐにユメを凝視している。食い入る様にこちらを見た、いや鋭く睨んだ視線は「どうなっている

んだ、説明しろ」、と言っていた。

?ユメも暫く見つめ返していたが、射抜くような視線にすぐに耐えられなくなり、目を反らした。

?何がどうなっているかって?

?

?それはユメ自身が一番知りたいことだ。

?そうしているうちにゲントゥムは台座近くまで歩を進めると、玉座に向かって膝をついた。

?慌ててユメも指示されていた通りに倣う。

?

「陛下、このような晴れやかな日、大変めでたき式典に遅れて申し訳ありません」

?膝をついて敬意は表しているものの、ゲントゥムの謁見は簡素なものだった。ゲントゥムの言葉に国王が目を開ける。どうやら、眠っていたわけではないらしい。思慮深げな瞳が、ゲントゥムを見下ろす。

?気のせいか。顔を俯かせながらも、ちらりと盗み見た国王はどこか疲れたような顔をしているように、ユメには思えた。

「いや、ゲントゥムよ。面をあげよ。まだ定められた時刻ではない。気にせず、席につくがよい。だが、その前に」

?:言葉を括る前に、国王が一言付け加える。

「そこのお嬢さんも面を上げてくれぬか」

?:肌で感じられる人々の視線。ゴクリと唾を飲むと、ユメはゆっくりと、内心緊張と不安で爆発しそうであったが、冷静さをあくまでも装い、膝をついたままの状態で真っ直ぐに国王を見据えた。

?:もともと人間界で国王などとは無縁に生きてきた身。突然現れた王族に恐れ多いなどといった感情は生まれない。

?:ゲントゥムも物怖じする必要はないときっぱり言っていた。ただ、厄介ごとには気をつけろ、と。片時も気を許してはいけない。さもなければ、我々は足を掬われる、と。

「見事なまでの封印の術が凝縮された首飾りに腕輪。訳ありのようだな、ゲントゥム。加えて初めて見る顔だが、この場に連れ立ったということはそれなりに重要人物なのだろう。公に出すとは披露目をもともと狙ってのことだろうが、お前の思惑とあって大変興味が惹かれるところだ」

?:国王の立てという合図に、ゲントゥムが立ち上がる。国王はユメにむかっても頷いたので、背後にいるマルスを少し振り返り、確認の目配せをした後ユメも立ち上がった。ユメのいるところからは、

その後ろ姿しか見ることができない。

?今や国王の言葉で、一般の観客だけでなく、台座そして貴族陣からもひしひしと視線を感じる。イグニフェルが今更ユメに気づいたらしく、驚いて身を乗り出すのをユメは目の端でとらえた。

「さすが陛下、素晴らしい洞察力ですな」

?ゲントゥムが感心したように言う。国王がユメに関心を示すのは予想してたことだったため、恐らく演技も入っているだろうが。

「それでは、謹んでご説明させていただきましょう」

?ゲントゥムが話始める。前もって3人で打ち合わせた通りに。月の精霊の一族としてのユメの勝負は既に幕をきっていた。

史上最悪の国王誕生祭　４

「単刀直入に言わせて頂きますと、ここにいる娘は私の実の孫娘です」

「なんと……」

?国王が驚きの声と共に目を見開く。台座横の頭首陣、そして背後の大勢の者達の息を呑むのが聞こえる。

「確かなのか？　しかし、実の孫娘となるとお前の……」

?予想もしなかった事態に、今までの威厳があり、気難しげな態度が一変、少し狼狽えている様子の国王をユメはぼんやりと見つめながら、昨日のことを回想する。

ーーお前は正真正銘、私の娘ディセムの娘、ディアナ・クレセントだ。

「はい、その通りです、陛下。１６年前、天変地異が起こっていると騒がれたあの年に亡くなったディセム、私の娘をまだ覚えてらっしゃるかと推察いたします」

?国王が慎重な面持ちで頷く。

「もちろん、忘れておらぬ。あの悪夢のような一年はわしも大事な者を亡くしたゆえ、１６年たった今でも忘れることはできぬ」

?国王の言葉に、同じく台座に座っている女性が少し身じろぎをした。心なしか扇を仰ぐスピードが早くなったように感じる。

「私の娘、ディセムはあの年の2年前、星の精霊の者と結婚し、ここにいる娘、ディアナ・クレセントを産みました」

ー母親を知ったからには、父親のことも気になるだろう。世間ではディセムは星の精霊のある青年と結婚したことになっておる。だがあくまで表向きの話であり、実際は違う。お前の父親は……それを話すのは今はまだ早いだろう。もう少しこの世界のことを学び、成長し、術を使いこなし、月の精霊、つまり私の後継者として自覚をもってからいずれ話そう。

国王は再び視線をユメに移し、軽く数度頷く。

「覚えておるぞ。ディセムは聡明で心優しく、かつ優秀な術使い。ゲントゥム、お前の才能をそのまま受け継いだようだったの。そのディセムが腕に抱いておった赤子、それがこの少女だというのか？」

「その通りです、陛下」

「お前がそう断言するのであれば、疑う余地もないが……。しかし、なぜ今になって？　ディセムが亡くなった16年前、その忌まわしき不慮の事故により子供も亡くなったと聞いておったが」

「えぇ、私もずっとそう思っていました。ディセムは術の鍛錬を子供をもうけてからも怠ることなく、危険な上位の術は控えるようにと日頃から注意していたものの、あの日術の練習の最中に誤って自

らをその強力な術で貫いてしまった。何が原因かは今でも分かりかねます」

?ゲントゥムが目を伏せた。計画通りに話を運びながらも、その顔は苦渋の影を帯びている。

ーーあの日、お前の母親は何者かに狙われ殺された。一緒にいたお前も狙われたのだ。

「噂されているように、今この国を悩ませているダークリットも16年前から出現し始めました。もしかしたらディセムの死はダークリットに関係しているかもしれないと私は思っています。……話が逸れましたが、その時以来、ディセムの娘は忽然と消えてしまいました。ディセムの亡骸はあれど、一緒にいたはずの子供は遺体なども見つからず、行方不明。当時どこかで生きているのではないかと、私は随分探しました。やがて見つからないまま、数年が経ち私はやはり子供も亡くなったのだろうと諦めていたのですが、今頃になって、16年も後になって見つけることができました。それも陛下の御子息、第二王子であられるラクス様のお陰で」

?そこでゲントゥムが軽くラクスに向かって一礼する。

「ラクスが……?」

?国王は困惑した表情で、台座の横の列の席に座っているラクスを振り返った。当のラクスは苦々しげな顔をして、ゲントゥムを見ている。ゲントゥムの言っていることを信用していないのは明らかだった。もっとも相手が信用するかどうかなど、問題でないとゲントゥムに言い聞かされていたが……。

?ふとユメがその横を見ると、ラクスと同じ金髪の青年も、まるでまずい食べ物でも口にしたかのように顔を顰めている。

「ラクス、どういうことだ？　説明できるか？」

?国王の言葉に、ラクスは立ち上がり一瞬だけ鋭い一瞥をユメに与えた後、ユメとの出会いからの出来事を完結に話し始めた。

?ダークリットに襲われていたこと。人間界での記憶、真実の光、幾重ものかけられた術。そして紫の洞窟へ。

?ラクスの説明が終わると、国王は未だ困惑した表情で、だが鋭い声でゲントゥムに質問を浴びせた。

「人間界で過ごした記憶？　紫色の洞窟で行方不明だと？　これをゲントゥムどう説明するのじゃ？」

?

「あくまでも推測でしかありませんが、ディセムは親の私から見ても優秀な術者でした。何が原因か、それは分かりません。しかし強力な術を受け、記憶喪失、ある種の錯乱状態になったと思われます。それでラクス様のご意志で洞窟に連れられた際、真実の泉で付着していた幾重もの術が解け、聖地に宿るセレーネの力により、本来戻るべき場所、‘月城’へと１６年ぶりに戻ってきたのでしょう。城の部外者を入れぬ結界を越え、入り口の前で倒れておりました」

ーーディセムは致命傷を負いながらも禁じられたサンギスを使用す

るの強力な術、それを応用した更に危険な術を使いお前を人間界へと送り飛ばした。

「ふむ。あくまで可能性としてあることじゃな。だが、この１６年どこにいたというもじゃ？　一人で森を彷徨っておったのならば、命はとうに尽きておろう……」

「私も同様の疑問を持ち、マルスに早急に調べさせたところ……」

？ユメの背後でマルスが軽くお辞儀をする。

「村からはずれ辺境に住んでいた星の精霊の女性が１６年前に幼子を保護して育てていたということが判明しました。もちろんディセムの娘だとは思いも寄らなかったようです。保護された時の様子を聞くに、術の影響で若干容姿、髪や瞳の色にも変化があったようです。これで探せど、ディセムの娘が見つからなかった理由も説明できましょう」

ー恐らく人間の子供、魂が反発しにようにと一方の魂が消えた身体、つまり人間の子供の遺体にディセムはお前を隠した。

「なるほど、しかし、もう一つその推察では説明できぬことがある。ゲントゥム、お前はどうやってこの子がディセムの娘であると？セレーネの計らいでか？」

「それもありましょう。ですが、何よりも……」

？ゲントゥムがそこでユメを振り返り、頷く。そこでユメは打ち合わせ通り、左手首にはめられた腕輪を外した。

?ふわっと軽くなる体。何かが自分の身体から空気中に発されているような感覚。ふと夜空の満月、そしてその一部を覆う黒い夜の雲が頭に、いや伏せた瞼の上に浮かぶ。

?それに呼応してか、黒い雲のような物体がユメを包んだかと思うと、そこにまばゆい月の光がユメを中心にさす。

?周囲にいる者が驚きの声をあげる。国王がやや身を乗り出し、隣の女性がまるで眩しく感じるかのように目を細めるのが見えた。頭首座席のざわつきから聞こえるイグニフェルの驚きの声。ラクスの微塵の変化もでない顔、それでいて突き刺すような視線。

?ユメはもはや緊張は微塵も感じず、どこか辟易として空を見上げた。今日は白い雲がくっきり浮き出て見えるくらいに、空が青い。吸い込まれそうで、どこか不気味だ。

ーーお前は１６年間、人間として生きてきた。そしてある程度歳を重ねた今、私はディセムの残した痕跡を辿り、お前を引き寄せた。

?冷んやりとした秋風が肌をすっと撫でる。

ーーディアナよ、采は投げられた。この世界に来た今、お前は紛れもないディアナ・クレセント、月の精霊の長(おさ)の後継者だ。

史上最悪の国王誕生祭　5

ゲントゥムの説明が終わり、ユメが腕輪を再びはめ、辺りのざわつきようやく落ち着きを見せた頃、国王はようやくゲントゥム達に席に戻ってよいという合図を出した。

ユメは空いていた席にゲントゥム、マルスの間に挟まれるようにして座る。席に向かう途中の頭首陣の無視できない視線と緊張した空気。

超然としていればいい、というゲントゥムの言葉を胸の中で繰り返しながら、ユメは誰とも目を合わせず前だけを見つめていた。もちろん視線をぶつける者の中には当然ラクスも含まれ、更にはお互い席もわずか数席しか離れていなかったが、一瞬たりとも目を合わせることはない。

何がユメをゲントゥムのいう通りに行動させるのか、ユメ自身分からなかった。月の精霊の一族としての自覚が当然あるわけでもない。もしかしたら、いつもの常套手段、「諦め」を用いてただ流れに身をまた任せているだけなのかもしれない。ラクスやゲントゥムの意思、この世界の動向には冷酷な程、無関心に。

だが一方で今回ばかりは、無関心という言葉がすんなり納得の鋳型に当てはまらないような気もする。もしかしたら、探ってみたいのかもしれない。自分が精霊として生を受け継いだ場所、そして由縁を。

?静まり返る群衆。国王の頷きにより、今回のメインである催しが始まる。

国王誕生祭。その一大行事は、貴族達による見世物、先日ラクスの洋館で開かれた会議によって計画されたものだが、貴族、そしてそれに続く他の精霊達による「舞い」で彩られる。

頭上高くでその「舞い」は成されると、マルスはユメに説明した。王宮前広場に集まった群衆も楽しめるようにだ。

始まりに期待を寄せる緊迫した状況のなかで、まずアルボアが立ち上がる。優雅な足取りで、レース素材の深緑のワンピースを揺らしながら円陣の中央に進む。中央に辿り着くと、一息ついた後、空を仰ぐ様に両腕を上に向かって大きく広げた。

一拍の無音の後、立ち昇るように現れる緑色の円柱上の光。前にある王宮の屋根の高さまで真っ直ぐに伸びたかと思うと、不規則に所々がゆらゆらと波立つ。

大きな波、小さな波を作りながら、柱の表面が少しずつ全体の形を変えるように蠢(うごめ)く。

まだその形がはっきりと形成される前に、緑の光を包むようにして突然現れる水柱。

見ると、いつの間にかマレが立ち上がり、アルボアから少し離れたところで術を繰り出していた。頭首達の中ではダントツに小さく子供のような体型だが、発生させている巨大な水柱は、アンバランスな程の威力をもって天に向かって吹き上げる。

水柱の中で緑の光はなおも輝いており、美しい。

ソラ、そしてその隣にいた美少女が同時に立ち上がった。水柱を囲む一つの輝く環（リング）が現れる。円柱からある程度離れた席からでも、感じる環の熱。まさに太陽の日差しが与えるそれだ。やがて環はその直径を縮めるようにして小さくなっていき、水柱の外縁に触れたかと思うと、水柱と共に爆発を起こした。

水しぶきが広範囲に飛び、爆音に驚いた者達から悲鳴があがる。が、続いて聞こえるのは数々の息を呑む音。

水柱の後に姿を現したのは、緑の光ではなく巨大な大木だ。空に伸びる長くて太い枝は、葉1枚もつけていない。

ふと雨が降りだした。天然のシャワーのような優しい雨。もちろん、マレだ。日の精霊も休むことなく、春にさすようなうららかな日差しを作り出す。それに合わせて、小さな虹が降り注ぐ雨の中に発生する。

やがて大衆の期待を裏切らず、太い枝は青々とした大きな葉、続いて蕾までも実らせる。ゆっくりと蕾を開いて咲く、薄桃色の大きな花。雨が止んだ。と同時に淡い緑の光が花から漏れ出るが、次の瞬間には消え去り、代わりに花びらの上に着飾った少女達が現れる。

辺りから歓声が上がった。白いワンピースに、頭にのせた花輪。その周りを散る花びら。花の上で舞う彼女らは言うまでもなく、花の精霊達だ。

その中にユメはフローラを見つけた。幸せそうに微笑みながら、舞っている。眩しい、とユメは感じた。どんなに着飾っても、また同じような術が使えたとしてもユメはきっとあそこまで輝くことはで

きない。同じ衣装、同じ舞をしている少女達の中で、際立って輝き人目を吸い寄せるのはフローラの生まれもった天性のようなものだろうか。第二王子ラクスの許婚、誰もがそれに納得して頷くに違いない。

そうしているうちに、今度は大木の根元の周りの地面が蠢き出した。ルチアが席を離れていることに気づく。ガランとしてきた頭首席の列の中でイグニフェルは未だ席についていたが、自分の出番を今か今かと待ち構えるかの様に大きく貧乏ゆすりをしていた。

静かに動き始める大木の根元近くの地面。今度は何が出てくるのかとユメが見ていると、大量の砂が吹き上げた。とぐろを巻くように大木を包んでいく。砂の中に大木がすっぽり入りやがてその中に姿を消した時、砂は竜巻の様に最初渦巻いていたが、再び姿を変え始めた。

観客から悲鳴があがる。大木、そして精霊達も消え、代わりに出現したのは大木と変わらぬ大きさの砂でできた大蛇だ。本物の蛇のように滑らかな動き。台座と向かいあうように立っていた群衆に対しシャーっと威嚇し、思わず多くの者が再び悲鳴をあげるが、それも次の瞬間に起きた大爆発に掻き消された。

ルチアに代わって今度はイグニフェルだ。突如現れた盛んに燃え盛る炎は、その中央から小さな火玉を発し、それは小さな爆発音をたてて消える。そうしたところへ、上から数々の隕石が降る。イグニフェルの横でアウルムが空を仰いでいた。隕石が火を消し去る。そこへ雨がまた降り始める。通り雨の様に一時的に激しく。雨が止んで強い日差しが隕石を照らす。周囲の小さな隕石が日に照らされ消滅していく中、中央にあった一際大きな隕石はバリっという

大きな音をたてて割れ、中からはユメの身長程もある、青く美しく輝くラピスラズリ。それは地面から離れ、頭上の空気中で停止した。

そこで王宮、広場にふと影が漂い始める。不思議だ。空は青空が広がっているのに、その場だけ影に包まれ薄暗い。観客達の興奮がその暗い空気中に入り混じる。

影の中で一本の光が影にラピスラズリをを照らした。日の光ではない。ユメは隣を見上げた。立ち上がったゲントゥムは、至って冷静に術を繰り出していたが、暫くすると観客席の方にコクンと頷いた。

それを合図に黒いローブを身につけた集団が群衆の中から出てくる。いつの間にかむこうに待機していたマルスを筆頭に。星の精霊達は皆、先に小さな丸い光る水晶（色はマチマチであるが）がついた杖を手にしており、マルスの合図でそれを頭上に突き上げた。

次の瞬間ユメは、目を見開いた。ラピスラズリを取り囲むように現れた無数の小さな光でできた星座達。ゆっくりとメリーゴーランドのように回りだし、凄く綺麗だ。全身を光らせながら、優雅に空中を舞う動物達。流れ星のように素早く目の前を過る矢。美しい模様が描かれた水瓶。思わず恍惚状態になってしまう程、綺麗な調律を奏でる琴。

見事なクライマックス。星と月の精霊達は少しも他の精霊のパフォーマンスに引けをとらない。

ふと辺りが一段と暗くなった。誰もがまだ「舞い」の続きであると思ったにちがいない。ユメもその一人である。だが暫くして様子がおかしいことに気づく。琴の音が止み、星座達が消えた。

一瞬の緊迫の後、頭上ではなくすぐ近くで複数の爆音。暗闇の中でよく見えないが、上から何かが次々に降ってきているのが辛うじて分かる。観客達の響き渡る悲鳴。「舞い」の最中の驚きのそれとは、一線を画する叫び。身の危険を間近で感じ発せられるものだ。

途端にパニックになる場内。広場から聞こえてくる声で、王宮前広場も同様の状況なのが容易に察せられる。

ユメもパニックには陥りはしなかったが、このまま座っていては危ないと感じ暗闇の中で方向感覚も麻痺したまま、勘で足を進めた。

そうしていると背中、そして首筋あたりにふわっとした何かを感じ、即座に振り返る。するとそう離れてないところに、2つの小さな光。ユメは感覚でその1つが誰のものであるか察知した。

2つの光は最初は小さかったものの、数秒後その強さを増しながら一気きに場内に広がった。

闇が消えた。王宮、広場がもとのままで姿を現す。戦闘体制に入って散らばっている貴族達と、地上、空中に無数に現れらダークリットを除いて。

混乱は未だ消えない。宙に浮いたダークリット達は、攻撃をしかけながら隕石のように勢いよく降ってくる。

ユメを目掛けて1体のダークリットが降って来る。ユメは間一髪で避けた。幸い周辺の騒ぎの声で、ダークリット達の苦しみもがく呻

きはほとんど聞こえない。だが攻撃を外したダークリットは容赦なく即座に飛びかかって来る。

?

?再び避けるユメ。しかし次の瞬間、背後から襲い掛かってくるダークリットに気づく。その背後にラクス。

?ユメに迫り来る影をよそに二人は一瞬無言で見つめあった。いや、見つめ合いというよりは探り合いだ。お互いに相手の意図を読み取ろうとし、そして……。

?周波数の合わないラジオのように辺りの騒ぎが小さく遠くで聞こえ、時が停止する刹那。その中で瞬きをし、目を見開いた瞬間、目と鼻の先にはダークリットがいた。怖くはなかった。影がユメに触れる、一秒ないその寸前で強い光がダークリットを捉え消滅させる。はっとして一方のダークリットを見ると、既に輝く炎に包まれて動きが阻まれているところだった。

「ディアナ様、お怪我はありませんか?!」

?慌ててこちらに駆けて来るマルスとそのすぐ傍にポチ。うまく敵を捉えたことを誇るように、空に向かって炎を吐いている。

?ユメは小さく息を吐いた後、マルスにお礼を言い、振り返ってラクスにもつたえようとしたが、既にそこにはいない。

立ち込める砂ぼこりの中　周囲を見渡すと、あちらこちらに意識を失って倒れている者や怪我をしている者が目に入る。自分がうっかりしている間に事態が更に深刻していることに気づき、ユメは今更になって焦り始めた。とりあえずダークリット払拭には力になれないので、負傷者を助けようと2、3歩踏み出して、異変に気づき停

止する。

「何これ……」

?負傷者達の横たわる周囲の地面が、沸騰した湯水に様に泡立ち始める。ボコボコと音を立てながら、負傷者達を乗せたまま盛り上がり、やがてそれは担架の形へ変化した。

?

ユメは周囲を見渡した。予想通り、騒動の中で落ち着きを払い、だが険しい表情で担架を操るルチア。その隣には夫人と見える女性も手助けをしている。担架は次々に負傷者を安全な場所へと運んだ。

「どうしよう……」

困惑しながらユメは呟く。逃げるべきか。この場に留まっても足で纏いになる。かと言って、台座横の列席に腰をかけていた貴族達が他の精霊達を守るべく果敢に戦っている中、ユメだけ避難するのも気が進まない。

「いい度胸してんな、お前ら」

イグニフェルが笑い声をあげながら、ダークリット達を蹴散らす。

「よりによって俺ら七大貴族、最高戦力が集まってる時に奇襲をかけるとは」

?その背後ではアウルムが岩石を飛ばして応戦している。

?アルボア、そして同じ木の精霊の一族とみられる者達は担架で運ばれた負傷者の治療。ラクス、金髪の青年はダークリットを外に出さないよう、光の囲いを駆使して台座前の中央に集めている。

?ゲントゥムは光る弓矢でダークリットを貫く。弓に刺されたダークリットは、弓の刃先から漏れ出した光に包まれ消失した。

?マルスは他の精霊達と共に何かを詠唱していた。それが終わると同時に、巨大な魔方陣が現れ、さらにそこから大きなグリフォンが飛び出した。威嚇するような咆哮と共に、翼を何度もバタつかせ竜巻を発生させる。その威力も貴族達に劣らず、数体のダークリットを巻き込んで一気に消失させた。

?

?一方国王はというと、どこからか取り出した光る剣でラクスに似た強烈な光を放ちながら、意外にも前線で健闘。意外と言えば、マレも他の貴族達に引けをとらず、戦っている。

「タマちゃん、行くよ！」

?頭上のシャボン玉に寝そべっていたおたまじゃくしが大きく飛び跳ね、一瞬光ったかと思うと巨大なカエルになった。その体のぬめり具合と気持ち悪さは、紫の洞窟で邂逅した化け物と変わらず、ユメは慌てて目をそらす。

?今度の視線の先では、ソラが太陽のミニチュアのような光の球体を出す。

「焼き尽くす日の光よーー。アポロン・フレア！」

?:瞬間、光の球体が大音量の音共に爆発。場にいたダークリットの半数が一気に消える。

「相変わらずやるな、ソラのやつ」

?:イグニフェルがソラの活躍に息を巻く。

「んじゃ、俺も！　」

?:イグニフェルが術を繰り出そうと構える。だがそれは不発に終わった。ダークリットの奇妙な動きにいち早く気づいたからだ。

「なんだあれは？」

?:ユメもイグニフェルの視線の先を見た。頭上高くに散らばって浮くダークリット達。地上にいたダークリット達。どちらもゆらゆらとある空中の一点を目指して移動する。

?:砂ぼこりが収まった。貴族達は、ダークリットの奇妙な行為を静止して伺っている。

?:やがてダークリット達は、一点に集まると黒い影のようなオーラにあり他のダークリットと融合始める。

「父上！」

?:金髪の青年が国王に向かって叫んだ。

「この動きは？　ダークリットのこのような行為は初めてです」

?国王はそれには答えず、今や巨大な影の塊と化としているダークリットを無言で睨みつけている。地面に先を向けた剣を握る右手が、僅かに震えている。

?これまで見てきた中で一番不気味だ、とユメは思った。もはや人や獣の形もしてうないのに、生き物様に蠢く影。

?肌で感じる邪悪な気配に鳥肌をたてた刹那、突然体がダークリットの塊にぐいっと引き込まれるような感覚を覚えた。中に取り込まれそうな吸引力に、ユメは小さく悲鳴をあげる。

?よろめいて、その拍子に落とした視線。ユメは依然として地に立っており、ユメの不自然な動きに気づく者はいない。

?

?煩い心臓の音を聞きながら、ユメは未だ自分の体がおかしいことに気づいていた。さっきの感覚とは異なり、実際はダークリットに吸い込まれたのではない。影が、いやそこから放たれる闇の方がユメの瞳に入り込んできたのだ。

?顔をあげると、依然としてダークリットを見上げる頭首達と王族。グラリと内側からくる振動に、ユメは必死に足に力を入れ持ちこたえる。

?体の奥底から深い悲しみが湧き上がった。絶望だ。世にある全てのものが無意味であり、自分の存在さへもいっそ張り裂けて消えた方がいいと感じる。

「攻撃がくるぞ。今までので一番強力な力を感じる！」

?ラクスの声が遠くで聞こえる。

ユメをすっぽり包む　悲しみの中で別の感情が生まれた。

?よろめきかけていた体を姿勢を正して、立て直す。

?ユメはダークリットではなく、視界に入る頭首達、そして王族、ラクスを見つめた。

?彼らがーー。

憎い。

?素知らぬ顔で平穏に生きる彼らが。自分達が他に与えた不幸を顧みず、平然と生を楽しむ彼らが。

ーーいっそ死んでしまえばいい。

?何かに支配され、遠のきそうな意識の中でユメは自分がゲントゥムから貰った封印の腕輪を静かに外すのを感じた。未だユメの異変に気づく者はいない。

?違う！
?完全に消え去ろうとしている意識を踏ん張って繋ぎとめながら、ユメは心の中で叫んだ。

ダークリットの集合体が巨大な球体のまま動き始めた。空中で大きな弧を描き旋回すると、一気に急降下し、そのまま地上にいる者達に突進してくる。

ーー今だ、彼らを攻撃しろ。

?低い男の人の声がユメに命令する。

「構えろ！」

アウルムが叫んだ。影は初めマレの方に襲いかかってきたが、途端に庇うようにして出て来たカエル、イグニフェルの炎の盾とルチアの土の盾に遮られ、再び空中に舞い上がる。

ーー何をしている、早くやつらを攻撃するのだ。

?違う。これは私じゃない！
勝手に人の身心を乗っ取らないで！

「また来るぞ！」

ーーやれ！

「違う！！！」

?:ユメは声に出して叫んだ。瞬間、大量のエナジーが光としてその体から放出される。一斉にユメに振り返る頭首達。

?:と同時に、けたたましい鳴き声があたりをつんざく。グリフォンだ。

?:ユメは何かを意図したわけではない。ただ内側の闇の声に向かって叫んだだけだった。それなのにどういうわけか、ユメの発した光は、矢のようにグリフォンへと発された。

?:光とグリフォンがぶつかる。グリフォンの咆哮。ついで出された黄金の強力な炎が真っ直ぐにダークリットを直撃する。

?:直後、ダークリットが衝撃で元の大きさに分解され、空気中に飛び散った。

「あれは……」

?:散らばったダークリットを見上げた者達が驚愕する。影だったはずのダークリットは、散らばった瞬間に精霊の姿に変わっていた。

?:地上を見下ろすように浮かぶ精霊達。言葉はないが、皆穏やかな

顔をしている。

「浄化の光」

?:やや蒼ざめた顔のゲントゥムがポツリと呟いた。

?:やがて浮かぶ精霊達は数秒後、王都に来る道中馬車内で見た精霊と同様に、空気と化するように消え去る。

?:黄金の炎がダークリットに衝突するまでなんとか持ち堪えていたユメだが、光を放出しきった後全身の力が全て抜け、視界が暗くなると同時に意識も遠のき、ぐらりと大きく揺れその場に倒れた。

「ディアナ様!」

?:最後にマルスの声を近くで聞き、ユメは静かに目を閉じた。

?:

史上最悪の国王誕生祭　6

「何がどうなっているんだ！？」

？部屋に入るなり、珍しくラクスは取り乱した様子で前髪を掻きあげた。

？混乱が収集せぬまま有耶無耶になって終わった誕生祭。一般の者は帰され、負傷者は病院に搬送、貴族達は後に開く緊急会議のため王宮内に待機となった。

「確かに今日は、前代未聞のことばかりが起きますね……」

？ラクスに続いて部屋に入ってきたレニタスはいつもの落ち着いた様子で、だがどこか同情するようにラクスの顔を伺う。

？今、ラクス達がいる部屋は王宮内にあるラクスの部屋だ。幼少期から長い間ラクスはここで育った。王宮を家出するように去ってからは、月に2度も訪れれば多い方。王宮に仕える者達は、ラクスがいつ帰ってきても大丈夫なようにいつでも万全に部屋を整えている。家具には埃一つ見当たらない。

？ソファにどさっと座り込みながら、ラクスは深く溜息をついた。

？

？まず何から考えればいいのか。

？その疑問を読み取ったかのように、レニタスが手始めに1つの話題を振る。

「ユメさん、いや、ディアナ様はご無事だったのですね……」

?ラクスはレニタスに向かい側のソファの座るよう促しながら、直前のレニタスの言葉にふと違和感を覚えた。

?レニタスはユメが何から無事だったと言っているのだろう。何を指して言ったのだろうか。忽然と消えてしまった紫の洞窟でのことか。それとも、１６年前の悲劇のことか。

?１６年前。この世界では、始祖達がこの世界を作り上げた年を０年と考え、現在は５２５２年。つまり、あの不審な悲劇が続いた年は５２３６年。

?悲劇。これもしっくりしない言葉だとラクスは内心苦笑する。何が悲劇なのか。身内を含め、謎の死を遂げた者がいることか、それともその裏で謀を企てた黒幕がいることか。

?ラクスはもう一度溜息をついた。いろいろとありすぎて疲れているのだろうか？　思考が離散しており、返って混乱を招いている。

「ユメは……」

?無理矢理、思案の焦点をユメに戻す。

「ユメは……怪しいな」

「と申しますと？」

?レニタスが鋭い声で聞き返す。
ラクスはゆっくりと考えをまとめながら、慎重に言葉を選び始めた。
「月の精霊、ディセムの娘であることは間違いないと思う。あの光は紛れもないものだった。最初のも、後のグリフォンと同調して発した強烈な『浄化の光』も」
「そうですね。あれほどの強力な術を使える者は限られていますし、そもそも月の精霊は現在ゲントゥム様の他にその弟とその息子。風変わりな親子と聞いていますが、どちらも娘がいるとは聞いておりませんし、月の強力な術を使える少女と考えれば、行方不明だったディセム様のお嬢様しか当てはまりません」
「あくまで世間体で知られている家系が正しければの話だ、レニタス。基本、月の精霊は秘密主義でその態度は僕ら王族に対しても変わりない。今更になってーー」
??そこでラクスは苦笑する。
「今更になってユメの話は本当だったんじゃないかと、思ってしまうんだ。当初は話をうまく合わせながら、完全に信じていなかったが……」
「ラクス様、それはゲントゥム様の話が偽で、錯乱状態だと考えていたユ、ディアナ様の話が真であるとお考えているということですか？」
「調べたんだ。昨日、王宮図書館で一般公開されていない禁書を。興味深い文献があった」

?それは、４０００年前そして１５００年前にも起こったという史実。精霊が人間界へと渡り、人間の肉体を使いそこで暮らしたという。結果、その精霊の存在は人間界には存在しないはずの、いやあってはならぬはずの技術をもたらし、文明に多大な影響を及ぼしたらしい。それは必ずしもよい影響ではなく、この史実が一般に隠されている理由はそこにある。

?禁書は七大頭首を始め、貴族達は閲覧可能だ。ディセムやゲントゥムがこの史実を知っていてもおかしくない。

「レニタス、今日のユメを見て何か感じたか？　どことは言えないが、雰囲気が変わったと思わないか？」

「言われてみれば、確かに最初馬車からディアナ様が降りられた時、すぐにはあのユメさんだと悟れませんでした」

?レニタスの答えに、ラクスが頷く。

「実は１５００年前に人間界へと渡った者は、その後精霊界へと戻って来たと記してある。王立研究所に所属していた者だ」

「その方がディアナ様の外観と関係が？」

「その研究員は自分を研究対象として日記のような者を残していた。その手記の一部が残っている」

?そこには以下のように記してあった。

『私の精霊としての身体は、人間の身体を借りているうちにその肉

体と融合し、半人間半精霊のような存在になった。かつての人間の外観（死んで間もない遺体）は、私が使用するにつれ、徐々に変化していった。だが精霊界に戻った後、すっかり私の一部となって同化していた人間の肉体は、不可視ではあるがゆっくりと朽ち果てたらしく、私は完全にではないが以前精霊界で暮らしていた時の姿に戻っていった。繰り返すが完全にではない。人間の肉体が私の精霊の身体に与えた影響のごく一部は消えず残り続けるようだ』

?:驚愕すべき史実、興味深い文献にラクスは没頭した。第二王子で歴史のみならず、多彩な分野について英才教育を受けてきたラクスも、今までこの様なことは耳にしたことがない。

?:この国では王立研究所内以外では、人間界と精霊界の一線を超えて使用する術をタブー視する嫌いがある。ましてや精霊自身がその一線超えることなど、可能であったとしてももってのほかのことだ。人間界との境界線を超えるための術は、人間界にある自分の命の源、オリゴから引き出すサンギスを使うもの。言わずもがな高度な術であり、命に関わるハイリスクなものだ。所望しても、使用できる者は多大なエナジーを有し、術使いも卓越したものに限られる。王宮はその限られたわずかな者が出入りする場所。王宮でも語られないのは、そのためか。

『私の人間界への渡航はわずかばかり使えた術を用いることで、その地域の文明に大きな発展もたらしたが、それはその文明が滅びる所以ともなった。後悔したところで元に戻すことは不可能であり生産的でもないが、我々はこの類の研究に終止符を打つべきかもしれない』

?:以上は手記の最後の一節だ。彼は少なからず、一線を超えて人間

界へと渡ったことを過ちだと認識していた。

「確かに、ユメさんの外観が微々ではありますが変化した理由、今のラクス様の話で説明することもできるでしょうが。しかし、正直なところ、それだけでは……」

?:レニタスが言い淀むが、ラクスはその言わんとするところをはっきりと理解していた。

「もちろん、全く断言はできない。けれど、今日のゲントゥムの話、あれが本当だとも到底思えない。ゲントゥムは知っている。そして隠している。何を何のためにということを僕達は、殆ど探れないが……」

?:そこでラクスは視線をレニタスの足元のあたりに落とした。

「ユメが結局ディアナとして‘月城’に帰還したのは、不穏な動きには間違いない。そして口裏を合わせているところを見ると、ユメは完全にゲントゥムに加担しているようだ。紫の洞窟でもゲントゥムの会話を一切明かそうとしなかった。恐らく僕の責任だ」

?:ラクスが殆ど独り言のように呟く。

?:「僕が全くユメの話を信じず、あんな形で頭首達の前に引っ張り出したから。信頼されていないどころか、根にもたれていてもおかしくない」

?:レニタスは口を閉じたまま、苦々しく自嘲するラクスの顔を見つめた。

?あの紫の洞窟へ足を踏み入れた一昨日のこと。ラクス達と別れたレニタスは洞窟内の別の場所に飛ばされ、次から次へと出てくる化け物達、雑魚ではあったが、と戦っていた。キリがないのでいつまで続くのかと辟易し始めた頃、何の脈絡もなく突然吐き出されるように洞窟から追い出され、気づいたら洋館の庭に戻っていた。ラクス、イグニフェルも同様に。ただユメだけが忽然と消えていた。

?あまり表には出そうとしなかったが、ラクスはその日珍しくもそれなりのショックを受けていたようで、すぐにゲントゥムと連絡をとろうとし（取り込んでいて忙しいと断られたが）、書斎の本を漁ったかと思うと次の日は王宮図書館に足を運んだ。ユメの消失に多かれ少なかれ責任を感じていたのは間違いない。

?今回の一連の出来事も、自分に厳しいラクスのことだからその肩の荷として背負うだろう。今までに、もう十分背負ってきたというのに……。

?レニタスがそんな寂寥感を覚えた時、ふと周囲に張り巡らしておいた術により一つの気配を察知した。

「ラクス様、来客のようです」

?直後、部屋のドアをノックする音が聞こえる。レニタスが立ち上がり応対すると、王の使いのもので１５分後に緊急会議を開くということだった。

史上最悪の国王誕生祭　7

クルミ板にはめ込まれた多くの鏡で装飾された壁。中央には１６人掛けの長テーブル。上座にある王座の背後の壁は、暖炉が取り付けてあるが、その上には金飾りの額縁と共にかつて英雄として称えられたゼフィロスの肖像画が飾られている。

その名に因んで、ゼフィロスの間と呼ばれるこの部屋で、顔を揃えたのは七大頭首と二人の王子、そしてイルミネ貴妃。国王と宰相は、まだ部屋に訪れていない。場にいるのは、いずれも国王により招集された者達である。

国王が部屋に入る前、場は異様な雰囲気で満たされていた。頭首、王子を交えての会議は、定期及び緊急会議共に珍しいことではない。見慣れた顔ぶれの中で、明らかに一人浮いており、場に居心地の悪い空気を作り出しているのは、他でもないイルミネ貴妃である。

ただ彼女は張り詰めた空気も気にならないらしく、王座と向かい側の席で、「なんと狭くて暑苦しい部屋なのかしら」とでも内心不平を言っているかのように、しかめっ面をしたまま羽の扇で仰ぎ続けている。その視線は常時窓の向こうに向けられていたが、時たま自分の息子である第一王子のウーヌム、そしてその隣に座るラクスに向けられた。

ラクスその突き刺さるような冷ややかな視線を気に留めることなく受け流す。生まれた時から浴びせ続けられてきた視線だ。慣れてしまうのは、当然と言えよう。

それにしても、とラクスは思った。どうして父上はこの女(ひと)を会議に呼んだのだろう。場違いなのが顕然であり、それは自分だけが感じていることではない。その証拠にイグニフェルは落ち着きなく、もっとも落ち着きないのはいつものことであるが、視線を何度も貴妃に向けているし、アウルムやルチアも数度彼女を盗み見ている。ソラ、ゲントゥム、アルボアも態度には出さぬ者のどこか表情が強張っており、マレは王宮の者から貰ったのか虹色の特大のスティックつきキャンディーを舐めながら、無関心に宙を眺めていると思いきや、頭上のシャボン玉に寝そべったオタマジャクシが体ごと無遠慮にイルミネ貴妃を凝視している。

隣にいる無表情のウーヌムが何を思うのかは窺い知れないが、その他の者は同じ疑問を共有していた。

なぜ彼女はここにいるのか。

ラクスは内心で舌打ちをする。彼女は虫の居所が悪いだろう。ウーヌムの後継者としての地位以外、執政には至って興味がない。それなのに、如何なる理由かこのつまらない会議の場に呼び出され、さらにはこの部屋を外から警護する衛兵に彼女のお気に入りの召使い達の同伴を断られる。決定的なのは、ゲントゥムとの公の会話でのあの父上の発言。これからの会議の運びに彼女の存在が支障をきたさなければよいが……。

「陛下がご入室されます！」

外側に待機している衛兵のキビキビとした報告の後、間髪おかずに暖炉横のドアが開き、国王が部屋に足を踏み入れる。続いて入室したのは宰相ボレアース。国王は誕生祭の混乱の終盤に見せた暗い表情を依然として浮かべている。

誰とも視線を見合わせないまま、国王は無言で席につく。長身で白髪混じりの長い髪に、羽の紋章の入った深緑色の三角帽子にローブを纏った宰相、ボレアースは、感情というものが抜け落ちてしまったような表情でその背後に控える。

ボレアースはラクスの父アイテールの絶対的な信頼を勝ち得ている宰相であるが、種族は風の精霊であり、レニタスの伯父にあたる者である。冷静沈着、頭脳明晰。王家、王命や法律には忠実であり、理想的な政界の補佐役と言える。術使いも地道な鍛錬の結果、非常に洗練されており貴族達に引けをとらない。風の精霊は七大貴族ほど栄華を誇る訳でもなく日の精霊の下部精霊であるが、この国の宰相として王を補佐するのが、１０００年程前からの慣わしだ。実は英雄ゼフィロスの活躍に由来する。国中が震撼する陰謀を企てた闇の精霊を見事払拭したゼフィロス。それまでは光の精霊が王座にある時は宰相は闇の精霊、闇の精霊が王座にある時は宰相は光の精霊というのが例外があれど習慣になっていた。

だがゼフィロスの活躍以降、都はアクロピアに移され王族は代々光の精霊、宰相はそのゼフィロスが晩年務めて依頼風の精霊が就任するようになった。

ボレアースは代々の宰相の中でも優れた宰相であり民衆の間での人気も高いが、ラクスは幼い時分からどうも彼が苦手だった。理由は分からないが、それは唯一ラクスが畏怖を感じる者であるからか

もしれない。

レニタスが温厚で柔和なイメージを周囲に与えるのに対し、ボレアースはその生真面目さと厳格さのせいか威圧的なオーラを纏っている。民衆からすれば、いかにも「お偉いさん」と認識でき良いのかもしれないが、彼と接する時は緊張まではしなくともどこか落ち着かず、この世界で一番敵にまわしたくない者だ。

そのボレアースが何事か国王に耳元で囁き、ようやく国王は続いた沈黙の中で口を開いた。

「本日は誠に申し訳なかった」

開口一番、国王らしからぬ謝罪。どこか項垂れた様子で国王は話を続ける。

「わしも年をとったのだろう。結界が張り巡らせているはずのこの王宮にダークリットが多数入り込むとはわしの術が衰えたせいだ。だがわしは何も言い訳をしにこの場にそなた達を呼んだのではない。時が来たことを悟ったのだ。提案がある」

国王の語調は話が続くにつれ、ハキハキとした意志の強さを感じさせる者になっていった。

「次期王位継承者を決める選考を行いたい」

ああ、これはもめるな。イルミネ貴妃を筆頭に、とラクスは人ごとの様にその言葉を聞いていた。

「なっ……」

?:数秒の間、絶句するイルミネ貴妃。王座の向かい側に座っている彼女は、長テーブルを挟んで国王をまるで頬をひっぱ叩かれたような表情で凝視していた。

?:間に驚きよりも気まずい沈黙が流れる。

?:やがてガタっという音と共にイルミネ貴妃が立ち上がった。同時にラクスは天井を仰ぐ。難航することなく、スムーズに会議が進むかもしれないという淡い期待はあっけなく消え去った。

?:今日はなんて嫌なことばかりある日なのだろう。

?:ラクスは目の端で隣に座るウーヌムが膝の上で両拳を強く握りしめるのを捉えた。

?:そうか、コイツにとっても重大なことなのか。オウイケイショウは……。

さて、イルミネ貴妃は予想を尽く裏切らず、国王に向かって喚き出した。貴族の手前、罵倒などの失言はかろうじて抑えてあるものの、凄い剣幕でまくしてたてる。機嫌を損ねていた彼女は、今や怒り狂っていた。全身で。時々エナジーを感情的に爆発させながら。

?:高価な花瓶が爆発するように割れ、部屋の気温が上昇したかと思うと、眩い光が現れては焦げ臭い匂いが漂う。

一方、頭首たちは、会議中であるという事実に微塵も気後れすることなく、専ら自分の身を守ることを第一の優先事項に据える。

?イグニフェルは「おっかねぇ！」と声に出して怯え、マレとゲントゥムは動揺は見せないもののちゃっかり水の盾、月の光の盾で自分自身を防護している。

?ルチアはイルミネ貴妃を宥めようと時々口を開くが、貴妃は聞いていないどころか彼女自身の声でそれを掻き消す。アウルムは椅子を前後にゆらゆら揺らしながら、天井の中央に掲げてある羽の形をしたシャンデリアをbぼんやりと眺め、アルボア、ソラだけは微動だにせず、だが口も挟もうとせず我関せずの態度を一貫していた。

またラクスは、眉根を寄せているだけかと思いきや、風の術でゼフィロスの肖像画を守っているボレアースにも気づく。王宮の調度品の中でも価値が高いものなので、毀損は免れたいに違いない。

?イルミネ貴妃はまず、ウーヌムが現在「第一王子」のステータスをもっていること、それを差し置いて第二王子が王座につくなど民が不審に思うかもしれないということを主張し、確かに王位継承の選考はかつて行われていたが、もはや時代遅れであり、また危険が伴う野蛮なものであることを喚き立てた。

?真向かいに座る国王は全て予想通りだったらしく、眉一つ動かさずイルミネを見つめている。

?ウーヌムはさすがに罰が悪く思ったらしく、「母上！」と暴走している貴妃を牽制しようとするも、完全に無視されて失敗。

?結局長々と彼女の抗議が続く。その後息切れのように肩を揺らしながら声をとぎらせら時、国王はそのチャンスを逃さず口を開いた。

「わしが王位継承者選考を行うと決めたのは、ダークリットの影響が大きい。この不安定な時期とあってはより優れた者が王座につくことが重要である。国民を統率力がある者。群衆を一つにまとめ、臆することなく忍び寄る危機に対峙できる者。それに第二王子が王座に着くということは歴史を鑑みれば、全く不思議なことではあらぬ」

「ですが、父上……」

?そこでラクスは初めて口を挟む。イルミネ貴妃が再び抗議を始める前に。

「僕は……王座につくことを望んでいません。能力的にもウーヌムの方が優れておりますし、王位継承者として相応しいでしょう」

?至って簡潔に述べたが、これがラクスの率直な本心であった。王位継承など興味がない。自分はあの洋館で静かに暮らせていければ、それでいい。

「陛下お聞きになりました!?」

?イルミネが我が意を得たとばかりに、奮起する。

「彼の言う通りですし、王の座につく意図のない者が国王になるの

に適してるとお思いですか?!」

?イルミネ貴妃とラクスの意見が初めて合った記念すべき瞬間だった。

?国王はと言うと思慮深げにラクスを見つめていた。ラクスもまっすぐにその目を見つめ返す。ラクスの母親が生きていた時のようにはもう輝かないその瞳を。

?国王は深く故オルビス王妃を愛していたーー。

「イルミネ、王位継承は身内の問題ではない。国全体の問題だ。故に頭首達の意見を是非とも聞きたいと思う」

?国王の言葉で、完全に外野に回っていた頭首達の意識が戻ってくる。

「選考には賛成ですな。もともとは選考を行うのが当たり前だった。ここ数代にかけて選考が行われなかったのは、たまたま候補者が複数いなかったからにすぎません」

?ゲントゥムがイルミネ貴妃の睨みに臆することなく述べる。ルチアは「そうですな…」と頷き、同意を示した。

?他の頭首も選考には賛成だった。最後にソラが「私も陛下のご意見を支持します」と述べた時、イルミネ貴妃は黙っていられず口を開いた。

「ソラ!あなたまで何を……」

?そういえば、とラクスは思い出した。血縁ではないが、イルミネ貴妃とソラは昔からの顔なじみである。イルミネ貴妃は日の精霊であり、彼女の父は先代頭首であった。ソラの父及びソラ自身は先代頭首の弟子であり、一人娘のイルミネが貴妃として王宮に上がると、能力が卓越していたソラが頭首の後継者に選ばれたのだ。

?だが二人は親しい関係にある訳でなく、名前を呼ばれソラが眉を顰めたところを見ると、イルミネの暴走をソラが迷惑に思っているのは明らかだった。

?ラクスは複雑な思いで自分の意思とは別の方向に進んだ、その場を眺める。王位継承争いなど全く興味がなかっただけに、イマイチぴんとこない。だが頭首が全員それに賛成したならば、それは開催されるのが殆んど決定したようなものだ。

?浮かない顔をしているラクスに国王は最後、皆の前で声をかけた。

「オルビスが生きていたのなら、間違いなく王位継承を目指し選考に出ることを望んだであえあろう。オルビスはお前を誰よりも信じていたのだからな」

?国王としてというよりは父親としての言葉に、ラクスは昔を思い出し、懐かしさと同時にチクリと胸を刺される様な痛みを覚える。

?一方イルミネ貴妃はこの言葉に、悪あがきの様に時々すすり泣きながら、嘆き始めた。

「陛下は結局、王妃とその御子息のことしか頭にないのですわ。いつもいつも私と可哀想なウーヌムはーー」

?再び始まったイルミネ貴妃の訴えに急速に頭首達の意識が外野に戻って行くのをラクスは感じた。

?ウーヌムは歯止めが効かなくなった母親に、顔を赤らめ俯いている。ラクスは彼に同情を覚えた。

?長い訴えの後、ほとんど主張が泣き言に変わり、イルミネ貴妃がテーブルに顔を突っ伏して咽び泣き始めた時、見計らっていた国王は伝統的な王位継承者選考の概要を淡々と説明し始めた。

回りだした歯車

王位継承者選考についての国王の説明は、以前ラクスが王宮図書館で目を通した本に書いてあった内容とほとんど変わらなかった。あくまでも伝統的な選考方法を数代ぶりに復活させるらしい。

王位。国王の低い、途切れることのない説明を聞きながらラクスは目を閉じた。今まで、まともに考えたことがなかった。興味がなかったのだ。異母兄のウーヌムの母、イルミネ貴妃がどうしてそこまで王座に執着するのかラクスには理解できない。

王位がその地位から、富や名声を弄び楽しく愉快な人生を保証してくれるとでも思っているのだろうか。現国王を見ていれば、現実はそうではないことが一目瞭然だろうに。特に最近、体調も芳しくなく解決の兆しを全くみせないダークリット問題に多大な心労を抱えている国王を、宰相、側近らが気を揉んでいるのは知っている。つまるところ、国王はもう若くない。

ましてや、ウーヌム張本人。先程から顔色一つ変えないが、内心では何を思っているのだろう。

そこで、ふと一つの疑問が浮かび上がる。ラクスは微かに眉根をよせた。

最後にまともにウーヌムと言葉を交わしたのはいつだろう？

王宮内にウーヌムとラクスが仲が悪いという噂が流れているのは知っている。噂どころかもはや周知の事実のように飛び交っているそれは、真なのか偽なのかラクス自身も分からない。

けんかをすること、意見が対立することが仲が悪いというのならば、数えられるほどにしか言葉を交わしたことのないウーヌムとラクスは仲が悪いのではなく、仲が良いということになるのだろうか？

もちろん、答えは否だろう。窓の外、すぐ傍でカシの木の枝がゆらゆらと風に揺れている。

大きなカシの木の下で柔らかに浴びる、木漏れ日。まだ少年にすぎなかったウーヌムと同じく幼かったラクス。まだオルビス王妃が生きていた頃。木の下で静かに本を読んでいたウーヌムにラクスはおずおずと近づいた。ウーヌムがラクスに気づき、そしてそっと微笑む。

風が吹いて、さわさわと枝が揺れて、ウーヌムが口を開く。ラクスはその言葉ににっこりして頷いた。

あれは現実だったのかそれとも夢だったのか分からない。現実だったとしても、15年以上の前のこと。あの時ウーヌムが何を言って、ラクスが何に頷いたのか思い出せない。ただ風に枝が揺れ、木漏れ日も揺れ、その下でウーヌムが優しく微笑んでいたことだけ、それだけが頭の片隅に残っている。

「とりあえず概要はこれくらいで、詳細はおって知らせる」

そこでようやく、国王はゆっくりと息をついた。同時に貴族達の顔を順に見回す。

「この国のためにも、お前達の協力を願う」

頭首達は、極めて珍しいことではあるが、その国王の言葉に誰もが真剣な面持ちでそれぞれ頷く。ラクスも国王、自分の父親の決意の固さはその声調、表情から十分感じられた。ただそこに、自分がどうやってこれから関わっていくのか、正直想像ができない。

ダークリットの謎の出現により穏やかでないこの治世に、新たに所謂(いわゆる)権力争いなるものが開始されるのだろうか？

会議の最後に、国王はラクスとウーヌムに顔を向けた。

「お前達は二人まで仲間として試練に連れ立つことができる。ただし制限がある。七大頭首、王宮に仕えるものは原則として選ぶことはできない。ここでもお前達の他人を見抜きよりよい人材を見方につける能力が試されるから、慎重に行うように」

ということは、表向きは王宮に仕えているレニタスも駄目ということか。自分が仲間候補から外された事にひどく落胆して不満顔をこちらに向けるイグニフェルの視線を受け流しながら、ラクスは小

さく舌打ちをした。

これはまた、のっけからやっかいだな。

「お前達の健闘を祈っている」

それを締めの言葉として、国王は口を閉じた。そして会議を閉じることを告げ即座に立ち上がると同時に、最後に未だテーブルに突っ伏したまま啜り泣きを続けているイルミネに一瞥を与える。それは不満顔でもまた不快感を表すものでもなく、哀れむ顔だ。

既に長年国王に連れ添っていたオルビス王妃に子がなかなかできず、国の安定にも国王が望まずも側室、貴妃として王宮にあげられたイルミネはもともとは悪い人柄ではない。ただ、彼女は幼すぎたのだ。オルビス王妃一筋であった国王の関心もほとんど向けられることなく、家族とは別離になり、王宮の厳しい仕来りに縛られ、自由さえも失う。

日の精霊の頭首の娘として、蝶よ花よと育てられてきた彼女にとって王宮の孤独な生活はつらいものであり、感情を抑えられず癇癪をおこしてしまうことも珍しいことではなかった。やがてウーヌムを身ごもり、出産し、彼女は満たされない自分の心を息子に惜しみない愛情を降り注ぐことによって満たそうとする。

彼女は、息子ウーヌムが立派な成人になった今でも、少女のままだった。哀れなことに、オルビス王妃を失い、もう若くはない齢になった国王は彼女を気にかけるほどの余裕がなかなかない。それゆえ、国王は彼女をあのように見るのだ。哀れむと同時に、どこか自

分自身も喉元を押さえられているかのように苦しそうな顔だ。

国王が部屋を後にし、宰相ボレアースがそれに続いた後、王座とは反対側の席の傍にある扉が開いた。その瞬間、イルミネ貴妃付の召使い二人が慌てふためいた様子で、急いで貴妃にかけよりなだめ始める。

それを合図に、頭首達は席を立ちそろそろと帰り支度を始めた。その中でラクスとウーヌムはまだ椅子に座り込んだまま、身動きせずにいた。ラクスはさしあたって自分がするべきこと、まずはこれからのことをもう一度再考する必要があるのは明らかだが、今日この次の瞬間に取るべき行動を思案していたのだ。だが同様に席を未だ立とうとしない隣に座るウーヌムが気になり、ちらりとその顔を見やる。

彼は召使に囲まれた母親を気にすることもなく、ただ窓の外をぼんやりと眺めていた。カシの木の向こうに見える空は、桃色に染まり、黒い鳥が二羽連れ立って飛んでいるのが見える。

「ラクス」

ラクスが席から立ち上がろうと腰を浮かせかけた時、ウーヌムが呟いた。依然として彼は体ごと窓の外の夕焼けに向けられている。ラクスは何も答えなかったが、次の言葉を身を固くして待った。

「いい機会だ……。これからの勝負、容赦するつもりはない。お前

もそのつもりで」

ウーヌムはそれっきり口を閉じた。

ラクスは何か言葉を返そうし口を開きかけたが、言葉が見つからずそのまま無言で立ち上がった。ウーヌムももはや何も言わない。

今までずっと目を逸らし続けた確執。ただ何事もなく、ウーヌムが王位を継承すればよいとずっと思っていた。小さい息を吐く。

召使いの必死の宥めにより落ち着きを少しずつ取り戻してきたイルミネを最後ちらりと見やり、ラクスはゼフィロスの間を後にした。

回りだした歯車　2

――殺せ。あいつらを全員、殺るんだ！

ユメは魘されていた。男の声が依然として頭の中に居座り、ユメに命令し続ける。

――あいつらがもがき苦しむ姿を見らねばならん

嫌だ嫌だ嫌だ。響き続ける声に、金縛りにあって動かない体。それでも抵抗し続ける。何も見えない闇の中で底なし沼で溺れているかのようにユメはもがき続けた。首を絞められているかのように、苦しい。ぴくりとも動かせない体の中で、混濁とした意識が必死に抵抗をし続ける。

もがき続けて、どれほどの時間がたっただろうか。逆らう力を少しずつ弱めながら、ユメは疲労、そして絶望を覚えた。一方で意識の一部が果敢に甲高い声をあげる。

――あきらめてはダメよ！　闇の声に乗っ取られてはダメ！　なんとしても追い払うのよ！

未だ激しく抵抗を見せるその少女の声はやがて大人の女性の声に変わっていく。紫の洞窟で聞いた声、セレーネのものだ。

闇の中で、セレーネがユメに呼びかけた。

――ディアナ。目を開けなさい

目が覚めると、そこは見知らぬ部屋だった。この手のパターンは精霊界に来て慣れっこになっていたユメは特に取り乱すこともなく、ゆっくりと上体を起こした。無意識に手で前髪を撫で付けると同時に、そう時間はかからず気を失う前のことを思い出す。

左腕にはめられた金の腕輪を見て、ふっと出たため息に安堵が混じる。今は自分の体が完全に自分のものであることをしかと感じながら辺りを見回すと、予想通りダルフィムが視界に入る。彼女はベッドの真正面の壁にとってつけてある暖炉上の花瓶に生けられた花を手入れしていたが、こちらに背をむけているせいでユメが目を覚ましたことに気づいていない。

驚かさないように、ユメはそっと名前を呼んだ。一瞬ピクリと肩が動き、ダルフィムがこちらを振り返る。温かい微笑み。ユメはダルフィムのこの表情が好きだ。とても安心できる。

「お嬢様、目をお覚ましになられたのですね」

ユメがコクンと頷くと、ダルフィムが何か飲みたいものはあるかと聞いたので、紅茶を頼む。

「王宮の方に頼んできますね」

そう言葉を残してダルフィムが背中をユメに向けたのと同時に、ドアをノックする音が聞こえた。

「あら、きっとゲントゥム様ですわ。会議が終わったのでしょう」

ダルフィムが急いで走り寄ってドアを開けると、予想は的中してゲントゥムが無言で部屋に入り込んできた。珍しくはないがどこか不機嫌な顔をしているとユメが思いきや、続いて入ってきた人物にユメは目を見開いた。

ラクス。全く感情が読み取れないエメラルドグリーンの瞳が真っ直ぐにユメを見つめる。

「お前に話があるそうだ。大方内容は見当がつくがな」

何も言葉を発せずにいるユメに対し、ゲントゥムは唸るように言う。

「というと――」

視線をゲントゥムに移動させながら、ラクスは口を開いた。

「ゲントゥムさんはこれからの僕の提案に賛成してくれるのでしょうか。実践での訓練ほど鍛えられるものはない。ユ、ディアナさんにとっても絶好の機会だと思うのですが？」

ゲントゥムはユメに顔を向けたまましかめっ面をしていたが、観念でもしたかのようにため息をついた。

「ディアナが同意したら仕方ないですな。しかし、こちらにもやるべきことはある。同意が得られたとしても、それに差し障りがない程度にまでというのが条件になりますが、承諾してもらえますかな？」

もちろんです、とラクスがにこやかに答えた。ラクスとゲントゥムのやり取りをユメは交互にそれぞれの顔を見ながら、ほとんど内容を理解することなく見守っていたが、ラクスが再びユメの方に視線を戻したので、その刹那背筋をぴんと正した。

ラクスが何か言葉をユメに対して発する前に、私は退室させて頂くと断りゲントゥムがその場を後にし、私はお茶を用意してきますとそれまですっかり存在感を後ろで消して控えていたダルフィムがそのゲントゥムに続いた後、沈黙の中ラクスとユメは取り残された。

しばらく続いた無音の時は意外に気まずい風でもなく、ユメはやや緊張しているものの落ち着いてラクスを見つめ、ラクスも普段と変わりのない表情でユメを見返す。少なくとも彼は怒っていない。

「もう起きていても大丈夫なのか？」

ラクスは至って穏やかに問う。と同時に、近くにあったサイドテーブルの前にある椅子を掴み、ベッドの際に移動させそこに腰をかけた。腰をかけ再びユメに視線を戻すのを待って、伝わるようにユメは無言でラクスに頷いてみせる。

「一瞬にあれだけのエナジーを使用したんだ。無理もない。素直に無事でよかったと思うよ。今回も、そして前回の聖地でも。ただ目が覚めた時点で、君が僕に連絡をくれなかったのが残念なところだが・・・・・・。まぁ、僕もあれだけひどいことをやったんだ。それを考えれば当然か」

無言のユメにかまうことなく、思わずこちらが気詰まりを感じてしまうことも、ラクスは単調に淡々と話し続ける。真意が読めない自嘲。ユメに射抜くような視線を向けながらも、どこか遠くを見ていような青い瞳。変わらない。あの洋館でラクスに出会ったころ、ユメは直視するのも恥ずかしくいつも心持ち視線を斜め下に泳がせていた――。

「厚かましいことは重々承知だ。だが、どうしても引き受けてほしい頼みごとがある。君はまだ知らないと思うが――」

そして、初めて聞かされる王位継承者選考開催の話。ラクス、そして異母兄のウーヌムにっよる王位争奪。ここ数代は用いられていなかったが伝統的な選考方法に忠実に則ったもの。より実力、資質のあるもののみが勝ち取れる王座。その選考に挑むは二人の王子と、二人それぞれの仲間。

王位継承の話とラクスがユメに頼もうとしていることにはどんな関係があるのだろう。話の核心が見えずユメがその疑問を持った矢先に、ラクスはさらりとその答えを出した。あっさりと、いとも何でもない事のように。

「ユメ、力を貸してくれ。僕の仲間として一緒にこの王位継承争いに参加して欲しい」

回りだした歯車　3

牛乳のせいだ。ユメは口元に手をやりながら、思った。

美味しいクロワッサンがのった白い磁器のお皿の横にあった、グラス一杯の牛乳。あれを飲んでしまったからこんなにも気分が悪いのだ。牛乳はもともと嫌いではないが、好きでもない。いや、正確に答えるなら、ユメの嗜好の針はやや「嫌い」のほうに傾くだろう。

とにかく、今気分が悪いのは、あの牛乳を飲んだこと、そして平坦ではない山道に、吹き荒れる強風でいつもより大きく揺れる馬車のせいだ。

だから、間違っても、緊張のせいじゃない。だいたい何一つ緊張する要素なんてないのだ。王立シータ学院に入学なんて、人間界の学校に入学するわけでもあるまいし、なんでもないことだ。苦手な学級だって人間界とはかけ離れて違うはずだし、第一ユメは正規でその学院に入学するわけではない。特別短期履修生として、ちょっと顔を出す程度だ。

王立研究所付属である王国随一の名門王立シータ学院で一般的な精霊界のことを学び、月の精霊としての訓練は家庭教師をつけて月城で学ぶ。ゲントゥムは学院での勉強はあくまで基礎、そして家庭教師との訓練は応用だと言った。

基礎というからには基本的なことだけであり、学ぶのに取り立てて苦労することはきっとないに違いない。実技はともかく、理論や歴史の授業も多いと聞いた。もともと勉強は平均よりはできるほうだ。だから成績がひどすぎて悪目立ちしてしまうという可能性も少ないだろう。学院は広大な王宮の一角にあり、王立研究所付属とあ

って、教鞭をとる教師も図書館の蔵書量も王国一を誇る。静かに邪魔されず読書をしたり、勉強をしたりするのが好きなユメにとっては案外ぴったりのところかもしれない。お金とかの心配もせずに通えるのだから。しかもそれを奨励してくれる保護者の存在もあって。

必死に気分が悪い言い訳を考えるユメをあざ笑うかのように、場所の外で吹き荒れる風が唸る。なんだってこんな日に限って、こんなにも天気が悪いのだろう。ユメはため息をついた。

嫌なこと、不愉快なことをじんわりと耐えていくのは得意なほうだ。けれど、今まさにこのように、それらが到来するのを待つのは苦手だ。転ぶのを恐れて前進するよりは、さっさと転んでしまったほうがよい。

無意識に左の封印の腕輪に触れる。そこで今までの意識の外にあった、左手の甲に刻まれた焦げ茶色の魔法陣が目に入る。今朝、入学祝いとしてマルス、いや星の精霊達がユメに贈ってくれたものだ。

本来なら、マルスは今ユメに付き添って学院に連れ立っているはずだったが、何やら「急用」ができたらしく来れなくなった。もちろんゲントゥムの執事としての急務だが、その内容は一切ユメには知らされないものの、傍から見てるとまるで極秘任務にあたっているかのような隠密さ、それでいて何やら奥の深い重要さが感じられた。

ユメもその希少な月の精霊の一人としてあの月城に住んでいるのに、未だに城の事も身内の一族のこともさっぱりだ。城についてはは

自分の部屋とメインに使用しているダイニングルーム、ゲントゥムの書斎、その隣のマルスの執事室などようやく覚えることができたものの、その他の部屋についてはさっぱりだし、下手に一人で動くと迷子になってしまう。ただどうやら細く長く立っている東の塔（城と繋がっているが一度も足を踏み入れたことはない）と地下があることは掴めた。しかし日常の生活のうえでそれらの場所に足を踏み入れることもないし、また踏み入れたいとも思わない。城全体でさえ何だか複雑な怪しげな雰囲気が漂っているのに、不気味に立ちそびえる東の塔や薄暗い（であろう）地下などは、かかわるのはごめんだ。

世の中には、人間界だけでなく精霊界でさえ、見ないほうがいい、知らないほうがいいというものがあるはずだ。人間界で憂き目を見た経験が、ユメに絶え間なく警告をし続ける。

もちろん、空気を読んで、口にこそ出しはしないが。これ以上の厄介ごとはごめんだ。人間界でも厄介ごとには極力首を突っ込まない、それが自分の根幹ともいえるポリシーだったはずだ。それがこの精霊界に来てからというもの、いとも簡単に覆され始めている。

厄介ごと。そうだ、ただでさえあの謎めいた月城、謎めいた月の精霊という存在に取り巻かれるどころか、その中核の一部として属していることに気を揉んでしまっているのに、あの時ラクスに向かってつい頷いてしまった失態。それがユメの頭痛をひどくさせる。

今は考えまい。王位継承争いなど、厄介ごとがつきまとうどころの沙汰ではなく、厄介ごとそのものだ。ユメは馬車内で一人、髪についた何かを取り払うようにぶんぶんと頭を強く振った。今は新しく学院に入学するために王都へと向かっている道中だ。余計なこと

は極力考えないほうがいい。

とりあえず学院でうまくやっていくことに今日は集中しなければ。

左手の甲の小さな魔法陣をそっと撫でる。それに今は新しい友達がいる。マルスを含む星の精霊達がユメに贈ってくれたもの、それは思いがけなくとても嬉しいものだった。胃が痛く吐きそうな気分の悪さの中でも、その魔法陣はユメの胸を小躍りさせる。

グリちゃん。そう名付けた。グリフォンだからグリちゃん。我ながら単純な命名だが、可愛いからよしとすることにした。

術継承。今朝、新たに学んだ精霊界特有の言葉。

ある者または複数の者達によって作り出されたエナジーはその彼または彼等に「帰属する」らしい。そして、放出された後に一定の間継続する術、召還の術などは術を繰り出したものの所有エナジーが減少したりまたは死亡したりすると影響を受け消滅してしまう。

しかし、術継承は術が帰属するところの者、つまり術所有者（オーナー）を変更できる。

――ディアナ様に呼応しあの金色の炎を放ったということは、ディアナ様の思いや願いがこのグリフォンに通じた証。さぞかし、相性がよいのでしょう。

マルスはそう言いながら、円を描くようにユメの左手の甲をなぞり、小さな魔法陣を刻み付けた。腕輪をはずし、右手を左手の甲に重ね、マルスについて唱える。

星の導きよ。金翼の王者を誘い、我、主(あるじ)のもとに姿を現せ。

重々しい文言とは裏腹に眠そうな顔をして金色の輪から現れたグリフォンは２m以上もある大きさだったが、まるで幼い子供のようにゆっくりとあくびをした。

自然に笑みがこぼれユメが手を伸ばすと、「撫でて！　撫でて！」と言わんばかりの人懐っこさで手が届く高さに頭を下げ、いざ手が頭に触れると気持ちよさそうに目を閉じる。

グリちゃん。

ユメはこの「入学祝い」が心底気に入った。まるで弟ができたみたいに、舞い踊ってしまうくらい嬉しい。用心棒としての実力も、十分あの王宮で実証済みだ。

それに。

と、ユメは馬車の窓にコツンと額をくっつけながら思う。例えば学院の休み時間とかに一人になってしまったとき。もう人間界にいた時みたいな孤独は味わなくてすむ。寂しい時はいつでもグリちゃんを呼び出せばいいのだから。

ユメはもう一度そっと右手で左手の甲を撫でた。

悪目立ちの新入生

約束の朝８時よりちょうど１５分前に馬車はアクロピアの王宮前でぴたりと停止した。ユメは深呼吸をし、心の中で自分に「大丈夫」と言い聞かせると、馬車を降りた。ひんやりとした朝の空気。まだ早いせいだろうか。以前訪れた時よりも人通りは少なく、それでいて何かが始まろうとしているような蠢く緊張感が漂っている。

ユメは一度王宮を睨みつけるように見据えると、迷うことなく正門の方へ（いつも通り衛兵が二人、きりっとした姿勢でたっている。その視線が泳ぐことはない。）歩き出した。正門のところでマルスの代わりに学院へ誘導してくれるものと、ここで落ち合うことになっている。

「ディアナ・クレセント様ですね？」

衛兵の前に立ったところで、ようやく衛兵の視線はまともにユメに向けられた。ユメが無言で頷くと、衛兵の一人は人一人が通れるほどだけ門をガラっと開けた。

「――様が、既にお待ちです」

その者の名前を聞きユメが混乱するのと、その厄介ごとの塊が姿を現すのはほぼ同時だった。ユメはその顔を見て絶句するが、彼は

いつもの余裕の笑みを浮かべていた。予想もしないところで突然登場されては、抗いようがなく面食らってしまう。

「どうしてラクスが…・・・？」

「ゲントゥムから聞いてなかったのか？　大切なパートナーの一大事のためにわざわざ駆けつけたんだが、その顔からすると全く歓迎してない様子だな」

当然じゃない。ユメは内心で悪態をつく。こんなにも緊張する入学初日に、失敗が絶対許されない今後の学院生活での運命を分けるこの大事な日に、厄介ごとの塊に来られては困る。しかも第二王子が新入生を誘導なんてどう考えても注目の的ではないのか。いや、それとも王宮内にある学院とあって、生徒達は王族などすっかり見慣れていると？

予想だにしなかった緊急事態に狼狽するユメをかまうことなくラクスは涼しい顔で、もうすぐレニタスがここに迎えにくる、とユメに告げる。

今朝から感じていた小石で突かれているような頭痛が、今この場についてから気のせいではなくはっきりと、大きい石でガンガン殴られているように感じられる。ふと、横をみると衛兵達はもとの姿勢、もとの視線に戻り、ユメやラクスなどがもう全く目に入らない

かのように振舞っている。

「レニタスが迎えに来るって、どういうこと？　どうして私達だけで今学院に向かうことができないの？」

「君がどうしても歩きたいと言うのなら、僕もかまわない。まぁ、３０分以上は歩かないといけないな」

ラクスとひたすら３０分、やきもきしながら歩くことを想像し、ユメはそのまま閉口した。今は一刻も早くラクスから離れたい。思えばいつも災いはこの目の前に立っている少年からやってきた・・・・・。

「レニタスの王宮内馬車はそんなに待たずとも、すぐここへ来るはずだ」

「王宮内馬車？」

「王宮内が広いからね。移動のために外と同じように馬車を使っているんだ

「それなら、どうして普段は馬車のままこの王宮内に入ることを禁じているの？　王宮内でも馬車を使うなら別に――」

「セキュリティのためさ」

ラクスがレニタスの姿がないかとちらっと後を振り返りながら、事も無げに答える。

「王宮内で使ってる馬車はちょっとだけ一般に使用されているものとは違うんだ。まず屋根と囲いが無い。誰が乗っているのか一目瞭然にするためだ。また乗車の際、行き先を告げないといけない。行き先によって馬車の色が変わる。同じ目的地に向かう他の者が、容易に相乗りできるようにだ。例えば学院行きだと、ああいうオレンジ色だ」

ラクスは振り返らなかったが、自分の肩越しに親指でくいっと後を示した。そこにはまさに今説明にあった屋根・囲いなしのオレンジ色の馬車（もはやほとんど荷車と違わないが、座り心地のよさそうな椅子がとってつけてある）があり、こっちに向かってきている。にこやかな微笑を浮かべ馬車に乗っているのは、言うまでもなくレニタスだ。

「馬車に乗る前に少し忠告しておこう。さっきも言ったように王宮内で使用が許されているのは、王宮内用の馬車のみ。くれぐれも自家用馬車で中に入ってこないように。もしそのまま入ってきたら、次の瞬間には馬車は消える」

ユメが眉を顰めると、ラクスは付け足した。

「中が見えない馬車は問答無用に、衛兵達の集中攻撃対象だ」

「ユメさん、ご機嫌いかがですか？」

ユメは少し緊張をほぐし、レニタスに向かって微笑んだ。いろいろと変わってしまったあとでも、どこかにこやかな笑み、落ち着いた声は何の変化も無い。

すーっと何かにひかれるように進む馬なし馬車、いや荷車。本城の横にあるレンガの道を快適な速度で行く。ときたますれ違う、違う色の馬車、青、赤、紫。ラクスとユメはレニタスの座る椅子の向かい側に備え付けられた椅子に座った。

「前々から思っていましたが、やはりディアナ様はすごいですね」

レニタスのいきなりの切り出しに、当然ユメは目を丸くする。

「すごい？」

はい、とレニタスが頷く。

「目まぐるしく変わる環境の変化に、抵抗なく受け入れていらっしゃる。さすがはゲントゥム様の孫娘様といったところでしょうか」

環境の変化。

受け入れる。

違う、とユメは口にこそ出しはしなかったが、心の中で否定した。

違う。受け入れられたのではない。ただ途方に暮れて受け流しただけだ。受け流して、目をつぶってるだけなのだ。力が無い自分にできる精一杯の抵抗なのだから。

本城の建っている小高い丘をくだると、そこは広い広い庭園が広がっていた。等間隔にたっている像やオブジェ。ラビリンスに、大理石でできた噴水。広大な庭園を輪郭どる森林たち。

「あれが、王立学院だ！　王立研究所と一続きになっている」

ラクスが指差したのは、本城に対峙するように庭園を挟んで聳え立つ・・・・・これまた大きな城。本城よりも高く盛り上がった丘の上に立てられているためか、どこか神々しさを感じる。

「高く聳え立つように立てられているのは、学問の美徳がこの国にとって最も重宝されるべき権威であることを示すためです」

学院を見上げながら説明をするレニタスの顔はどこか誇らしげだった。

「誰もがそう簡単に入学できる学院ではない。君は極めてラッキーだよ、ユメ」

ラクスが隣でつぶやくように言ったが、学院の堂々たる存在感にある種の畏怖を感じたユメは緊張で高鳴る胸をどうにか宥めようとするのに精一杯で耳には入らなかった。

悪目立ちの新入生　2

広々としたホール。壁際に等間隔に置かれた虚像。ホールの中央にはキューブ型のガラスが置かれてあり、中に不思議な陶器でできた青いマスクが置かれている。その奇妙なオブジェをぼんやりと眺めていると、カツカツと足音が聞こえてきた。

中庭は四方をガラスで囲まれており、つまり中庭挟んで向こう側の廊下や折れ曲がって続くところは、この玄関ホールから十分に見ることができる。

ラクスと白銀の長い髪を腰までたらした長身の男が、こちらに向かって歩いてくる。男は一本の羽のついた深緑の帽子を被っている。

ユメは無意識に眉をひそめた。ラクスは校長を呼んでくると言ったが、まさかあれが校長だと言うのだろうか。その姿からは、あまりにも似つかわしくない……。人間界での小中高、校長といえばたいてい年季の入った老人であり、高確率でその毛髪は苦労が多いせいか乏しかった。だからまさかあんなにも豊かに腰まで髪を伸ばしている男が校長などと、ユメが予期できるはずもないのだ。

「お待たせしました、ディアナ・クレセント君。私がこの学院の校長を務めているリートゥス・リザレクションです」

校長はその艶やかな長髪がよく似合う美形で、美男子であるラクスにも全く見劣りしない。ただ年齢は３０前後に見えた。人間と精霊の寿命や老け方は異なっているから、実際の年齢は全く検討はつかないが。一瞬ユメはその顔と白銀の髪に見とれたが、はっとなると急いで深くお辞儀をした。

「今日からお世話になります、ディアナ・クレセントです。よ、よろしくお願いします」

「これはこれは、貴族の中でも名高い良家のお嬢様とあって、奢り高ぶるところか少しも見られない。見事。もっとも」

微笑をわずかに浮かべ、校長が付け加える。

「この学院では、身分は一切関係ない世界。ただ一心に知の探求に勤しんでもらうのが、根本の原則となっているのでご了承もらいたい」

ここは一流の家柄の子供達が集まる学院。そういう規則があって、学や秩序を妨げないようにしているのは理解できる。しかし。

ユメは口に出さずとも。「はい」と返事しながら苦笑する。

自分に限っては心配無用。高貴な家柄出身という自覚なんて全く無いのだから。今でもユメは人間界の孤児院出身のクラスの片隅にいる冴えない女の子だ。

長くて薄地のマントのような黒いコート。校長はそのポケットから青銀色の縁でかたどられた懐中時計を取り出し時間を確認した。

「今1限目の授業が行われていますが、それもあと5分で終わる。そうすれば、ここにディアナ君の編入するクラス学級委員長と君の世話係を当分担うチューターがここに来てくれることになっている。それまで簡単にこの学院の授業の仕組みについて説明をしておこう。おっとその前に」

校長がラクスに顔を向ける。

「ラクス君はこれからどうするのかな？　もう帰路につかれるか？」

ユメは驚いた。校長ははっきりとラクスのことを「ラクス君」と呼んだ。第二王子であり今や王位継承者候補の一人を。

ラクスは至極普通に、それに反応する。どうやら、いつものことであるらしい。

「いや、校長先生、僕はこれで失礼することにします。懐かしい母校こうも早く立ち去るのは名残り惜しいですが、やらなければならないことも積もっているので」

「そうか・・・・・・。まぁ、授業の終わりのチャイムが鳴る前に君は帰ったほうがいい。私の可愛い女子生徒たちが君を取り囲んで離さなくなってしまうかもしれないからね。とにかく、今日は久しぶりに会えて嬉しかったよ。何、またいつでも時間ができたら訪れてくれ。幸い君は誰よりも学院に最も近いところに住んでいるのだ

から」

「恐れ入ります」

「何度も言うが、君は後にも先にも私の誇れる非常に優秀な生徒の一人だ。これからいろいろとあると思うが、学への探求、そして奢らず謙遜でいることを忘れず、精一杯頑張ってくれ」

ラクスを見下ろすその表情は、横から見ても優しげだった。ラクスは間違いなく彼のお気に入りの生徒だったのだろう。

「ありがとうございます。それではこれにて、失礼します」

最後にラクスは視線をユメに移す。

「それじゃ、健闘を祈る。また放課後に」

さっき急に取り付けられた約束を、不満ながらもユメは無言で頷いて承諾する。仕方が無い。厄介ごとそのものだが、彼には王座がかかっている重大事項なのだから。

もっとも自分が役にたつとは思えないが。

ラクスがホールから姿を消すと、校長は端的に学院の制度について説明を始めた。

＊　　＊　　＊

この学園に所属する生徒は最年少で5歳、最年長で28歳までいるらしい。人間界でいうところの幼稚園、小学校、高校、大学、大学院等を全てかねているといったところか。

授業の履修は単位制であり、取得単位数より、初級学士、中級学士、上級学士の称号が得られるとか。上級学士まで得たものは通常、卒業となるが更なる知の探求を目指すものは学院に残り、初級修士、中級修士、上級修士、そして険しい道ではあるが　初級博士、中級博士、上級博士までの称号がが得られる。

しかし、これは正規課程の話。ユメは短期履修生として、初級学士、中級学士、上級学士を短期で取得することを目指す。正規課程と違って、短期履修生はあらかじめ決められた授業を履修をしなければならず、つまり授業科目を選択することができない。またそれぞれの高得点を得て単位をとらなければ、短期といえど、上級学士はそうそう簡単にはもらえない。いわゆる秀才であれば、最短で1年かからず卒業できるが、定められた科目を基準を満たす高得点で全て修めるまでは卒業とはならない。

「そうそう、授業とは別に大事なことが」

授業の説明後、校長が思い出したように付け加えた話は、クラス制度の話。朝とお昼、そして任意で放課後、生徒は各自、自分の属するクラスに割り当てられた教室にいくことが義務づけられている。クラスは取得している学位とは関係なく、同じ年代の生徒達でまとめられる。そこで行われるのはいわゆるホームルーム。そして共同生活の訓練。

「あなたのクラスは7A。直にそのクラス委員長がここへ来てくれる手はずになっている。おや、その前　に」

校長がふと何かに気づき、視線をユメの背後にそらした。つられて、ユメが振り返ると。

「フローラ！？」

「我が院の生徒会長がまず来てくれたみたいだ」

驚いて目を見張っているユメにかまわず、フローラはにっこり微笑んで校長にお辞儀をする。

「私の大事な友人ですので、心配で」

フローラから漂うふわりとした甘い香りと「大事な友人」という言葉に、じんわりと緊張がほぐれ温かくなる。

フローラと月城に移り住んで初めて直に話すが、変わらず友人と思ってくれていることに感謝の気持ちがこみあげる。

「そうか。それなら、ディアナ君も心強いだろう。さて君のクラスの委員長が訪れるまで待って、私はお暇することとしよう」

「あら、校長先生。もう待つには及びませんわ」

今度は、校長の背後から芯の通ったはっきりとした声。校長が振り返りその姿を目にとめる。

「おお、フェーナ君。よく来てくれた」

燃えるような紅の髪に、薄いピンク色の大きなリボン。気の強そうな大きな瞳。どこか済ました表情で立つ目の前の少女に、ユメは微かに首をかしげる。

この子、どこかで見覚えがある。だがどこで見たのか、はっきり

思い出すには至らなかった。

「あなたが噂のディアナ・クレセントね。まぁ初めて見るわけではないけど、こんなに近くで見たのは初めてかしら？　私は７Ａのクラス委員長、フェーナ・サンロング。以後お見知りおきを」

息をつくまもなくつらつらと話す少女に、ユメはどう反応していいか分からず、とりあえず小さく頭を下げる。

「それでは、後のことはお二人にお任せしていいかな？　ディアナ君もこの二人がいればもう心配要らないよ」

「あ、ありがとうございました」

慌ててお辞儀をすると、校長はユメにコクリと頷いて優雅に髪を揺らしながら、その場を去った。

校長の後姿が見えなくなると同時に、フェーナは口を開いた。

「生徒会長、せっかくですけど、ここは私一人で十分かと。生徒会長もお忙しいでしょうし、ここはどうぞ、私に任せてください」

その声にはどこか棘があった。ユメは対するフローラが微かに眉を顰めるのを見た。フローラでもこのような表情をみせるのだと、ユメは内心驚く。

「お気遣いありがとう。でも私はユ、ディアナの友人としてここへ来てるの。いろいろと心配だから、学級にいくまで見届けようと思うわ」

「そうですか」

フィーナはあっさりと引き下がったが、同時に体ごと向きをフローラからそらした。

「それでは、ディアナ。ディアナって呼んで差し支えありませんね？　私のことはフェーナでかまいませんので」

ユメはコクリと頷く。

「クラスに急いで向かいましょう。今のランチの時間にクラスの生徒が集まるので、その時にあなたを紹介しますわ」

そう言うなり、フェーナは速い歩調でつかつかと廊下を進み始めた。ユメが困惑してフローラを振り返ると、フローラは苦笑しながらそれでも後についていくように身振りで示した。紅の揺れる髪を凝視して歩きながら、ユメは嘆息する。彼女のような気の強いタイプは苦手だった。嫌いではないのだが、フェーナの言葉には元来そういう性分なのかもしれないが、発せられる言葉にどこか敵意をが含まれているように感じられる。

思い過ごしの可能性もあるけどね、もちろん。ユメは自分を諭しながら、視線をそらした。授業が終わり生徒達の声が辺りで溢れ出

している。耳に入ってくる周りの喧噪にユメは懐かしさを覚えた。人間界で通っていた学校も、お昼休みはこうだった。好きではなかったけれど、自分の生活の一部、日常だったのだ。

似てるようで遠い。交わることのない別世界。廊下に等間隔におかれている胸像の視線に居心地の悪さを感じる。長く続く廊下。ユメは嘆息した。

私は、ずいぶん遠いところまで来た。

悪目立ちの新入生　3

西洋式で建築様式は違うものの、そこは見まごうことなく「教室」だった。木製の5，6人がけと思われる横長、机と椅子。アラベスクのような模様がそれぞれの縁に彫られている。一列6つ縦に並べられたものが、2列ある。年季が入っているみたいだが、学院に備えたられている備品一つ一つが相当のお値打ち物だというものが素人目でも分かる。

同じアラベスク模様が彫られた教卓が置かれた、教壇。４０人くらいの生徒を目の前に、ユメはフローラとフェーナに誘導されるまま、緊張して突っ立っていた。多くの好奇心の目。逃げたい、或いは教卓の前で伏せて隠れたくなる衝動を、拳に力をいれて必死に堪える。

「新入生。皆さんが既に知っての通り、ディアナ・クレセント。短期履修生としてうちのクラスに配属です」

フェーナによるユメの紹介は至って簡潔だった。よろしくお願いします、と消え入りそうな声と共にユメがお辞儀をする。だがそれだけでも、教壇を見上げる生徒達にはインパクトは十分であったらしい。教室に足を踏み入れた瞬間訪れた静寂が、針でつつかれ破裂するかのように一斉に生徒たちがざわつき始める。

「来るの今日だったのね、例の月の精霊の・・・・・・」

「おい、フローラ生徒会長がわざわざ来てんぞ。たいそうなご身分

だな」

教室中で飛び交う囁き声。転校生紹介にはもはやお決まりなのだろうか。一部の女子はユメよりもその隣のフローラに目を向ける。

「きゃー、フローラ生徒会長だわ！　どうにかしてお知り合いになれないかしら？」

「あの子ずるい。当たり前みたいにフェーナと生徒会長にお世話されて」

多少は予想してたが、やはり国王誕生際の出来事の衝撃は、この学院の生徒達にとっても例に漏れず大きなものだったらしい。憶測や噂があの日からどれほど流れたのだろう？

「なんだっけ、行方不明までいなかったんだよね？　この世界のこと全然知らないんでしょ？」

「フェーナの手前、身分をわきまえてるのかしら？」

「さぁ、注目されているからって図に乗ってるかもよ」

「思ったよりもちょっと暗そう？」

本人の意思とは関係なく漏れなく耳に届くひそひそ話達に、ユメは嘆息を漏らした。こうなるのが自然なのだから仕方が無いのだろう。

「短期履修入学とは結構なことだが、ＶＩＰ待遇されんなら迷惑だな」

「いいじゃねぇか。なんたってつい最近まで発狂かなんかしてて意識がなかったんだろう？」

「え！？　そうだったの？　でも、あ――」

ユメの横であからさまな咳払いが聞こえた。興奮した面持ちで話をしていた生徒達が、フローラのそれにふっつりと声を途切らせる。

ユメは生徒達の視線にどこか尊敬、いや恐れのような色が浮かぶのを見た。ただ一人、ユメの横に立って教室の窓の外をツンとした表情で眺めているフェーナを除いて。

「ディアナは私の大事な友人です。だからディアナがこの学院に慣れないうちは、身の回りの手助けをどうかよろしくお願いします。これは私からのお願いです」

彼女の透き通る声はその場の空気だけでなく、生徒達の態度にも劇的な変化を与えた。恐々とフローラを見上げる者、はっとして口をつぐみ俯く者、うっとりとした表情で見つめる者、悔しそうにユメを睨む者。どうやらこの学院でのフローラの立ち位置はどうやらすごいものらしい。学院に通っているというだけでサプライズなのに、まさかこのような生徒会長の立場にあるとは。

「終わりましたか？」

空気が更に張り詰める。フィーナは面白くなさそうな顔を隠そうともせず、フローラに問うた。

「私、昼食まだですので、よろしければ紹介はこのへんで終わりにしたいのですけど。フローラ生徒会長、まだおっしゃりたいことは

ありますか？」

「ちょ、ちょっと、フェーナ・・・・・・」

フェーナが立っている前の席に座っている、おさげで眼鏡をかけた気の弱そうな女の子が小声でフェーナを咎めるように言う。

それには全く反応せず、ツンとした表情をユメとフローラに向けるフェーナ。恐々とユメがフローラを見やると、フローラも不快感を露にフェーナを睨みつけていた。普段のフローラからは想像できない、だからこそ余計に怖い表情。二人の間の今や疑いようのない不穏な空気に冷や汗が思わず出るユメだったが、どうやらそれはユメのみではなかったらしい。

ぴんと張り詰めた空気に、多くの生徒が息を呑む。それを先にはじいて揺るがしたのは、フェーナだ。

「私は何かを装ったり、隠したり、ましてや回りくどいことをするのが大嫌いです。だからこの際、はっきりと言っておきましょう。国王様も公示を既になされました。もう公言しても差し支えないでしょう」

「さすがにやばいって、フェーナ！」

眼鏡の女の子が慌てふためいて立ち上がった。フェーナが言わんとしているしていることを察したらしいが、その焦りぶりするとそれが相当まずいことが予想できる。

しかし当のフェーナは一向に構うことなく、刺すような視線と共にフローラ、そしてユメの方に体ごと向き直った。

「私、フェーナ・サンロング。日の精霊の長家として、長の妹として、その誇りにかけて、ウーヌム様を玉座へと導きます。ゆえに、ラクス様の婚約者であられるフローラ生徒会長、そして――」

フェーナが人差し指をユメに向ける。

「そして、あなた、ディアナ・クレセント。私の情報網では今回ラクス様のサポート役に抜擢されたとか。つまり私と同じ立ち位置」

教室中で息を呑む音が聞こえる。ユメはラクスとのパートナーの事実が既に知られていたことに、度肝を抜く。そして、そこでようやくユメはふっと思い出した。このフェーナ、どこかで見覚えあると思っていたが、あの場で目にしていたのだ。国王誕生際で日の精霊の長、ソラの隣に座っていた少女。

「あえて公言します。負けませんわ。私は――」

「フェーナ」

フェーナに思わず凍てついてしまいそうなほど冷たい横槍が、それまでじっと黙っていたフローラによって入れられる。思わずびくっと肩を縮めたのは、どうやらユメだけではないようだ。

「あなたの決意は立派ですけど、ここがどこかわきまえて？　ここは純粋に知を探求する場。政治や家柄などの事情に一切囚われず、まっさらな状態で学問に勤しむのがここの学院での第一の掟だったはず。クラス委員長ともあろうあなたが、まさかそれを忘れてはいないわよね？」

その場の空気全体をも威圧するようなフローラの剣幕に、誰もが縮み上がっているようにみえた。フェーナの前に立っていたおさげの女の子はそのまま呆然と立ち尽くしていたが、だらりと垂れた腕が小刻みに震えている。

だがフェーナも負けてはいない。怯む様子を全く見せないどころか、余裕の笑みを浮かべる。七大貴族の中でもその力は絶大と言われている、日の精霊。その長ソラの妹という誇りが彼女をここまで強くしているようにみえた。

「全く耳が痛いですわ。さすが生徒会長。まるで模範解答のようなお言葉。しかし生徒会長のように優秀なお方であればもうお気づきでしょう。知の探求、その中で重要な位置占める「理論」、そこには限界があるということを。いくら「理論」を深く学ぼうとも、それが現実世界で通用するとは限らない。むしろ通用しないことが多い」

そこでフェーナは一拍間をを置くと、いくらか語気を弱めて続けた。他の者に主張するというよりも、どこか自分に言い聞かせて確信を強めようとしているかのようだ。

「私達が生きているのは「理論」の中ではなく、現実。日の精霊に代々し伝わりし言葉、「汝らの現世がいづこにあるか考えよ」。言うまでもなく、かの名高き日の精霊の始祖、アポロンのお言葉。現実に起こっていることを無視しての「知」にいかばかりの価値があると思われるのですか？」

「言葉を返すようで悪いけど」

雄弁なフェーナに少しも気後れする様子の無いフローラが、苦笑を交えて反論する。先程から全く笑っていない目を一瞬直視したユメは、背筋が寒くなる気がしてすぐに視線をそらした。

「フェーナ、あなた何か勘違いをしているんではなくて？　この学園の知がいつ現実を無視したと？　王宮や王国への現代研究が積極的に進められているのをまさか知らないとでも――」

「生徒会長。私がいう現実はこの学院での現実です。生徒会長というお立場から、気づいてないということではないでしょう。国王様が今や王位継承者選抜の公示をなされた今、元来この学院に水面下であった第一王子を支持する者と第二王子を支持する者、通称、前者を第一派と第二派の対立が今や顕在化してるのはごまかしようない事実。第二王子の婚約者であられる生徒会長は言うまでもなく、第二派のお方。いくら中立や無関心を装っても他のものからすれば、それが確固たる事実ですわ。そして私は」

フェーナの視線がフローラからユメに移る。ユメは思わず息をとめた。彼女の言葉の一つ一つが突き刺さるように鋭い。なんとなくパートナーを引き受けたユメにとって、フェーナの心に据えた覚悟はあまりにも自分からは遠い・・・・・。

「第一王子ウーヌム様を王位継承者争いでサポートするパートナー役。つまり、ディアナ・クレセント、あなたは、疑いようもなく私の敵です。私が馴れ合うつもりがない理由がお分かりになって？王位継承者争いと言っても、試されるのは王たる資質。本人の能力は当然のことながら、それ以上に多くのものを従える統率力が重要。そのことに関して私達一人一人がいかにしてこの争いに関わるかは、絶大な影響力をもつ。お分かりですか、フローラ生徒会長。ここ学院にも、ここでも継承者争いは繰り広げられる。他が何と言おうと、私はそのつもりでこの学院に、ここの戦場に身をおくつもりです」

フローラは未だ睨みつけるような視線をフェーナに向け、体内から発散されているような威圧する空気でもって他の生徒を黙らせているが、ユメはフェーナに対し感服せざるを負えなかった。

厄介事。それは抗いようもない事実。王位争いなど、できれば関わりたくなかった。この世界での新たな生活を第二の人生というならば、それは静かなひっそりとしたものでありたい。

そう思いつつ、うっかり足を踏み入れたこの争いは、本人やフェーナを始めとして当事者にとってはこんなにも重要な、相当の覚悟

と共に自分をその境地に据える、ユメの想像を超えたところにあるものだった。

フェーナのような気の強い性格は苦手だが、嫌いにはなれないような気がした。彼女は目立とうとして宣戦布告したのではないことは分かっていた。彼女はフローラ、そしてユメに忠告したのだ。全力でユメと、いやラクス陣営と対峙するつもりであると。

しんと静まり返った教室。口を開くのも、息をするのに微々たる動きをするのもためらわれた。そこへユメ達が入ってきた教室のドアの方から、堂々とした拍手。

いつの間にか校長がそこに立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0087i/

LOST　SPIRIT

2011年12月11日21時45分発行